

ノシ棒：短編集（ポケモン追加）

ノシ棒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

短編集です。

ちよつとした短編をちよつとした感じにのせていきます。

活動報告や感想などに要望やネタを書いてくれると嬉しいです。
続きを書く気力になりますぞ！

しかし更新と終わりを求めてはいけません。
いけない。

目次

緋弾のアリア／HK	1
戦国無双／side：N1	8
戦国無双／side：N2	11
戦国無双／side：N3	16
東方Project 幻想郷の傘屋さん1	23
東方Project 幻想郷の傘屋さん2	31
艦隊これくしょんT1	38
モンスターハンター1	43
ぽけもん黒白1（ポケットモンスターブラック・ホワイト）	50
ぽけもん黒白2	57
ぽけもん黒白3	67
ぽけもん黒白4	77
東方Project 幻想郷の傘屋さん3	85
東方Project 幻想郷の傘屋さん4	91
東方Project 幻想郷の傘屋さん5	100
東方Project 幻想郷の傘屋さん6	111
魔法少女マジか☆マミさん1	149
魔法少女マジか☆マミさん2	165
東方Project 幻想郷の傘屋さん7	178
東方Project 幻想郷の傘屋さん8	196
ぽけもん黒白5	213
ぽけもん黒白6	236

緋弾のアリア／HK

遠山キンジは武偵養成学校に通う、学生武偵である。

増加の一方を辿る凶悪事件、いつ終わるとも知れぬテロリズムの応酬、文化的社会的背景による都市潜伏型犯罪への以降……。

犯罪率は跳ね上がり続け、解決の糸口さえ見つけることが難しい。警察機構は堅実なれど、組織対応では間に合わない事例ばかり。

結果、悪が笑う。

これが世界の現状である。世は正に暗黒時代に突入していた。

しかし、世界は、世界に芽吹く小さな正義の灯火は、決して消えることはなかった。

増加し続ける犯罪へのカウンター機能として、世界は、民間の力を用いることを決めたのだ。

武偵の誕生である！

それは、組織の枠に囚われず、個人の資質を問わず、火器の使用を問わず、数をもつてして悪を討つことを理念とする。

即ち、武偵とは『武』力を持って悪を徹『偵』的に追い詰める、正義の体現者なのである！

「立てこもり犯の人数、不明。武装、不明。室内のマップ、突入ルート……全て不明。くそっ」

ここに、心折れかけた武偵が一人。

遠山キンジである。

確かに武偵は個人の資質を問わぬと述べた。耳障りは良いが、それだけである。数を確保するためのだけの方便だ。捜査の基本はマンパワーであるのだから。

結局のところ、悪との直接対決を求められる武偵は、個人の力量が全てである。

キンジは己の力を信じていない。

兄に憧れて武偵学校へと入学した。

希望を胸に己の研鑽に励んだのは、悪に苦しめられる人々のためだ。己の力が皆の一助となればという、純粋な夢からだった。

しかしその夢は、最悪の形で裏切られる。
ある事件があった。

その事件の最中、兄は死者を一人も出す事なく救い……そして死んだ。

ここまでは良い。ここまでならば。悪に怒りを燃やし、兄の志を継いで武偵の道を歩み続けることが出来ただろう。

だが、世間は、世論は、キンジの兄をさも悪の如く責め立てた。

曰く、犯罪を未然に防げなかった無能の武偵、なのだそうだ。

この時までキンジは、無辜の人々を守るべき存在であると、守るべき無力な者達であると思っていた。信じていた。

だが、そうではなかった。

守るべき人達は、キンジなど容易く葬り去る程の力を持っていたのだ。

悪意である。

無能の武偵、武偵の面汚し、こんな奴が武偵をやっているから犯罪がなくならないのだ……。

心無い言葉は遺族であるキンジへと、容赦なく突き刺さり、そして押し折った。

いかに夢と希望を胸に抱いた少年であれど、無数の悪意の前には無力であったのだ。

守るべき人達に虐げられ、しかし夢の残滓からは逃れられず、キンジはこうして武偵校の底辺で汚泥を啜る毎日を過ごしていた。

もう、辞めてしまおう。武偵を辞めて、一般校へ行き、普通の生活へ戻ろう。全てから目を閉ざして。

そう決めたのは、最近のことではない。
そんな時である。

心折れたキンジの前に、一人の少女が現れたのは。
「無事でいてくれ……アリアー！」

アリアという少女は、ある日突然、唐突にしてキンジの前に現れた。そして生来の強気によってキンジの手を引き、挫折の底からほんの少し、大きなほんの少しの一步をキンジに歩ませた。

キンジがアリアにある種特別な感情を抱くこととなったのは、当然のことである。

アリアは無実の罪で捕らわれた母を救うために、パートナーを欲していた。

キンジはアリアを守ることに、枯れた心の内が変わりつつあった。

その矢先の出来事である。

テロリスト集団による国際要所施設立て籠もり事件発生。

それは、キンジとアリアが追っていたテロリスト集団とはまた別の団体。

個々人の能力によるテロリズムではなく、集団戦、数で押し寄せるタイプの集団であった。

偶然付近を警戒中であつたアリアが独断により先行。立てこもり現場へと突入をした、と報告があつたのが今より数十分前。

そして、たつた今、無線を使って武偵無線の周波数へと割り込み通信がされた。

たつた一人で突入してきた馬鹿な武偵の小娘を捕らえた。

我らが大儀を示すため、見せしめに処刑する……と。

「駄目だ、駄目だ、駄目だ……！ ヒステリアモードにさえなれたら！」

アリアは単体で見ればSランクの武偵だ。

しかしそれは、個人単位での戦闘力ではない。少数相手であるならば、宿敵である異能者テロリスト達相手であつても遅れを取ることはない。

今回の相手は、異能者ではない。

数十人規模の訓練を詰まれたテロリスト集団である。

相手が“犯罪者”ではなく、“軍隊”であつたならば……アリアの資質による優位性もその限りではないだろう。

焦燥に駆られるキンジの全身から汗が噴き出す。

キンジにはある特殊な体質があつた。

『ヒステリアモード』。

正式名称ヒステリア・サヴァン・シンドローム……HSSが強く発露した状態を指す状態である。

ある条件下に脳内で特殊な切り替えスイッチが発生し、身体能力、思考速度等を一定時間著しく向上させることの出来る体質を言う。

この体質、能力は男性に強く作用する。子孫を残す。そのために女を守る、という雄の本能が能力発動の根幹にあるためだ。

即ち、能力発動のためのある条件とは、性的興奮である。

この条件を満たしH（ヒステリア）モードとなったキンジは、アリアでさえ凌ぐ戦闘力を有している。

何十という銃から発射された弾丸の軌道を、一瞬で予測し、避け、ナイフで切り落とすといった人間離れした技も可能だ。

この状態のキンジとアリアが揃えば、いかに相手が軍隊といえど、勝機は見えてくるはず。

しかし。

「興奮……興奮しないとー！ 駄目だ、何も無い……！」

周囲には何も無く、人の気配すら感じられない。

人は刺激がなければ、興奮できない。当然である。

妄想によってカバーしようとする、このような非常時には、キンジのイメージ力では昂ぶりを得られない。

事件解決に導く武偵の力……「導偵力」とでも言おうか。

キンジにはそれが欠けていた。

なまじ、見目麗しい美少女達との接触が多かったからだ。

キンジはもはや妄想では、実際のモノを目にしなければ、興奮できない体となっていたのだ。

「これじゃアリアが……くそっ、汗が目」

ポケットから取り出したハンカチで、乱暴に顔を拭う。

こういったハンカチを常に持参するといった、身だしなみや紳士力を常日頃からいついかなる時も高め応用しているのは、家系の教育の賜物である。

「な、なんだ？」

キンジが浮かべたのは純粋な疑問。そして困惑である。

汗を拭ったハンカチが、吸い付いたように顔から離れない。
否、これはハンカチではない。

これは――。

「これは……パンティーじゃないか!」

そう、パンティーである!

しかもこれは、アリアのものではないか!

見間違いではない。セーラー服のまま激しいアクションをこなす
女子武偵は、スカートが翻り中が見えることなど日常茶飯事。

本人達も気にするものは多くはない。

よって女子武偵達には、派手すぎず、しかし質素すぎない、可愛らしくキュートなものが多用される。

所謂「ミセパン」というものが好まれる傾向にあった。

ミセパンだから恥かしくないもん。というのが武偵女子のキャッチコピーである。

たかがパンティーと侮るなかれ。

武偵ともなればそれはただのパンティーの枠には収まらぬ。ただの薄布の枠に収めてはならぬ。

命と命の削りあい、真の勝負の中に最後に身を守る砦……そう、勝負。パンティーなのだ!

「フオツ……いい、いかん! 顔からパンティーが離れない!? まるで俺の顔と一体となっているかのようだ……!」

キンジの頬に当たるパンティーの布。色。そして、香り。

瞬間、キンジの脳裏に今朝の光景が浮かび、稲妻の如く全身を駆け巡った。

紆余曲折合ってアリアと同居することとなったのは、最近のことである。

そして、今朝のように脱衣所でシャワーを浴びようとしていたアリアと鉢合わせになることも、一度や二度ではない。

その後はこれもいつものように、報復のナイフと銃弾が水平の雨となり飛び交うこととなるのだが。

問題はそこではない。

このパンティーは、今朝、アリアがシャワーに入ろうとし、足首に引っ掛けていたものだ。

それがなぜか、ごたごたがあつて無意識に掴んでしまったのかこのポケットの中で、しっかりと保存されていた。

合成洗剤によつてアリアの残滓が洗い流されてはいない、生、そのもの。

そう、脱ぎたてパンティーと言い換えても過言ではない！

「この肌に吸い付くようなフィット感！ もはやパンティーと俺の皮膚が一体化している！ い、いかん……！」

しかし、なんだ、この体内からわきあがるマグマは……！ この罪悪感を打ち消すようにわきあがる、マグマはア……！」

その時不思議なことが起こつた！

パンティーが、キンジの顔面を侵食し始めたのだ！

「フオオツ！ フオオオツ……！ い、いかん、いかんいかん……！ なぜ俺はパンティーを被っているのだ！ これじゃまるで変態じゃないか！

こ、こんな姿、アリア達には見せられない！ しかし、うう……つ、俺の湧き上がるマグマがあ……ツツ！

ま、マグマがあ……ツツ！ ウツ——！」

キンジのHモードは不完全なものであつた。

「格好付けの極みだ」と、キンジの祖父はそれを評したことがある。

Hモードの真髄とは、能力の解放、リミッターの解放……そう、自らを解き放つところにある。

とかくむき出しの、裸の自己とは醜いものだ。

つまりHモードを有する者は、須く自らの『病的興奮』のカタチを持つているということだ。

あるいは女装によつて。あるいは芸術や美術品によつて。あるいは写真媒体によつて。

かつて名裁きに名を馳せた祖先など、露出によつてである。

そう、キンジにはHモードへと移行するためのスイッチ……病的興奮のカタチが、無かつたのだ。

よって、女を守るといふ本能のみに従い、キンジは増加した精神力によつて無理矢理リビドーを捻じ曲げ、本来とは全く別の形のHモードを発現していたのである。

装う、というカタチで。

キンジがHモード時は歯が浮くほどに気障となるのは、この「装い」のためであった。

その最中、様々なHモードの形態も開発されてきた。

元より加工されたもののため、多種多様なHモードを発現できる、という強味があつた。

だが、全てまやかした。

カタチを得た、真なるHモードの前には見戯である。

「もう、だめだ……俺は、もう……俺は、もう」

真なる己。内なる自身。

本当の自分が、内側から、あらゆる殻を脱ぎ捨てて生まれ出んとしている！

それはキンジ自身にさえ、止める術はない——！

そう、今ここに、自分自身を——解き、放つ！

「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

ヒステリアモードとは、キンジが己の家系を恥じて作った造語である。

すなわち、これも装い……偽装によつて生み出されたまやかしであると言えよう。

ならば、全てを脱ぎ去つた真なるHモードを、そう称するのは誤りである。

「気 分 は エ ク ス タ

シ———
!!!!」

真なるヒステリアのカタチ。

さあ、今こそその本来の名を呼ぼう。

「クロス・アウツツツツ!!!」

遠山キンジ——返對（へんたい）モード、開眼。

戦国無双／side：N1

時は戦国、安土桃山時代。

群雄割拠にして、天下を分けたるは戦国の世。

例え親と子といえど、血を分け合おうとも、骨肉の争いに転じねばならぬ。

例え恨み積年の怨敵といえど、利のためには手を取り合わねばならぬ。

血で血を洗う、戦乱の時代である。

だが――。

自分は、知っている。

戦乱の世は終わるということ。

信長という一人の天才が現れ、それに続く羽柴秀吉、徳川家康によって、この国は日本として統一されていくのだということ。

果たして、ここが戦国時代であると、それに気付いたのはいつ頃であつただろうか。

産まれて間もなく……否、もっと以前であるだろう。

今生の母の胎に宿る前の――。

「ようやった、阿古。ようやった!」

「久政様……はい、ですが、ああ、ああ、この子は」

「いや、これでよいのかもしれない」

「ああ、このようなことが……坊や、わたしの可愛い坊や。お願いだから、泣いておくれ……母に声を聞かせておくれ」

さめざめと涙を流す女の腕の中で、意識がゆっくりと浮上する。

我は思うが故に我であるのだと、誰が言っただろうか。

目はへその尾を切った時、薄らと、一瞬だけ開いた目で見えたのは、火の灯りに照らされた薄暗い室内。

手を湯で洗う産婆と、自分を抱く女、その女の背を大事そうに抱える男がいた。

男の手に、この身が受け渡されるのを感じた。

母との繋がりを断られた寂寥は、以前の自分が死んだ時に感じた、

あの感覚とどちらが重いものであるだろうか。

そう——以前、だ。

今生の生ではなく、ここに産まれたばかりの赤子は、己は己であるなどと、分別を弁えて物事を考えている。

赤子に物事を考える頭はない。

思考は言葉だ。人間の思考は、言語によって成り立つものである。言語を持たない赤子では、思考するという高度な精神活動は望めない。快不快の原則に従うのみ。

であるならば、この思考はきつと、魂が巡らせているものなのだろう。

前生が唐突に終り、今生が始まったのだ。魂の實在は疑うはずもない。

転生、という言葉が、魂の内側に木霊する。

そう、自分は、転生を果たしたのだ。

「当家に産まれたが長子は、泣かぬ赤子か……許せ。某の子として産まれて来たばかりに」

男が、この身を、母とは違う力強い腕で、しかし同じように温かく抱きとめたのを感じた。

「泣けぬのならば、笑えばよい。どうか笑ってくれ。子が産まれると聞き、六角の者共に頭を下げてまで駆け付けずにはおられなんだ、この父を。」

情けをかけられた某は、もはや逆らうことは出来ぬのだ。静かに、静かに時を過ごすしかない。

許せ、我が子よ。我が妻よ。泣かぬ鬼子が産まれたるは、某の業によるものと恨め」

今生の父よ。今生の母よ。

ああ、嘆くなかれ。

あなた達に罪はないのです。

この身はあなた達の子として産まれたけれど、この魂は。

「神も仏もおらぬ世なれば、夜叉となりて生きるしかあるまい。お前は今日から、夜叉を名乗るのだ。汝が名は——」

座らぬ首に気を付けられながら、高く天へと掲げられる。

今生の名が、今生の父より授けられた。

「某が、浅井久政の子。浅井家が長子——猿夜叉丸ぞー！」

この時、首が座っていたならば、なるほど、と頷けたらどうか。

夜叉とは、前世で産まれていた時代の日本で言う所の、悪魔、という意味である。

キラキラネームかと断じるなかれ。天才丸、奇妙丸……このような幼名が溢れ返っている世である。この時代の価値観から考えるに、これが普通なのだろう。わざと奇天烈な名を幼名として授け、疫神に嫌わせて死を遠ざける呪いなのだ。

年を追う毎に、その人と生り、功績に則した名と変えていくのが習わしである。

となれば、この猿夜叉丸……某（それがし）も、いずれは父の言う、浅井の長子たるべき相応しい名を名乗ることとなるだろう。

そう——浅井家長子、浅井長政の名を。

戦国時代指折りの死亡フラグを持つ男の名を。

戦国無双／side：N2

十日後の城内にて。

わんわんと、いつまでたっても鳴り止まぬ幼児の泣く声。

質素な、しかし質の良い桜色の着物に身を包んだこの大粒の涙を零す女兒こそが、お市の方であるらしい。

周りにいる大人達が右往左往としている様は、何とも面白可笑しいが、お市の方はまるでこの世の終わりだとても言わんばかりに声を張り上げては泣き叫ぶ。

「おおっ、これは猿夜叉丸様、よいところに！」

「見ての通り、先ほどから姫君が泣きやんでくれず、皆とんと困り果てておったのです」

「良き武将となるには、女人の扱いにも長けておらねばなりません」

「ささ、猿夜叉丸様、あとは若い二人で時をお過ごしなさいませ！」

「ささ、さささ！」

「ささささささ！」

「お前達あとで覚えておれよ……」

一瞬で退室していく大人達。

一気にならんとした室内に、ひぐひぐとしゃくりあげる女兒の音が響いていた。

何ぞかんとシリアスぶってはいたが、某の周りにはこんな大人たちだらけ。

と、つられて泣きたくなる猿夜叉丸であった。

ともあれ、お市の方である。

「お市殿、お市殿、そろそろ顔を上げてはもらえないだろうか」

「うえっ、ぐ、ひっ、ぐ……えええん、えええん」

「ああ、ほら、そんなに目を擦るものではない。顔が腫れてしまうぞ。そんな顔をしていては、綺麗な着物が台無しだ。

せっかく可愛らしいお顔をしているのだから、ほら、顔を上げて」
言ってから後悔する台詞とは多々あるものだ。

齒の浮くような己の言葉に胸中で唾を吐きながら、手ぬぐいで顔を

拭いてやる。これくらい解り易くなければ、幼児には伝わらぬだろう。

目を擦るなど言われてその通りに、なすがままにされているのだから、この女兒は存外素直な性格をしているようだ。

こんな鼻水と涙を垂れ流しているような女兒が、魔王の妹とは到底思えない。

「いったい何がそんなに悲しいのだ。某に教えてくれぬか」

「ぷりんが……ぷりんがいなくなっちゃったの」

「ぷりん……？　なんだそれは」

「いちと、ずつといっしょだったの。でも、いなくなっちゃったの。いちのこと、きらいになっちゃったから……うう、うう、えええん」

「ああ、ほら、泣くな泣くな」

要領を得ない話であったが、まとめると、どうやら飼っていた動物が逃げてしまったらしい。

このお市の方は見た目と違ってお転婆のようで、城内に着いて即、探検だやたらと広い庭を走り回っていたところ、その動物とはぐれてしまったらしい。

それが、自分が嫌われたから、どこかにいってしまったのだ、と思ひ込んで泣いていたのだ。

初めて来た場所で、よほど懐いていたとしても、動物をリード無しで離し飼いにしてはそれははぐれてしまうだろう。

しかし犬か猫か、はたまた鳥かは解らぬが、ぷりん、という名前は驚いた。

一瞬前世で食したことがある甘味が思い浮かんだが、冷静に考えれば子共特有の、擬音というか意味を成さない音で付けた名前だろうと思ひ至る。

「大丈夫。きつとすぐに見つかるさ」

「でも、ひつぐ、ぷりんが、いちのこと、きらいだったら、うつく、もう、もう……うええ」

「ぷりんは、お市殿のことを嫌ってはいないよ」

「ほん、とっ」

「本当だとも。なんとならば、この某が探しに行ってもいい」
本音は、この女兒を放って置きたいというものであったが。

「いっしょ、いく……いちもいっしょ、いく」

「いや、お市殿はここで待って」

「うええ」

「わかった、わかった！ 一緒に行こう！」

さあ行くぞ、と振り向いた猿夜叉丸の手を、ぐずぐずと鼻を嚙りながら、極めて自然にお市の方は絡め取ったのであった。

途端に襖の向こうから聞こえるひそひそ声。

「さすがは若君よ」

「さす若」

「手が早いとう、よきかなよきかな」

「女泣かせは武将の甲斐性よ。わっはっは」

「しかし相手はあの尾張の妹君ぞ。これで縁が結ばれるようなことがあつては事では？」

「よい、よい。これで若が籠絡なされれば、内側より骨抜きに出来るかもしれん。尾張に打撃を与える一手と考えれば、愉快なものよ」

「聞こえておるからなお前達」

もうどうにでもなれ、と言わんばかりの顔で、お市の方の手を引いて、猿夜叉丸は庭へと足を向けた。

「あの……」

「うん？」

「おなまえは、なんですか？ いちは、いち、だよ！」

「ああ、聞き及んでいる。良い名だ」

「えへへ……」

「某は、今は猿夜叉丸と申す」

「さるやちや。さりゆやちやまりゆ？ ん……おさるさん？」

「それは、ちよつと。太閤は某には荷が重い」

「じゃあ、なんてよべばいいの？」

「ううむ……そうだな。ええい、仕方ない。長政と呼んでくれ」

「ながまさ、さま？」

「そうだ」

「ながまささまー」

「うむ。だがその名は、もうしばらく隠しておいてくれ。予定、だからな。ここだけの秘密ということにしてほしい」

「どうして？」

「渾名だ、渾名。まだそう呼ばれるには早いのだ」

「えと、じゃあ、ながまささまのことながまささまってよぶのは、みんなにはないしよにするね」

「うむ」

「いちとながまささまだけのひみつだね！」

「ああ、そうだな。さあ、ここから庭に降りられるぞ。ほら」

空が眩しい。

日の光が目染みだした。

新鮮な空気が鼻腔を抜け、肺を涼やかにしていく。

少しばかり、涙腺が緩んだ。

こんなことで心動かされることはない、思っていたが。

「どうしたの？　ながまささま、どこか、いたいなの？」

「いや……久しぶりに外に出たからかな。日の光が眩しかっただけだよ。さあ、ぷりんを探そう」

ぷりん、ぷりん、と叫んではみても、何の音も音もしない。

あらかた庭を探し終えたが、姿が見えないとなると、裏の林が怪しいか。

城というものは攻められることを想定して、山の上に築かれているものが多い。

猿夜叉丸が軟禁されていた城も同じであり、城壁に囲まれてはいるものの、しかしその直ぐ脇に天然のより強固な城壁が、生い茂った木々が並び立っているような造りとなっていた。

探しても見つからなかったのだから、向こう側に行ってしまったと考えるのが妥当だろう。

どうしようかと思案する猿夜叉丸だったが、またお市の方がぐずり始めたため、仕方なしと、崩れた壁を二人して潜って外へ。

産まれて初めて踏んだ城の外の土は、不思議な感動を与えてくれるものだったが、今はぷりんの搜索が第一である。

あまり浅井家縁ではない城内の者達に、お付きもおらず外に出ている姿を見られたくは無い。

「ぷりんー、ぷりんー！ どこー！」

「ん……？ 今、何か動いたような」

「あ、あそこー！」

「ああ、走ってはいけないよ。藪の中じゃないか。どれ、某が行つてくるから、ここで待っているように」

「はい、ながまさまー！」

落ち着かせるように繋いだ手を二度ほど軽く叩いてやると、ぎゅつと一度強く手を握ってから、お市の方は力を抜いた。

やれやれと頭を振って藪の中へ踏み込んでいく。

運命の出会いがそこにあった。

こんなにも早くお市の方と出会うなどと、思ってもみなかった。戦国の世で契りを結ぶのは、結納の当日までお互いの顔を知らぬということも多々あるという。

確か長政とお市は、尾張と近江の同盟における政略結婚だったはず。

自分もきつとその日まで、お市の方の顔を見ることはないのだろうと思っていた。

出会ったその日から、死へのカウントダウンだと覚悟していたのだ。

それがこれだから、歴史というものは面白い。

記されていないなかっただけで、今日の日のような、後の世からみれば驚くべき事実がまだまだあるのだろう。

知らぬ事が積み重なれば、いずれは未来も変わるだろう。自分がその一石を投じることになれば、更に、だ。

自分の知る日本史ではないことに、今はただ、素直に喜びを感じるばかりである。

「ぷりんー、ぷりんよーい。いたら返事をしてくれー、ぷりーん」

「ふう？」

「おお、こんなところに、おった、か……」

「ぷりんー！」

この瞬間、猿夜叉丸に電流が走る。

時が凍りついたようだ。

はたして、そこにぷりんは居た。

居たのである。

桜色の体毛。

巨大な眼球。

小さな手足の生えた球状の体——これは、この生物は。

「ぷ……ぷりん？」

「ぷりん？」

「いや、プリンじゃねえよ！ プリンじゃ！」

「ふう、ふふぷりーん！」

「えっ、マジでプリンなの？ マジで!?!」

これまで培った戦国に生まれしおのこ、武将としての教育の全てをかなぐり捨てて叫ぶ。

そこに居たのは、プリンであった。

間違ふこと無き、プリンであったのだ！

目を擦ってもプリン、頬を抓ってもプリン、触ってみてもプリン、触れられて嬉しそうにしているプリン！

どこからどう見てもプリン！

誰が見たってプリン！

ちよつと鼻歌を歌う姿は正しくプリン！

プリンじゃなくてプリン！

小さい体にデカイ目玉が正直気持ち悪いぞプリン！

可愛いわんちゃんだと思つた？ 残念、プリンだよ！

否定しても無駄！ どう見てもプリンです！ 本当にありがとう

ございました！

全国図鑑NO. 039、全長0.5m、重さ5.5kgのプリン！

そう——ポケットモンスター、ふうせんポケモンのプリンである！

「なにが、一体なにがどうなって……」

「ぶーいー！」

あ！ やせいの イーブイ がとびだしてきた！

「じゃない！ 今度はイーブイとか、どうなってんだあ!?!」

「いぶいー?..」

取り乱す猿夜叉丸に、小首を傾げる野生のイーブイ。

そう、全国図鑑NO. 133、全長0.3m、重さ6.5kgのしんかポケモン、イーブイである。

猿夜叉丸はこんらんしている。

「ぷりーん」

「いーぶいー」

「あああ可愛いいい……ちくしょう……ちくしょう……！」
訳が解らないながら、じゃれあう二匹を腕に抱えて草むらから出る。

二匹合わせて10キロ超の重量ではあったが、チートと言える程のスペックを誇るこの時代の武将ボディでは軽いもの。

ふらつきながら帰ってきた猿夜叉丸の腕の中にあるプリンを見て、お市の方が歓声を上げた。

「わあ、ぷりんだあ！」

「ぷりん」

「あのね、ぷりん、わたしのこと、きれいになっちゃった……？」

「ちがうぷりん」

「おい今こいつしやべっ」

「えへへ……よかったあ。ながまささま、ありがとう！」

「う、うむ……なあ、お市殿よ、その、それは」

「ぷりんです！」

「ああ……ぷりんは、その、なんだ。ぽ、ぽ、ポケモン……なのか？」
きよとんとして首を傾げるお市の方。

その様子を見て胸を撫で下ろす猿夜叉丸。

正直、この時代でポケモンと口に出すだけで、恥ずかしいというか何と言うか、そう、自害したくなる。

どうやら記憶のかなたにある、あの携帯獣に良く似ているだけの、新種の動物であるようだ。そう自分を無理矢理納得させられそうだ。

「ぽけもんだよ？」

がつくりと膝を着いた猿夜叉丸。

力なく地を握る指先を、心配そうにお市の方とイーブイが撫でていた。

「わあ、かわいい。いちしってます。このこ、イーブイですよね！」

「ぶーいー！」

「このこ、ながまささまといっしょにいたいって！」

イーブイの鼻先が猿夜叉丸の手をくすぐる度、なにか電流のような、不可思議な感覚が身に奔るのを感じる。

感じる、が、そんなものよりも、全身を叩きのめすショックの方が大きかった。

なんだよ、イーブイってお前、あれか？ 色んな属性に進化しちゃったりするの？ 炎系は不遇のままなのか？

いやいや、それより何よりも、だ。

「ガチでポケモンじゃねえか……！」

「うふふ、へんなながまささま」

「いかん……いかなぞ……！」

危機感を胸に、イーブイを抱えて城へと走る。

まっつてえ、と涙声のお市の方の声があったが、気にしてはいられない。

とりあえず適当な浅井家縁の家臣を見付け、問い質す。

「おい、そのの！」

「これはこれは、若、どうなされました？」

「これ、何に見える！」

「ほほう、これは立派なイーブイですな！ しかもリンクが繋がっておるようで。そうですか。若もポケモンとリンクを……おお、ご立派になられて」

「やっぱりポケモンとか、イーブイとか……リンクとはなんなの？」

「ポケモンとブシヨールとを結ぶ絆のことでございます。これが結ばれておらねば、ポケモンは逃げてしまうのですぞ」

と、普通に答える家臣その一。

リンクという横文字が前触れもなく登場したが、恐らくはモンスターボールシステムに類するものと予想する。

これも無理矢理に納得するしかない。

戦国時代でポケモン考察をしなければならぬ現状に、猿夜叉丸の何かのゲージが危険域にまで達しようとしていた。

「これは、まさか、某の常識の方が間違ってるんじゃない？」

「どうされました若、おお、そういうえば姫君はいずこに？」

「ながまひやひやば、まっつてえ……！ ながまひやひやばあ！」

「おお、お市の方！ これ若！ 幼子といえど、女人は女人、無体に泣かせてはなりませんぞ！」

「ぐぬぬ！」

お市の方をしがみつかせて落ち着かせる。

何が何やらもう解らぬ。

家臣はそんな猿夜叉丸の姿を見て、なぜかしきりに感心したように頷いていた。

「しかし、若もこれでブシヨーの仲間入りですな。ポケモンを携えてイクサの場に立つも、もう直でしょう。

これはやはり、お父上である久政様には御隠居して頂き……」

「ええい、そんなことは後だ！ イクサとはなんだ、なんだその発音は、戦じやないのか！ 教えてくれ！」

「おお、幼くしてイクサへの意欲溢れるは、流石は浅井を背負う男子ですな。何と勇猛な！ 僭越ながら、この爺がお教え致しますぞ！」

イクサとは。

ブシヨー達がリンクしたポケモンを持ち寄り、軍を作り、それを戦わせるポケモン合戦を指す。

「二人のブシヨーにつき、一匹のポケモンを従える。お互いの間に築かれしリンクを、どれだけ高められるかが名ブシヨーの資質なのでしような。

当然、そこにはお互いの相性というものがあります。探しませい、若。若だけのベストリンクを！」

「やめろ。横文字を使うな」

「ぶーいー！」

「これは……！ おお、若！ はやベストリンクポケモンを見付けておりますとは、流石ですぞ！」

「ながばひやひやばあああ」

「やめろ。これ以上泣いたら某も泣くぞ」

ほっほっほ、と笑う爺を、自分が大人だったらぶった斬ってやれるのに、と思う猿夜叉丸であった。

お市の方がしがみ付いている袖がもう、べしよべしよになっていてつらい。

「その……イクサ、とやらに負けたら、どうなるのだ？」

「敵方に下るか否か、そのどちらかでしょうな」

「下らなければ、どうなる？ 受け入れられなかったら？」

「首をとられまする」

「そこはシビアだなー」

「しびあ……？ ばてれんの言葉でございますか？」

「あああこいつは、こいつらはあああー！」

頭をかきむしった所で何も変わらない。

この世界では兵の数≡保有ポケモンの数。

リンクとやらの働きで、正しく一騎当千の力をポケモンは発揮するらしい。

そしてイクサに負けたらば、降伏か、死のみ。

ここだけは覚悟していた通りなのが嫌になる。

つまり自分は、今後、ポケモンバトルで生死を決める戦いに、身を投じねばならぬということだった。

馬鹿か。

「しかし若がそれほどまでにやる気とは。若がブショリーリーダーと成られる日も近いやもしれませんなあ」

「もういいよ、教えろよ、疲れたよ、ブショリーリーダーってなんなんだよ」

「ランセ地方に伝わる伝説の城を手に入れし、ブショリー達のことですぞ。この国はもうずっと長い間、ランセの城取り合戦を続けておるのです。」

そう、後の世ではこの時代を、戦国時代と呼ぶかもしれませんが。ランセの世、と」

「何それ。某の知っている日本史と違う」

「ランセでの戦いに備えて、こちらでブショリーは部下たちにイクサを命じているのです。まあ、暇つぶしのようなものですな。」

自らの力を示す、示威行動なのです。こちらでの勝った負けたは、正直どうでもよいでしょう」

「おい、犠牲になった武家と農家の人達に謝れこら」

「この国の歴史とは、即ちランセの歴史。ランセ地方の覇者となった

者が、この国を手中に収める、天下人となるのです！」

「違う、なんか違う！」

爺の言葉を聞き、猿夜叉丸は膝から崩れ落ちた。

両の瞳から、滂沱の如く涙が零れ落ちていた。

その幼い涙は、枯れた老人の胸を打つものであった。爺の両眼からも、熱い血潮が溢れ出していた。

思えば、この猿夜叉丸は、産まれた時からまるで泣かぬ才児であった。

子はなぜ泣くのか。

母から切り離されて泣くのか。

世の冷たさに絶望して泣くのか。

いいや、そのどれも違う。

違う、と浅井一の家臣を自負する老人は確信する。

赤子はこの世に自らの名乗りを上げるため、声を張り上げて泣くのだ。

そう、今のこの猿夜叉丸のように！

おいおいと声を上げて泣きはじめる猿夜叉丸。

猿夜叉丸は今、この瞬間に！

この世に産まれ落ちたのだ！

「某の知っている日本史と違うううアアア！」

「うえええ、なかなかいでながばひやひやばあああ」

ランセ地方

ポケモンと心通わす

ブシヨーたち

17の城を手に入れた時

ランセの伝説が

よみがえる

ブシヨーと

ポケモンたちの

イクサが始まる！

長政——否、ナガマサのイクサは、今始まったばかりだ！

東方Project 幻想郷の傘屋さん1

しとしとと降る雨の中、青年が独り、丘を歩いていった。

傘も差さず、安物のスーツも濡れるに任せて、黙々と歩いていった。歩みを進める青年の眼は、何も映してはいなかった。瞳に濁りは無く、振り続ける雨の滴のように色が無く、透明だった。

考えて考え果てて、思考を放棄してしまっただかのように、表情は呆けていた。

重い足取りは、行く宛てが無いように思える。

項垂れて歩く様は、まるで迷子の様。

ふらふらと危なっかしい青年を盗み見て、外来人か、と多々良小傘はほくそ笑む。

これはこれは、随分とまた無防備な獲物が来たものだ。

外来人であるのだから当然だけれども。

奴らは皆、自分が害されるなどと、夢にも思っていないのだ。

一体どれだけぬるま湯に漬かった世界で過ごして来たのだろう、と妬ましく思ってしまう時もあるが、橋姫でもあるまいしそれを口にすることは無い。

自分は自分の仕事……ライフワークをするだけだ。生きるための仕事を。

さあ、恐れ慄くがいい。

人間め。

「うらめしやー」

わあ、と青年が声を上げて飛び退る。

しきりに首筋を擦っているのは、不快感を拭うためか。

わあわあど喚く青年に、満足そうに小傘は頷く。

やはり、こんなにやくはいい。

芋をつぶして灰汁に浸して固めただけの物体、こんなにやくは、いつも私に勇気を与えてくれる。

人間を驚かすには、こんなにやくを首筋に当てるのが一番だ。

「ふっふっふ、驚いた？」

青年は眼を白黒とさせながら辺りを見回していた。
当然だ。

声の主は今、空に居るのだから。

小傘は空中から、青年にこんにやくの一撃を浴びせたのだった。

雨音が強くなる――。

雨を受ければ受ける程、小傘の胸の内に暗い炎が燃え上がった。

憎い。

憎い。

人間が憎い。

私を捨てた、人間が憎い。

「だから驚け。もつと驚け。さあ、わちきを見て驚くがいいわ」

小傘は青年の前へと飛んで降りる。

急に現れた小傘に、青年はうわあと声を上げて尻餅を突いた。水溜りに腰を突いたようで、ぼしゃんと泥が跳ね、青年の安っぽいスーツの尻が、どんとんと茶色に染まっていった。

いい気味だ、と小傘は笑う。

それでは、トドメだ。

「当たって砕け、うらめしやー!」

ずずい、と小傘は肩に差していた薄紫の傘を、青年へと突き付ける。
ぎよろり、と眼を剥く傘。

傘には巨大な眼球と、大きな舌が生えていた。軸の先、取っ手には下駄が。小傘の傘は、化け傘だった。

小傘は人間ではなかった。小傘はからかさお化け、と呼ばれる妖怪だった。小傘の本体は、つまりはこの薄紫の傘であった。

さて、どのような反応を青年は見せてくれるのだろうか。と小傘はにやりとしたが、小傘が期待していた程、青年は驚いてはいなかった。

呆、としたまま小傘を見上げる青年。

もしや驚き過ぎて気をやってしまったのか、つまらない、と小傘が疑いを抱き始めた頃、化け傘の長い舌が、小傘の背を舐め上げた。

「.....あれ?」

はて、と小傘は小首を傾げる。

おかしい。

「化け傘の目玉と舌を、この青年に見せ付けてやったはず。だというのに、舌が背を舐めるとは、どういうことか。もしや、全く向きが逆ではないのだろうか。」

「もしかして……間違え、ちやつた？」

つまり、小傘は今、化け傘の裏を青年に突き付けていることになる。急に現れた小傘に驚いて倒れた青年だったが、見目が幼い少女と知るや、驚愕は疑問の表情へと変わっている。

また失敗した、と小傘は頭を抱えなくなった。なんだ、これは。

倒れた人間にただの傘を突き付けて、これでは馬鹿のようではないか。

「ええと」

ここでようやく青年が声を上げた。

戸惑いながら、青年は小傘へと話しかける。

「もしかして、傘、貸してくれるのかな？」

起き上がりながら手を伸ばした青年は、化け傘の柄を掴んだ。

変わった柄だね、などと言いながら、化け傘の下駄をそつと握る。

体から離れた感覚器から送られる刺激に、小傘はひやあつ、と驚きの声を上げた。

そして、うわつと両手で口を塞ぐ。

しまった。

自分が驚いてどうするのだ。

これではあべこべではないか。

「ありがとう、お嬢ちゃん」

小傘の手が離れた隙に、青年は傘をひよいと掲げた。

青年の頭上で、化け傘が眼を白黒とさせている。

小傘もどうすべきか解らなくなった。

どうしようか。

弾幕をばら撒いて逃げようか、と小傘が指先に妖力を集中させると同時に、青年がその指をそつと握った。

集中が乱され、妖力が霧散する。

「お嬢ちゃん、君の善意は有り難いけれど、さつきみたいなのは危ないよ。傘は刺すものじゃなくて、差すものなんだから」

「いや、そうじゃなくて、わちきはあんたを驚かせようと……」
「驚かせる？　もしかして、このこんによく、お嬢ちゃんが投げたの？」

「そうそう、それぞれ！　どうだ、驚いたかー」

「いや、まあ、確かに驚いたけども。でも今時首にこんによくって、ちよつと古いんじゃないあ」

「なんと、わちきが時代遅れともうすか」

「それはいいとして、駄目だよ、傘を人に向けたら。道具はちゃんと使ってやらないと、可哀想じゃないか。こんなに綺麗な傘なんだから」

「……あ」

「でも、ありがとう。もうずぶ濡れだから、あんまり意味は無いかもしれないけれど、嬉しいよ」

服が濡れちゃうよ、などと頬笑みながら、髪から水を滴らせて青年は小傘と並んで傘を差す。

どこに行くのかな、という優しい気な問いに、小傘は思わず、あつち、と指を指し示してしまった。

別段、どこかに行こうと思ってたわけではない。

ただ反射的に、指を指してしまったのだ。

どうしてか小傘は、凶暴な妖怪が出没しない人里までのルートを、この青年と一緒に歩くことになった。

道すがら、無言で歩き続けるのも気まずいと、何となく小傘は幻想郷について青年に語る。

やはり青年は外来人であつたらしい。結界で外界と遮断された異世界が在ったことに、ははあ、と感心していたようだった。

もちろん小傘は妖怪についても語つたが、これもどうしてか、自分がその妖怪であるとは言いだせずにした。

「どうしてこうなつたのか。うらめしや」

「君は変わった子だね。こんなボロ男を助けてやろうだなんて、今時珍しい思いやりを持つてる。ああ、幻想郷では珍しくないのかな」

「知らないよ、もう」

青年に手を引かれたまま、小傘は肩を落とした。

雨で体温を失った青年の手が、ひんやりとした冷たさを伝えてくる。

自分の手の体温が青年の手へと移ればいいのに、と小傘は何となく思った。

「……………ねえ」

「うん」

「さっき、この傘が綺麗だなんて言ってたけど、本当？」

知らず、握った手に力が込められた。

どうしてか。

どうしてか、小傘は、青年に問わずにはいられなかった。

本当はすぐにでも問い返したかったが、これも何となくすぐに聞く事がためらわれ、幻想郷の話だとか妖怪の話だとか、どうでもいい話題ばかり振っていたのだ。

青年はしきりに感心したように頷いていたが、本当に信じているのだろうか。

ここは異世界です、などと説明されたとしたら、自分ならばそう言った奴の正気を疑うか、これは夢かしらんと自分を疑うかのどちらかだろう。

青年の言葉が真実であるかどうかの確証が持てず、小傘は恐怖を抱いていた。

馬鹿な、と自分の冷静な部分が警鐘を鳴らす。

何を恐れているのか。

青年が幼子の話に相槌を打っているだけのお人よしだったとしたら、何だというのだ。

だというのにどうして、こんなにも心の臓が痛いくらいに脈打つ。

どうして、どうして……………こんなにも期待で胸が膨らむのだ。

その期待が打ち碎かれるかもしれないと、恐ろしく思うのだ。

今更人間などに、何の期待を抱いているというのだ。

「本当だよ」

「……嘘をお言いよ。穴だつて空いてるし、色も形も、まるで茄子みたいじゃないか。ねえ、正直に言っておくれよ。こんなヘンテコな傘、いらないうつて。」

オンボロ傘なんて捨ててしまえつて」

「捨てるだなんて、とんでもない。立派な番傘じゃないか。骨は痛んでいないし、穴もふさげばいい。これぐらいなら、俺でも直せるよ。」

「まだまだ現役だぜ、こいつは。番傘職人の居る町で生まれ育つた俺が言うんだ、間違いない」

「なんて、おどけたように肩を竦める青年に、小傘は飛び付いた。」

「いや、縋り付いた。」

その時には小傘にはもう、どうしてか、などと自問する余裕などなかった。

「ほんと？　ねえ、本当？　本当にまだ使えるの？　使ってもらえるの？」

「本当だとも。これだけしつかりした良い傘なんだ。使つてやらなきゃ、もつたいない」

小傘の全身に震えが奔つた。

雨の寒さに凍えたわけでも、先ほどから鳴いている雷に撃たれたわけでもない。

歓喜に小傘は震えていた。

嬉しい。

嬉しい。

震えが止まらない。

ぶるぶると震える手に、青年が怪訝な顔をして小傘と眼を合わせる。

大丈夫だよ、と頬笑みを返したが、うまく笑えているのだろうか。

たぶん無理だろうな、と小傘は思った。

だって、雨が眼に入ったわけでもないのに、こんなにも視界が滲んでいる。

「ねえ、お嬢ちゃん、どうしたの？ そんなに震えて、寒くなったの？」
「うん、そうだよお兄さん。だからもつとひつついてもいいかい？」
「それは構わないけれど。どこか具合でも悪いの？ 大丈夫？」
「大丈夫、大丈夫。嬉し過ぎて、死んじやいそうなだけだから。ううん、違う。消えちゃいそうなだけだから」

「それは大丈夫じゃないんじゃない？あ……」
「いいんだよ」

いいんだよ、ともう一度言つて、小傘はにっこりと笑う。

「恨みつらみ雨あられで、打たれて濡れて妖怪になったのなら、お天道様が晴れたなら、からつと乾いて消えて無くなるのは道理だよ。」

ね、お兄さん。笑つておくれよ。わちきはお兄さんのその気の抜けた笑い顔が、好きになつちやつたんだ。だから、笑つておくれよ。

そうじゃないと化けて出てやるぞ。うらめしやー」

「お嬢ちゃんみたいに可愛いお化けなら、大歓迎だよ」

「そうそう、その顔。あはは、なーんにも考えてないの丸出しの顔。あはははは」

「ひどいな。そんなに面白い顔してるかな、俺」

あはは、とひとしきりに笑つて、小傘は目元を拭う。

涙が出るのは、笑いすぎたからだ。そう思った。

「ね、お兄さん」

小傘は青年の手を離し、たつと傘から駆け出る。

青年がきよとんとした顔でいるのが面白くて、また小傘は笑った。

「その傘、お兄さんに上げるよ。捨てるなりなんなり、好きにしておくれ。」

でももし大事にしてくれるなら、きつとその傘はお兄さんを守つてくれるよ。

お兄さんがそうやって能天気な笑つていられるように、お兄さんを凍えさせる雨から、ゼーんぶ守つてくれる」

濡れちやうよ、と伸ばされた青年の手を切なそうに見詰めて、小傘は首を振った。

「この道を真っ直ぐに行けば、人里がある。ここから先は、あちきは一

緒には行けない。お兄さん一人で行くんだ。いいね」

小傘は青年の背後を指差す。

つられて青年が後ろを向いた。もう人里の灯りが見えていた。

この先は人の生活圏だ。

商売以外で足を踏み入れる妖怪はいない。

この道を真っ直ぐに歩いて行けば、問題無く青年は人里の守護者に保護されるだろう。

それが小傘には、何にも変え難い程に嬉しく思えた。

「それじゃあお兄さん。短い間だったけれど、本当に楽しかったよ。ありがとう」

「お嬢ちゃん？」

青年が振り返った時にはもう、小傘の姿はどこにも無かった。

しばらく考え込んだ後、青年は人里へと足を進める。

ふと、何処からか声が聞こえてきたような気がした。

「わたし」を大事にしてね。お兄さん」

こうして青年は、傘職人として人里に受け入れられることとなった。

青年の作る傘は評判が良く、雨漏りもせず色使いが斬新で美しいことから、里中に重宝されたという。

傘の彩りに魅せられた物造りの職人達が、幻想郷の文化に新たな風を吹かすことになるのだが、それはまた別の話。

何の障害もなく人里に受け入れられた青年に、ケチが付いたとしたならば、唯一つ。

それは傘職人の癖に、自分の使う傘の趣味が、非常に悪いということだけだった。

紫色の、大きな目玉模様が描かれた薄気味の悪い傘。閉じればまるで茄子のような、所々ツギハギだらけのオンボロ傘。

そんな傘捨ててしまえ、と里人に言われる度、青年は能天気になんて、これでいいのだと肩に傘を差してみせた。

あの雨の日から、オンボロ傘は青年の肩にある。

東方Project 幻想郷の傘屋さん2

「こんにちは。小傘屋の店主ですが、ご注文の品をお届けにまいりました」

「……………」

「あの、サインを頂きたく……………」
「……………くかー」

「あの、ホンさん？ 起きてくれませんか？ ホンさん、ホンさーん」
「すぴー……………もう後五分ぬはあ!?! どこからかナイフが！ ナ
イフが！ 痛い！」

「おはようございます、ホンさん」

「あー、おはようございます、傘屋さん。あはは、お見苦しい所をお見
せしちやいまして、申し訳ないです」

「いえいえ、咲夜さんも大変ですね」

「ちよ、痛い！ ナイフ文ですか、これ!? 『そうなんですよ。中国が
役立たずで』とか書いてありますし！」

「はは、お二人とも本当に仲が良いようで。ホンさんと咲夜さんを見
ていると、少し羨ましく感じてしまいますよ」

「ホン……………さん……………? え、誰ですか?」
「えっ?」

「……………あー! あ、あーあー! 私のことですね! あ、あはは
! そうそう、私の名前、ほんめーりんっていうんですよ!

あはは、もう本名で呼ばれなくなって何年も経ちますから、忘れ
ちゃってましたよー。あはは、あはははは、はは……………あうう」
「ええと、ほ、ほら、飴ありますよ? 甘いですよー美味しいですよー。
ほら、口開けて」

「あうう、いただきます……………あむ」

「どうですか?」

「おいひいれふー。うう、もう私の味方は傘屋さんだけですよー」

「そんなことはないですよ。紅魔館の皆さんは、みんなホンさんのこ
とが大好きですよ。さ、ナイフが刺さったところを見せて」

「あ、こんなの直ぐになおりますから、大丈夫ですよ」

「駄目ですよ。頭の傷は、油断しちやいけません。痛くしませんから、あまり動かないでくださいね」

「あ、あう、あう……あ、あのもう大丈夫ですから！　そ、そんなに優しく撫でないでくださいよー！」

「本当にもう傷が塞がってる……解ってはいるつもりでしたけど、やっぱり妖怪の皆さん方はすごいなあ」

「うわーうわー、顔が熱いですよもう。この人のこういう所が、お嬢様が夢中になる所なんだろうなー。あ、どうぞどうぞ傘屋さん、遠慮せず中に入ってくださいな。」

お嬢様が首を長くして待っていますから。お仕事頑張ってくださいねー」

「ありがとうございます。ホンさんも門番のお勤め、頑張ってくださいね。はい、もう一つ飴をどうぞ」

「わーい、ありがとうございます！　はー、飴ちゃんおいひー」

「……遅い！　いつまで中国と喋っているの！　人間の分際で、このレミリア・スカーレットを待たせるなんて、覚悟は出来ていて？」

「それは……申し訳ない。品物は出来次第、すぐにお届けに上がるのが筋だというのに」

「止めなさい。私の前に立つ者がそんな顔をするなんて、私の格が疑われるわ。でも、そうね、あなたには罰を与えましょう。」

失態には罰を。それが筋というものでしょう？」

「仰る通りです、レミリアお嬢様」

「潔くてよろしい。でも減刑はしないわよ。あなたには罰を与えるわ。吸血鬼が執行する、世にも恐ろしい罰をね」

「はい。何なりと、罰を」

「では、まずはその椅子に掛けなさい」

「はい」

「膝を直角に。椅子に沿うように深く腰掛けなさい」

「はい」

「よいしょ、よいしょ」と

「……………」

「あなたに与える罰を教えてあげる。そう、確か、石抱き責めというのかしら。膝の上に重りを乗せる罰よ」

「……………あの」

「くすくすくす、恐ろしいでしょう？　でも許してあげない！　あはは！　泣いて許しを乞えば、気が変わるかもしれないわよ？　ほら、言ってみなさいよ、ほらほら」

「あの、揺すらないで」

「罪人は黙りなさい。刑の執行中よ。まさかとは思うけれど、重いなんて泣きごを言うんじゃないでしょうね？　ああ、嫌だ嫌だ。人間は何て脆弱なんだろう。

こんな程度で重いなどと、重い、とか……………お、重くないわよね？　ね？」

「むしろ羽のように軽いです」

「そ、そう。よかつ……………ふん！　まだ根を上げないなんて、人間には中々やる奴だ。ではお前に、更なる屈辱を与えてやろう。

ああ、丁度ここに焼き立てのクッキーがある。これをお前に食べさせてやろう。おっと、勘違いするなよ、人間。これは罰なのだから。

お前にはこれを、手を使って食べることを禁ずるわ。そう、私がお前の口に詰め込むままに、お前はこれを食べなくてはならない。どう？　屈辱的でしょう？」

「ありがとうございます。それ、お嬢様が作ったんですか？」

「ええい、黙れと言ったのが解らないの？　まだ無駄口を開く余力があるようね。いいわ、その口、塞いであげる。口を開けなさい」

「はい」

「もつと大きく。あーん」

「あーん」

「ん、これ、大きすぎるわね。喉に詰まらせないかしら……………小さく砕いて、と。さあ、自分の意思に反して食物を胃に詰め込まれる苦しみ、とくと味わうがいいわ！」

「わあ、これ美味しいですね。うん、美味しい。ほどよい甘みに、

「ちよつとだけ苦味が効いて、こりやあ美味しいや」

「な、何度も言わないの！ 刑の執行中よ！」

「すみません、お嬢様」

「ふん。まったく、小憎たらしい人間だこと。何よ、これじゃあやりづらいいじゃないの。よいしょ、と、これでよし。」

「こうやって向き合っていた方がいいわね。うん、いい。さあ、まだまだあるわよ、どんどんいくわよ。覚悟することね」

「はい。もうちよつと大きく口を開けたほうがいいですか？」

「そうね、もつとあーん、てしなさい。あーん」

「はい。あーん」

「あーん」

「あーん………って、フラン！ あなたどうしてここに！」

「んー、それって扉のこと？ 封印のこと？」

「両方！」

「封印なんてもう、意味ないでしょ。扉はきゅつとしてドツカーンつてしたら、無くなっちゃった。あははー！」

「あなたは一々あの分厚い鉄門を壊さないと外出できないの？ あれ一枚用意するのに、幾らかかるか知っています？」

「だからあれほど、上の空き部屋を使いなさいと………！」

「いいじゃないの。私に隠れて面白そうなことやってたんだし」

「これは、その、違うの！ ば、罰なのよ！ この思い上がった人間に、スカレット家の家長として罰を与えていたの！」

「へー、罰だったんだ。じゃあお姉様、私と交代してよ」

「………え？」

「いやいや、家長が手ずから罰を与えよとか、ダメでしょーもー。こういう汚れ役は私が変わってあげるから、ね。さー下りた下りたー、どーん！」

「きやつ、押さないでよフラン！」

「んっふっふー。さー覚悟はいいかー傘屋よー。フランドール・スカレットがお前に罰を与えるぞー」

「お手柔らかに、妹様」

「いい心がけだー。……はむっ。はーふはへ」
「さあ喰らえ、と仰っているのですか？」

「く、口に唾えて直接……マウス・ツー・マウス!? フラン、怖い子ー」

「あの、あえて触れませんでしたけど、先ほどから咲夜さんがビデオを回し続けているのが気になるのですが」

「私の事は起きになさらずに。空気とと思ってください。ささ、続きをどうぞ」

「んっふっふー。ふはへー」

「さ、さくやー！ さくやー！ フランが狂気に染まっちゃったよー！」

「大丈夫、問題ありません」

「だいじょぶくない！」

「へーい呼ばれてないのにこんにちは！ 皆の魔女っ子魔理沙だぜ！

おーっすレミリア、今日も魔道書借りに来たんだぜ」

「あああ、壁が、天井が……！ この黒白！ 何度玄関から入ってこいと言わせるのよ！ 魔道書もちやんと返すならともかく、あなたのそれは強奪っていうのよ！」

「強奪だなんて、人聞きの悪い。借りてるだけだつてば。永久になー！」
「なお悪いわ！ ここになおりなさい。ねじ曲がった性根叩き直してやるわー！」

「お、傘屋じゃんか。レミリアの日傘届けに来てたのか？」

「と言いつつ膝に腰掛けようとするな！ クッキーを食うな！ そこは私の特等席だ！」

「やれやれだぜ。じゃあシンプルにこうしよう。勝負して、勝った方が王座に着く。それでいいだろ？」

「望むところ。弾幕ごっこで勝負よ！」

「あーあ、始めちゃった。黒白の相手はパチエリーの仕事だと思ってたけれど、出てこないのを見るとまた発作かな？」

ねえ、お兄様。お願いしてもいい？」

「もちろん。俺みたいなのでも、パチエリーさんは側にいてくれると

心強いと言ってくれましたし」

「あはは！ そうね、きつとそう。おっと、そろそろ傘を差した方がいいわよ。こつちまで弾が飛んで来たわ」

「そうします」

「私が言うのもなんだけど、お兄様の能力、反則よね。『雨を防ぐ程度の能力』なんて、弾幕ごつこのルール上じゃあ、誰も突破できないじゃないの。」

弾幕の雨だって、雨は雨よ。一発だろうと結果は同じ。全部防がれてしまう」

「こちらからは何の手出しも出来ませんけれど。まあ、一介の傘屋には過ぎた能力ですよ」

「欲がないったら。でも人間のまま妖怪と付き合おうなんて思ったら、そうやって心の肉を削ぎ落さないとだめなのかもね。」

お兄様の血はすぐくまわずそうだけど、魂が綺麗なのは私にもわかるわ。だから皆、お兄様のこと好きになるのね。もちろん、私も」

「妹様？」

「あはは！ きー！ 私も弾幕ごっこ混ざるぞー。行くよー、きゅつとしてドツカーン！」

幻想郷に受け入れられた青年は、こうやって、騒がしくも面白おかしい一日を過ごしている。

紅魔館という吸血鬼姉妹の住処から帰宅中も、青年の笑みは途絶えることはない。

心の底から、楽しいと思えた。

こんな感情は、終ぞ向こうの世界で抱くことは出来なかった。

それが青年には、寂しく思えてならない。

過去を後悔する時に浮かぶのは、一人の少女の顔。

名前も知らない少女は、自分に傘を預けて消えてしまった。

彼女がどこへ行ってしまったのか、あれから方々を探して回ったが、見つかることはなかった。

青年は思う。

願わくば、彼女もまた自分のように、幸せそうに笑っていてくれたらいいな、と。

「お、降ってきたな」

急に泣き出した空に、薄紫の傘をぱんと広げる。

ぱらぱらと雨を弾く小気味の良い音を耳に、青年は満足そうに口元を緩めた。

ひよいと水溜りを避けながら、何処へなど歩いて行く青年を里の者が見たら、何と思うだろうか。

から傘お化け、とでも思うのかもしれない。

青年の掲げる傘に描かれた、大きな目玉模様が、ぎよろりと眼を向いたように見えた。描かれた口から、べろりと舌を伸ばしたように見えた。

眼が、口が、本当に幸せそうに、心底嬉しそうに、細められていたように、見えた。

幸せそうに、嬉しそうに、雨を弾きながら。

今日もまた、オンボロ傘は青年の肩にある。

艦隊これくしょんT1

「妖精を信じてはいけない」

君は、その小さな声に返答をしてもよいし、しなくてもよい。肩口に腰掛けた妖精が、君の頬に触れる。

水兵服を着た、白い髪を二つ結びにした妖精だ。

潮風にさらされて同い年の者に比べ荒れた頬をいたわる様に、妖精はその小さな手を当てる。

なぜ、と君は言葉少なく問い返した。

「艦むすはどうやって創られるか知っているか？」

確か、鋼材や弾薬、燃料やボーキサイトといった資材を用いられて造られると聞いたが。

要領を得ない質問に君が答えると、妖精はからりと笑いながら、君の髪をひっぱって身をすり寄せた。

「優等生な答えだ。そう、資材を使ってね……艦むすは、妖精が創るんだよ」

何が楽しいのか、妖精は君の髪をこねまわしては遊んでいる。

ヒゲ、などと自分の鼻の下に二房髪をもっていきながら、妖精は語る。

「色んな方法があるぞ。儀装から創る方法、人の身に手を入れる方法、靈魂を降ろし顕現させる方法……共通しているのは、どれも同じ資材を使用しているというのに、その結果が解らないということだ」

指折り数える妖精に、君はそれで、と先を促す。

「羅針盤のブレ、ここぞという時の唐突な本部機能遮断……開発局なんて最たるものだ。

お前も話の種ぐらいは聞いたことがあるだろう？ 思うようにならないって。提督は天運を征する者がこそ、なんて一時はそんな噂も流れたくらいだ。

艦隊の運営について回るランダム性……そんなもの、本当に信じているのか？」

君はより深く問い返してもいいし、この話をここで切り上げてもいい。

思案していると、妖精は沈黙を是ととったのか、教鞭をとる教師のようにして続ける。

「全てに妖精の手が入っているというのに、無作為も何もあるものか。解らないのか？ 天秤なんだよ。」

人類に過ぎた力がもたらされぬよう、絶妙な秤でみて、ふるいにかけてるんだ。多ければ削り、順調なら遅らせ……。

もう一度質問しよう。艦むすはどうやって創られるか知っているか？」

妖精が創っているのだろう。

君はそう答えた。

肩口が、異様に凍えるような感覚を君は覚えた。

「なら、深海棲艦は？」

深海棲艦、と君は繰り返す。

それは、暗く深き海よりきたる、人類の敵対者。

絶対に解り合うことのない、破壊の具現。

海から来る、バケモノ。

君は、軍学校で習った知識を頭に思い浮かべる。

「人間の言葉で、ドロップ、と呼ばれる現象がある。深海棲艦を撃破した際、艦むすが顕現する現象だ。

なぜだと思う？ なぜ深海棲艦を倒せば艦むすが生まれるんだと思う？

いや、そもそもなぜ深海棲艦は艦むすでなければ倒せないんだと思う？

どうだい、こうは考えられないか。深海棲艦と艦むすは、非常に近しい存在であると。

表裏一体、同じ根源を共とする存在……ならばその発生も等しいのではと、どうして誰も考えつかない？」

君は肩口がかすかに揺れているのに気付いた。

妖精が笑っている。泣いているのかもしれない。

「深海棲艦もまた、妖精の手から作られた存在であると」

なぜこんなことを話したのか。

君が問うと、妖精はなあに、と鷹揚に答える。

「どうとうりサイクルされるようだからな」

妖精が夕日に透かした小さな手は、向こう側の景色が透けて見えていた。

消えかかっている。

君は驚きの声を上げた。

「どうやら目をつけられたみたいだね。イレギュラーをそのままにしておくことはないのだろうさ。」

自然は寛容だが残酷だ。システムに取り込まれなくなければ、お前は戦い続け、そして勝ち続けなくてはならない。

そうでなければ、ふるいにかけられてしまうだろう。

提督というものは、いわば消耗戦をするための舞台装置だ。

消耗戦……戦闘の決定的な主導権が存在せず、長期継続的に戦力を投入し続け、いたずらに資材を消費し損害を出し続ける状態。まさに、人類と深海棲艦との戦いがそれだ。

人の可能性を削ぎ続けるための天秤、それが提督なんだ」

君は、提督、と口にする。

近い未来、君は白い士官制服に袖を通すこととなっている。

いずこかの鎮守府に派遣され、その守護を任されるのであると。

君の気負った空気に、妖精は満足そうに言う。

「すべての艦むすに愛想を振りまき、良い関係を築きなさい。」

たくさんの艦むすを集めなさい。そして一隻の轟沈も許さずに、あらゆる海域を股に掛け、戦い続けなさい。

妖精の前で本心を語ってはいけない。あるいは艦むすの前でも。

彼女達との信頼は、あくまで艦むすと提督の立場の間にのみ成り立つものだと、覚えておくように。

人としての心を、誰にも見せてはいけない。あくまで、誰からも好かれる良い提督として演じ続け、システムの一部に成り切るんだ。

つぶし合わせることが目的ならば、約束された敗北がその結末なら

ば。

勝ち続けることでお前はイレギュラーとなる。

これが変わり者の妖精の、最後の言葉だと思ってくれ。

うん？ なぜ、こんなことを教えてくれるのか、だって？

さてね……はぐれ妖精なんぞを気に掛ける変わり者を、似た者同士だと思ったから。それだけさ。

戦うのが恐ろしくなったか？ なあに、心配するな。この私がついている。

姿は見えずとも、私は常にここにある。

地球の抑止力としての存在でもなく、天秤の目を見張る者としてでもない。

お前の相棒としての私は、いつもここにいます。この肩の上に。短い間だったが、お前がそう信じてくれるのなら、嬉しく思う」

君は、信じるとも、と答えた。

「妖精を信じてはいけないと言っただろう。私が言えた義理ではないが、まったく……」

妖精の姿はもう、半ばまで透明になっている。

「ああ、そうだな。共に征こう——」

肩の上を感じていた重さが消えていく。

「暁の水平線に、勝利を刻むのだ」



条件ロール1：君は、艦むす達を人間であると認識できない。（艦むすど日常パートをすこす毎に思想チップ。判定に失敗した場合、システム値を加算する）

条件ロール2：君は、艦むす達を恐れている。（艦むすと関係を持つ毎に正気度チップが行われる。判定に失敗した場合、正気度をマイナス、システム値を加算する）

モンスターハンター1

ユクモ……それは高山地帯にある、沸いた湯を売り客に湯治の場を提供する温泉村。

渓谷に囲まれたその村は、今や廃村寸前にまで追い込まれていた。飢えに耐えられず、若者は遠い街へと去っていった。残ったのは老人のみである。

温泉村であつた熱気は無く、老人たちは枯れた肌を寄せ合つては寒さに震えていた。

湯が絶えたのである。

原因はわからない。

だが、村の生命線とも言える湯が絶え、客足が遠のき、金が無くなり、熱を利用した農作物も取れず、飢え、人が少なくなつた場所にはハンターも居付かず。

防衛線の無い集落など、竜たちに攻め滅ぼされるのは時間の問題であつた。

そこにふらりと現れた青年がいた。

自らをチキユウという、聞きなれぬ場所からやってきたと語る青年だつた。

荒事とは無縁の様子で、途中でジャギイにでも襲われたのだろう。全身血みどろの姿のまま。

自分達のなけなしの食料を村人達は青年へと分け与えた。

青年は涙した。

村の様子と、やせこけた老人の頬を見て、何も悟らぬほど愚かではなかつた。

「恩を返したい」

青年は言った。

だが村人達は笑つて首を振つた。村を出なさい。ここに居ては飢えるだけだ。そう言いながら。

それでもここに居たいというのなら、そうでございますねえ。

竜人族の女村長が、思案するように小首をかしげる。

やわらかい物腰と穏やかな性格、そして厚化粧で隠されている疲労の色を、青年は見逃さなかった。

竜神族は長命種であるらしい。村長は長命な竜神族からしてみれば、未だ若輩者であるだろう。

年若くして村長の座を継いだ、継がざるをえなかった背景を考えずにはられない。

「畑仕事くらいしか、してもらうことがございせんねえ。残念なことに、何も実りませんが」

苦笑する村長に、青年は頑として譲らなかつた。ここに居続けると我を張つたのだ。

驚いたのは村長だった。諦めさせるために、あえて枯れた村であることを伝えたのである。

食い下がる青年に、仕方がなしと、諦めたのは村長の方であった。現状を知れば諦めもつくであろうと。

「まずは畑仕事のイロハを学ばれますよう」

アオキノコのような青年はどう見ても力仕事など出来まい。

先達に着いて手習いから初めよと、村長は、同じく竜人族の老人へと青年を向かわせた。

どこの者とも知れぬ余所者を村へと招き入れることを、この時誰もが喜んでいた。

滅びへと向かうしかない自分達へと、新たな風が吹いたような、そんな気がしていたのだ。

元より温泉村だ。人を受け入れ、ふれあい、生きてきた老人達である。

青年の恩を重んじる気概を何よりも喜び、それを生きがいとしたの

だ。

これが最後の灯火であると、誰もが理解していたからだ。あらゆる老人達が、青年を構いたがった。

若い頃に錬金術をかじっていたという老人。調合という化学反応を利用した簡易薬の精製方を習った。

収納上手であったという老婆。収納ボックスへの効果的な詰め込み方を教わった。

今はもう客のいない武具屋の店主。道具を作る際、何の素材が足りないか、その費用がいくらかの算段をつけられるようになった。

青年が向かった先にいた、老いた竜人族の翁も同じである。

農場管理人の翁がまず青年に教えたのは、体を鍛えることであった。

当然である。土を構うのには体が資本なのだ。青年のように生白い肉体では、鍬も満足に振れまい。

その日から、青年の鍛錬の日々は始まった。

マキ割り、虫取りに始まり、ハチの巣をつつく、キノコの見分けかた、刃物の研ぎ方……農家に必須の技能と言えよう。

崖の上り方を教わり、そしてコツさえあればどれだけ高所であっても傷一つ負う事はない、と教えられた時は、さすがに体が震えた。

実際に崖の上から蹴落とされて傷一つなかったのだから、爺は教師役として優れた人物であったのだろう。

ある時は、大木に吊るされた丸太を叩きつけられた。しかし青年の割れた腹筋は丸太を弾き返していた。

そしていつしか青年は、翁いわく誰でも使えるという、不思議な力を身に着けていた。

纏った衣服から、大地を通して、空気を通して、水を通して、目に見えない力を引き出す。そんな術である。

便宜上、スキルとも呼ぼうか。

青年は大地から両足を伝い力を得て、巨大な、身の丈よりも大きなハンマーでさえ振り回せるようになっていた。

かわりに飛んだり跳ねたりは苦手なままだった。

翁はそれでいい、と笑っていた。ジャンプなどしなくてもいい、と。最終試験であるとナイフ一本を渡されて、青年が立ち向かったのは、鼻息荒くこちらを睨む、巨大なイノシシ。

ドスファンゴ、と呼ばれる農作物を荒らす害獣である。

このような害獣駆除は農家に必須の技能であるといえよう。

裏山にシシが出てき、などという台詞は山間部の農村ではよく耳にする言葉だ。

そしてそれを駆除する人間も、また。

すなわち寒村では、農業と狩猟行を兼業するものが多いということだ。

これは青年の産まれた場所でも同様のことであり、すんなりと飲み込むことができた。

技術レベルがそう高くないのであれば、己の肉体を駆使するしかあるまい。

イノシシの巨体には目を剥く想いではあったが。

そうして血塗れ泥濡れになりながら、青年はドスファンゴの牙を剥ぎ取って、村へと帰還する。

翁が笑って出迎えてくれた。なかなかやるな、と背中を叩いて。

あまり要領を得た様子ではない青年に、翁はくしゃりとして笑うと、酒を飲もうと杯を掲げた。

食料の乏しい村では酒などの趣向品は金にかえてしまい、青年は見ただことも無かった。秘密だぞ、と翁はまた笑った。

ホピ酒、というらしい。

口を突ければカツと喉が熱くなる。

やたらとアルコール度数が高い酒だった。たった一口で酔いにやられ、頭がぐらぐらとする。

熱を持った体を横たえて、天井を見やる。遠い世界が、青い星が見えた気がした。

老人が静かに語った言葉は、耳に届くことはなかった。

「ようやく後継者が見つかった。

お前になら安心して後を任せられる。

今日からお前が、この村のハンターだ」

次の日、いつもの時間に翁は起きてこなかった。

農家の朝は早い。今日の仕事を済ませようと、青年は声をかけた。もう翁の、あの大きな朗快な笑い声を聞くことは二度とないのだと、知った。

かくして青年は翁から農家のイロハを習い終わった。

翁は青年にハンターの教えを済ませると、自分の役目は終わったと言いかのように息を引き取った。

青年は翁の遺言により、遺されていた刃物や、若い頃に翁が使っていたという鎧類をすべて売却。村の修繕にあてる。

やたらと物々しいものばかりが倉庫で埃を被っていたが、翁は傭兵でもやっていたのだろうか。

そういえば、あれだけ世話になったというのに、お互いの過去を明かしたことがなかった。

言えばよかった。もっと早くに。聞けばよかった。もっと早くに。おじいさん、俺はチキユウという場所から来たのですよ、と。

畑を耕す毎日が続く。

村に受け入れられたのだと、鳴き止まぬ腹を抱えて、それでも笑いながら。

時折、空の彼方を切なく眺めて青年は鍬を振る。

一振り、二振り。

日が暮れて、陽が昇る。

青年が蒔いた種は、緑を付けることがなかった。

それはどこも同じことだった。

土が干からびていく。

人の命も、また。

ある日、栄養失調の顔色の悪さを白粉でごまかした竜神の村長から、より絶望に染まった白い顔で告げられた。

村の近くに狼が……巨大な狼が現れた、と。

青年は、たった一つだけ家に残した鉄を手を取った。

あの巨大イノシシを倒した、ナイフを。

戦いの時がきたのだ。

恩を返す時が。

皆が青年を引き止めた。

そんな獲物では無理だと。

相手は狼である。イノシシとは訳が違う。雷まで自在に操る妖術

まで使うという。

だが青年は言った。

これが己の役目なのだ、と。

青年は、切れ味の悪いナイフを片手に山へと足を踏み入れる。

戦う決意を固めたのだ。

村の出入り口では、ギルドの受付嬢が、こけた頬肉を隠すように紅を塗った顔で精一杯の笑みを浮かべて、鐘を手に持って立っていた。

以前ドスファンゴを狩った時と同じ説明を受けた。

自然保護や資源の取得の決まり、その他もろもろの注意事項だ。

それも全ては人が手を入れすぎると、自然環境が破壊されて手の着けられない凶暴な獣が暴れだす、という事実に基づいたデータからなるものだ。

青年は受付嬢の再三の問いに頷く。

クエスト破棄をするならば、今ここしかないのだ、という問いだ。

もはや行くと決めたのだ。退く道はない。

受付嬢はしやうがない人だ、と微笑んだ。

ぶるぶると震える肩と口元は隠せずに。

ひどく不細工な笑みとなつてると自覚して。

気を抜けば、涙が止まらなくなってしまう。こらえなければ。せめて、青年が村を出るまでは。

頬の肉を噛む。

血の味が口いっぱいに広がった。

ユクモは、一応は村の体を保っていた。

政治団体のギルドとて、そのまま見捨てるのでは名目が立たない。

こうして寒村といえど、受付嬢の一人二人を置いておくのが通例であつた。

その村が滅びる、その時まで。

受付嬢がどこか空回りする性格であったのはそのためであった。

自分はギルド職員である。秩序を守る側の人間なのだ。

だから、ここで飢えて倒れることは許されていない。

最低限の配給が、郵便を通じて送られている。

受付嬢は罪悪感に身を切られながら、毎夜、幾度も幾度も謝罪を述べたて、パンを一切れずつ口にしていった。

老人達はそれすら口にできず、それでも笑って生き、次の日には冷たくなっていることを知りながら。

一人が生きて行く分しか運ばれてこない、いやらしい配給の分量を恨みながら。

それでも食べなければ、生きてはいけないのだから。

食べることが罪であるとも言わんばかりに。

青年が村の裏門を潜った。

ギルド支部が封鎖する、危険区域につながる門だ。

受付嬢が力いっぱい鐘を振った。

戦いに赴く背へと、澄んだ鐘の音になる。

それは死出の旅路である。

祝福の鐘となるか、あるいは吊いの鐘となるか。

「ハンターが出発します……ハンターが出発します……!」

これで青年が死なば、巨大な狼の情報は確定情報であるとして、ギルドから補助金と人員が派遣されるだろう。

そう、強さを求め敵を欲する狩人達が。

だがそれもまた、一時の飢えの凌ぎにしかならない。

行くも死、引くも死ならば。

青年の背後で、女が崩れ落ち、己の罪深さに咽び泣く声が聞こえた。

嗚呼、ハンターが行く……。

人の意地をその背に背負って。

ほけもん黒白1（ポケットモンスターブラック・ホワイト）

『遺跡発掘から：28日目』

変な石を拾った。

イツシユ地方が南部。

リゾートデザートに点在する遺跡にて、連日に及ぶ発掘作業中の出来事である。

アロエ館長の鳴り物入りで編入されたエリート君、などと言われても、しがな一研究員でしかない俺である。

依頼で発掘作業に参加したはいいが、見つけたものといえばこんな程度だった。

見た目も質感もただの石ころ。

ただの、というのは語弊があるかもしれない。

完全球体のそれは、明らかに人工物だった。

とはいえ、こんなものはそこらにごろごろと転がっている。そも、ここは古代遺跡だ。どこぞの構造物から剥がれ落ちたのだろう。

「ただの石にしか見えないけど、きつと意味のあるものなんだろうさ。なんてったって、あんたが見付けたんだからね」

とはアロエ館長の言。

そんなに期待されても困る。

実際、あらゆる機材にかけて調べても、ただの石としか結果が出なかった。

が、出土品は出土品。

仕方が無いから自宅兼研究室に持ち帰り、再検査してみることに。考古学的に無価値であっても、地質的に価値あるものならばよいが。

『29日目』

変な石が孵った。

……自分でも何を書いているのか、さっぱり解らない。

白い巨大なドラゴンが、石の中から飛び出してきた。

いや、石そのものがドラゴンだったのか。

解らない。混乱している。

詳細は明日の日記にて。

『300日目』

あの石は、どうやら古代のモンスターボールのようなものであったらしい。

違うのは、それそのものがポケモンであったということだ。

この白いドラゴンが休眠状態に入った姿があ石であり、恐らくは古代にて、その状態で持ち運びされていたと考えられる。

これが古来からの人の夢、ポケモンの運用、という概念の大元になったのかもしれない。あるいは、そのものか。

1925年にニシノモリ教授によってモンスターボール開発が始まったのは周知の事実であるが、その発想自体は記録に残らない程の太古の昔から在ったのだ。

多くのポケモン博士の言葉を借りるなら、ポケモンが全ての答えを教えてください、ということか。

さて、件の白いドラゴンである。

全長は3m弱。

体重は300Kを超えるだろうか。

幸い、我が家は研究資材搬入のためにガレージ造りとなっているため、この程度のサイズのポケモンならば不自由はない。

しがたない一研究員にはポケモン図鑑のような高価な代物など持ち合わせていないため、これが一体何というポケモンであるか判断がつかない。

古代から復活したポケモンであるために、記載されていない可能性の方が高いが。

とんでもない力を秘めている、ということだけは解る。

雄叫びを上げながら石から飛び出した瞬間に、尻尾から噴き上げた炎が鉄材を鉛細工のように、どろどろに蕩かした程である。

よく火事にならなかつたものだ。

思わずやめろ、と叫べば熱はぴたりと止み、白いドラゴンは理知的な瞳でこちらをじっと見ていた。

片付けのために簡単な指示を出せば、それ通りに従う。人語を理解しているのだ。

これはいよいよ尋常ではないぞ、とアロエ館長に電話を入れようとした瞬間、電話機はまっふたつにきりさかれた。

見れば、静かな眼で白いドラゴンが佇んでいる。

誰にも存在を知られたくないのか、と問えば、頷きが一つ。

ここにいたいのか、と問えば、また一つ頷きが。

……仕方あるまい。

しがない一考古学研究者でしかない俺だが、考古学者を自負するならば、自身が発掘した出土品には責任を持たねば。

『31日目』

奇妙な共同生活が始まった。

何か伝えたいことがあるのか、こちらをずっと睨んでいるが、言語のコミュニケーションは一方通行なのだ。

俺にはポケモン語など解りはしない。

解らないまま一日が過ぎた。

『43日目』

奴が現れて10日ほど経つ。

未だに睨まれ続けているが、さっぱりである。

なので、別の方法でコミュニケーションを図る事にした。

単純に接触してみよう、というだけだ。

触れてみた奴の毛並みはさらさらと手触りが良く、温かかった。
気が付けば連日の研究疲れもあつてか、奴に寄りかかって居眠りを
していたようだ。

こいつもこいつで、律儀に俺が起きるまで身じろぎせず待つてい
た。

そして、睨まれる。

解らない。

何を伝えたいのだろうか。

『50日目』

観察を続けた中で解つたことは、奴がドラゴンと炎の混成タイプと
いうこと。

高い知能を有しているということ。

それくらいだ。逆を言えば、それしか解らなかつた。

ポケモンの生態は謎に満ちていて、人間が足を踏み入れられるの
は、その一部でしかない。

人間に出来ることは、彼等の力を借り、我々の力を貸し、共存関係
を築くことだけだ。

いや、共存関係ではないか。

人間はポケモンに依存している。

ポケモンは単体で生きていくことが可能だが、ポケモンなしではも
はや人間の社会は成り立たない。

経済、司法、医療、交通……その全てが、ポケモンの力に頼ってい
る部分が多いのだ。

彼等が我々に力を貸してくれるのは、互いに築いた絆のためである
と信じたい。

こいつはどうなのだろう。

俺と絆を結ぶつもりがあるのだろうか。その強大な力を貸そうと
しているのだろうか。

解らない。

さしあたって、この尻尾の炎を何かに役立たせられないものか。
そこから考えよう。

『69日目』

今日は奴の尻尾の火で目玉焼きを作ってみた。
フライパンを乗せると流星に嫌がっていたが、また律儀にも動か
なかった。

油がはねる度にきんきんと犬のように鳴いていた。熱いら
しい。

これくらい我慢しろと言ってきかせた。

お前はドラゴンでしかも炎タイプだろうに。

焼き上がった目玉焼きはミディアムレア。

半熟で最高の仕上がりである。

我ながら塩コショウの加減が素晴らしい。

奴が物欲しそうにこちらを見ていたので、半分わけてやった。

尻尾を振ってよろこんでいた。

尻尾にぶち当たった柱がへし折れ、屋根が歪んだ。

久しぶりにキレイだ。

一度ならず二度までも、こいつは。

感情にまかせて怒鳴り散らすと、地面に伏せて反省のポーズをして
いた。

機嫌を取ろうと、少しずつ擦り寄って来る白ドラゴン。

だからお前は犬なのかと。

……まあ、いい。

雨露がしのげれば文句は言うまい。

目玉焼きは冷えてしまっていたが、何故か美味かった。

こいつも、今度は控え目に尻尾を振って美味そうに食べていた。凶
体の癖に、燃費は良いらしい。

そういえば、誰かと食事をとったのは何年振りだったろうか。

『75日目』

毎日何もない部屋で留守番は暇だろうと思い、壁掛け型のテレビを購入してやった。

こいつの登場でテレビが壊れてしまっていたので、その買い替えである。

チャンネルはポケモン用の大きめのものに替えてもらった。キャンペーン中らしく、無料交換だった。得した気分である。

取り付けが終わり、さっそく電源を入れる。

流石最新型。画面の美しさはこれまでのものとは比べ物にならない。

どうだ、と奴を見れば、何やら非常に驚いている様子。

どうやらテレビを初めて見たらしい。あんな小さな画面の中に人が入っているのかと、びくびくしていた。

チャンネルを変えてやる度に大きさに驚いている。

そしてポケモンバトル実況に番組が替わった瞬間。

リザードンが画面手前に向かって火を吹く、あの有名なOPが流れた瞬間だ。

あろうことか、こいつはぎゃんつと飛びあがって、口から火を吹きやがった。

火炎放射である。

……結局また電化店に戻る羽目になった。

もしものためにポケモン破損保証に入っておいたからいいものを。まさか初日では。

学習したのか、壁は派手なコゲ跡が付いただけだった。それでも大問題だが。

煙を上げるテレビの残骸を背に、俺がまたキレたのは言うまでもない。

『102日目』

階下から低年齢向きのアニソンが聞こえる。

確か、女の子向けのアニメ番組だったか。

妖精ポケモンの力を借りて変身し、巨悪に立ち向かう女の子二人の話。

一月もテレビを見ていれば、お気に入り番組が出来るらしい。

その一つがこれである。

立派なテレビっ子になったようだ。

音楽がサビの部分に入る。

「モエルーワー！」

うるせえ。

ぼけもん黒白2

『167日目』

本日をもって発掘の全工程を終了する。
遺跡のほとんどが砂に埋もれてしまっているのだから、これ以上はどうにもならないのだ。

結局、大きな発見は何もなかった。

「あんたが見付けたものだから、何か新しい発見でもと思ったんだけどねえ」

と、アロエ館長。

何度も言うが、買い被りすぎである。

俺は一研究員でしかないのだ。

見付けたのはアニメがないと生きていけないポケモン一匹だけである。

疲れて家に帰ると、あのアニソンが流れていた。

先日買い与えたDVDを十二分に活用しているようだった。

大画面の中、二人の女の子が黒と銀の戦士へと変身する。

低年齢向けと侮るなかれ。

流石は物語の山場であるか、音楽と演出は凄まじい迫力だ。

『我こそは黒き太陽、サンシャインBLACK，RX！』

『我こそは影の月、ゴルゴムノブヒコ！』

『二人合わせてセンチユリーキングス！』

クイーンではないのか。

たとえば火の中、水の中、草の中、森の中、土の中、雲の中、あの子のスカートの中……にはついていないというのか。

あと二人目のネーミング。

「ンバーニンガガッ！」

うるせえ。

『291日目』

発掘工程が終了し、もう随分と経つ。

次に現場に呼び出されるまで、また悠々自適の研究生生活である。

奴の腹をソファアーにして寝そべりながら、資料を読みふける。

そういえば、とふいに思いついた疑問を口にした。

お前は何でここにいるのか、と。

一瞬静止して何かを思い出すような仕草の後、奴は途端に慌てだした。

廃材置き場をひっくり返し始める。

辺りに散乱する機材の山。

……さて、俺。

まだキレるな。大人になれ。

何かを伝えようとしてるんだ、こいつは。

そうして奴が取り出したのは、一個のモンスターボール。

それを俺の足元まで放つて、挑戦的な眼でじつとこちらを見る。

——コメカミから、太いゴムが切れたような音がした。

わざわざ壊れたモンスターボールなんぞ取り出しおつてからに。

「取って来い」でもしたいのか。

お前は犬か。

犬なのか。

ポチエナなのか。

余りにも頭に來たため、小一時間の説教の後、こいつのニツクネームを「ポチ」にしてやった。

俺のポケモンという訳ではないのだから、ただの呼び名でしかないが。

いつまでもお前だとか、こいつだとか、奴だとかではこちらとしても不便だったのだ。

これくらいが丁度いいだろう。

おい。

俺は怒ってるんだぞ。

嬉しそうにするな、ポチ。

尻尾が柱に当たってあああ——。

『292日目』

家が崩れた。

今から段ボールを使いワクワクさんタイムである。

楽しい図画工作の時間がはっじまつるヨー。

何を作るかって？

テメエの小屋に決まってるだろうがポチィ……。

『326日目』

新居完成。

知り合いの業者に頼み、突貫工事で仕上げて貰った。

ドツコラー達の集団作業は見事の一言。

その間ポチはダンボールハウスで待機だった。

時折空気穴から悲し気な鳴き声が聞こえるも、適当に誤魔化した。

内装はほとんど変わっておらず、またガレージを改造したような家

屋である。

ポチも反省したようだし、外に出してやることに。

ようやく羽を伸ばせて嬉しいだろうと思いきや、聞こえるアニソンのサビ。

のサビ。

『なーぜーお前はライダーなのーに車にのるのかー』

『その時、不思議なことが起こった（ナレーション）』

「モエルーワッ！ モエルウウウワッ！」

……今日くらいはいいか。

『327日目』

うるせえ。

オールとか勘弁してくれ。

『343日目』

ゆったりとまどろんでいた昼過ぎ。

「や！ 元気にしてた？」

学生時代の同期が遊びに来た。アポなしで。

ポチはいつの間にかコンテナの中に身を隠していた。

素早い奴め、そんなに人目に付くのが嫌か。

ますます引きこもり生活に磨きが掛かっていやがる。

「問題があります」

と、到着するや同期から急に真剣な顔で切りだされた。

何だ。

「白い水着と黒い水着……どちらがあたしに似合うかしら？」

帰れ。

シンオウ地方に帰れ。

「冗談よ。つれないわね」

ボタンに指を掛けながら言っても説得力は無いんだよ。

その鞆からはみ出してる白と黒の布切れはなんだ。

あとチャンピオン様がこんなあばら屋に来るんじゃない。

広いだけしか取り得のないようなとこだぞ、ここは。

「今日のところは新築祝いと、あなたのガブリアスの様子を見に来たの」

家を建て直したのをどこから聞きつけてきたのやら。

ああ、はいはいガブリアスね。元気にしてるよ。

最近はじしんで砂を固める作業しかさせてないけど。

やっぱそっちに影響出てたか。

「ええ。私たちのガブリアスは双子だから、何か通じるものがあるのね」

そうさね。

教授から卵を二つ渡されて、それぞれが育てなさいって言われたのが懐かしいよ。

で、どんな感じだったよ。

「二年程前の事になるんだけど、この子がよく怯えたような仕草を見せるときがあったの。何か強大な存在を察知したかのよう……」

それは、あー、その、なんだ。

今は収まってるでしょ？

「ええ。それで何があったの？」

うむむ、何と言えればいいのやら。

まあ、なんだ、発掘作業で格上のドラゴンタイプと会っちゃってさ、そのせいだよ。

もう慣れたみたいだから、そっちも大丈夫だろ。

「なるほど。そしてあなたは更に強くなったという訳ね。さあ、クロイ君。ポケモン勝負をしましょう」

なぜそうなる。

もう一度言ってる。なぜそうなる。

チャンピオンが軽々しく勝負しようとか言わない。

「もうチャンピオンではないのだけれど。ふむ、解りました。クロイ君、バトルしようぜ！」

言い方をかえても駄目なもんは駄目だ。

ポーズを取るな。

指をくわえても駄目だ。

「どうしてあなたはトレーナーを毛嫌いするの？ そんなに強いのに、勿体ない」

だってお前、負けたら金をむしられるとか、どんな博打だよ。

俺に続けられるわけないだろ。金ないし。

この前なんか負けて電車賃を取られたって、泣きながら歩いてるエリートトレーナーの女の子を見たよ。

あんまりにも可哀そうだから車に乗つけて送ってやったよ。

エリートトレーナーでもころっと負けるような世界だぜ。

お前さんだって子供にやられたんだろ。

やってられん。

「へえ、そう、車で」

それに研究職と二足のわらじを履けてか。

俺はお前さんみたく優秀じゃないんだから、無理だつて。

それに、ほら。

俺あんまりグロ耐性ないからさ。

「とぅとぅとぅ」

つのドリル。

ぜったいれいど。

ハサミギロチン。

かみくだく。

もつと挙げようか？

「……………いえ、結構。よく解ったわ」

ポケモンバトルつてけっこうグロイんだよね。

だからさ、俺にはそれを仕事にすることは無理なんだよ。

今だつてギリギリの生活してるんだ。

ひーこら言いながら毎日暮らしてる野郎にや無理だつて。

「では、勝負ではなく気晴らしにバトルごっこでもしない？ もちろん

ん遊びだから、お金のやりとりはなし」

まあ、それなら……………。

「ふふつ、じゃあ全力で戦いましょう！」

あいよ。

行け、ガブリアス。

「ミカルゲ、行きなさい！」

げきりんぶっぱー。

「くつ、一撃で！ 次、シビルドン！」

げきりん。

「ル、ルカリオ！」

まだいけるか。

もいっちょげきりん。

「苦手タイプをものともしないなんて！ でもこれで動けないはず。

ミロカロス！」

どっこいラム持ちです。

げきりんぶつぱー。

「う、うおーぐる」

げきりん。

「がぶりあすう………」

げきりん。

ずっと俺のターン余裕です。

本当にありがとうございます。

「……………」

おい、何だよ。

床で寝るなよ。

眠いんなら帰れよ。

丸くなるを使いました、ってお前ね。布団まで運べってか。

はいはい。

よっこらせーのせつと。

『344日目』

同期帰宅。

とはいってもサザナミタウンの別荘でしばらく過ごすらしい。

海底神殿の研究をするんだとか。

あー、あれね。

何年か前に海に潜って見に行ったよ。

王がなんちゃらって暗号が石碑に彫ってあったんだっけか。忘れた。

振り返っては手を振る同期を見送っていると、これまたいつの間にかポチが姿を現わしていた。

あいつは誰だっけ？

同期だよ、大学時代のな。

なんだ、その目は。

「モエルーワ？」

うるせえ。

地元から手紙が届く。

差し出し人は、近所に住んでいた女の子。

トウコちゃんからだった。

仕事で実家から離れた俺に、定期的に手紙をくれる優しい子である。

機械音痴でメールが使えないからと、女の子らしい丸っこい字が
いっぱい書かれた手紙。

今回は一枚の写真が添えられていた。

トウコちゃんの写真だ。

新しい服を買ったんだとか。

しかし……これは、その、露出が多すぎるんじゃないだろうか。

トウコちゃんは静かな子、というか、どちらかというと暗い感じの子だったはずなのに。

大胆に袖をカットされたベストに、ホットパンツ。

コンプレックスだと言っていたふわふわのくせ毛は、キャップでまとめられている。

今時の派手目な女の子の服で似合っているのだが、違和感が拭えない。

トウコちゃんの私服はほとんどが単色のシンプルなもので、髪もアップになどせずいつも下ろされていて、言い方は悪いが、幽霊みたいな感じだったはず。

俺が地元にいた頃は、トウコちゃんはよく後ろをついて歩いてきていたのだが、気配が無くいつも驚いていた記憶がある。

これがトウコちゃんの趣味ではないとなると……ああ、またお母さんに無理矢理着させられたんだな。

必死にシャツを引っ張ってるけど、ホットパンツから伸びる足はそれくらいじゃあ隠せない。

耳まで真っ赤にして、ベルちゃん腕を組まれて写真に写ってるトウ
コちゃん。

「モエルーワー！」

うるせえ。

自信満々に頷くんじゃねえ。

『365日目』

トウコちゃんの手紙に書かれていた最後の一文が頭を離れない。

『おにいちゃんに会いたいです』

小さい頃に面倒を見てやっていただけだというのに、あの子は俺な
んかのことを気にかけていてくれる。

心配してくれる人がいるのはいいものだ。

仕事で帰れない、などと屁理屈をこねているが、本当は実家に帰る
のが辛いのだ。

誰もいない家に一人でいると、両親のことを思い出してしまう。

とうとう去年は命日にすら帰らなかつた。

ポチの尻尾を枕にしながら、手紙を読み返す。

いつもは何とはない内容の手紙だったというのに、会いたいと、
はつきりとそう書かれている。

初めてのことだった。

なんだポチ、急に動くな。

行け、というのか。

・・・そうだな。悩んでいるよりは、いいか。

墓参りもしないといけないしな。

しかしお前をどうするか。

言うや否や、ポチの身体が光り出した。

光の中、どんどんとポチの影が小さくなっていく。

光が収まった後には、モンスターボール大の丸い石ころが。

持って行け、ということか。

ありがとよ。

俺もお前と一緒になら心強いよ。

「ンバーニンガガッ！」

うるせえ。

石のくせに吠えるな。まったく。

よっこらせ、と手を伸ばす。

そして俺は、もう見慣れた、愛着のある変な石をまた拾った。

↓『B／W：0日目へ』

ぼけもん黒白3

黒白：1日目

舞い散る桜の花で作られた自然のゲートをくぐれば、若葉の緑が目
に染みる。

薄桃色に体毛を変えたシキジカたちを眺めながら、しばらく車を走
らせていると、前方に町並みが見えてきた。

カノコタウン。

俺の故郷である。

年々過疎化が進むカノコタウンは、町というよりも村といった方が
しっくりくるくらいに小さい。

数年前、町起こしのプロジェクトが発足し、町人一丸となりポケモ
ンジムをこの町へ移転させよう、という企画が挙げられたことがあっ
た。

近年開発のめざましいイツシユ地方では、都心部を離れた町の過疎
化が重大な課題となっているのは周知のことだろう。今時、小学生の
社会科の教科書にも、リングマの挿し絵と共に載っていることだ。
ドーナツ状に流れていく人口とリングをかけているらしい。笑えな
い。

ダムを造ることも発電所を造ることも地理的に不可能であるため
に強制立ち退きもさせられず、維持費だけはべらぼうに掛かる、とい
う県政にとつての頭痛の種。カノコタウンはその代表的なものだっ
た。

そこで挙げられたジム移転の企画は、誰にとつても渡りに船だったの
である。

チャンピオンリーグに参加するには各市町村に点在するポケモン
ジムにてジムリーダーに挑み、勝利し、バッジを得なければならぬ、
というシステム上、ポケモンジムの建てられた町には宿泊施設やフレ
ンドリショップ等の利用によって、膨大な金が転がり込んでくること
になるのだ。それを元手に、都市開発をしてしまえ、という魂胆だっ

た。

そして白羽の矢が立ったのが、俺である。

なに、特別な理由は無い。

年齢的にも、実力的にも、適任者が俺しかいなかったというだけのことだ。

町興しなのだから、地元民がジムリーダーになった方が都合が良かったのだろう。

そしてプロジェクトはほとんどん拍子に進む——はずだった。

プロジェクトは立ち枯れることとなる。

なぜか。

俺が逃げたからだ。

両親の墓があり、家族で暮らした家があるこの町に、腰を落ち着けるつもりが少しもなかったのだ。俺は。

そして町は寂れたまま。

子供たちの声すら聞こえないまま、閑散とした街並みに春の陽気が降り注いでいる。

「バーニンガー……」

ああ、わかってるよ。気を遣わせちまって悪いな、ポチ。

「ルーワー！」

唸るな唸るな。

俺が悪いんだからさ。仕方ないんだ、こればかりは。

ここに残った人達からすれば、俺は町を捨てた裏切り者なんだから。

若者不足の町なんだ。大人の思いこみは中々変えられんよ。

先ほどからひそひそと聞こえる声は、悪意を孕んだもの。

意識しまいと思っけていても、耳は塞げない。

「……いち……ん」

歓迎されないのは当たり前なのだ。

今更帰って来て何の用だ、という無言の圧力が肩に重い。

これがさっさと出ていけ、になる前に墓参りを済ませて退散しよ

う。

「……おに……ん」

「ンバツ!」

おい、どうしたポチ。

なんでそんなに震える。

やめろよ、携帯が鳴ったのかと思ったじゃないか。バイブレーション設定にしてるんだから、紛らわしいだろ。

今時ライブキャスターじゃないのかよって突っ込みはなしな。

トレーナーじゃないんだし、俺には必要ないよ。

「おに……ちや……」

「ンババババツ!? ババババビャババババ!」

うるせえよ。

いい加減にしろって、震え過ぎどころ。

はあ? シムーラウシロウシロ?

いったい何があるん……。

「おにい……ちや……」

振り向いた背後には、少女が立っていた。

うつむいた顔全体を覆う、暗い色をした髪。

細い手足に映える、作り物のようにきめ細やかな白い肌。

アイボリー単色のワンピース。

まるで気配が無かったというのに、一度認識すれば空気は重く沈んでいく。

そんな少女だった。

少女は微塵も気配を感じさせず、俺の服の裾を掴んでいた。これもポチに言われるまで、俺が気付くことはなかった。

落ち着け、ポチ。みなまで言うな。

彼女が何であるか、俺には解っている。

「お……に……ちや」

何だっけか?

おいおい、ここまで来てわからないとか言うなよな。

そうだ、ポチ、知ってるか?

ゴーストポケモンっているだろ。未だに夏場になると、いるやいな
いやの幽霊討論がテレビで放映されてるけどさ、あれっておかしな話
だよな。

だってよ、幽霊の存在は既に証明されちまつてるんだぜ？

もう解ったな……？

「ンバーニンガーッ！」

「やーっ！」

ぎやーっ、じゃねえ。

うるせえ。

うるせえよ俺達。

こらポチ、お前が急に叫ぶもんだから釣られちまつただろうが。

反省しやがれ。

今日のお前の晩飯はお徳用ポケモンフードな。

ハーデリア用にカロリー計算された、カリカリの不味いやつ。

「ニンガッ!?!」

何が理不尽なもんか。

勝手に勘違いしたお前が悪いのだよ。

わっはっは。

「あう、びつくり、した……」

ごめんな。

それと、久しぶり、トウコちゃん。

「うん……久しぶり、おにいちゃん」

きつと、ほにやりとした笑みを浮かべているのだろう。

ふわふわの長い癖っ毛から覗くのは口元だけで、その表情はようと
して知れないけれど、この子の纏う空気が春の陽気のように、明るく
温かくなっているのだから。

俺の服の裾を掴んで離さないこの女の子。

彼女がトウコちゃんである。

俺に会いたいと、手紙を送ってくれたのもトウコちゃんだった。

町民のほとんどに嫌われている俺だけど、この子とその幼馴染の一
家、そして博士達だけは受け入れてくれた。優しい人達だ。

恩返しをしたいとは思っているけれど、それを言うところの子達は決まってへそを曲げてしまうのだ。

見返りを求めてしたんじゃない、って。

まったく、俺よりも10歳以上は年下だったのに、立派な子たちだ。

いやさ、俺が駄目過ぎるだけか。

小学生に借りを作る社会人とか。

「おにいちゃん?」

何でもないよ、トウコちゃん。

トウコちゃんはえらいなーって思ってただけ。

ほうら、撫でてやるぞ。

えらいえらい。

トウコちゃんはいいい子だね。

「ひゃー」

おや、何やら微妙な顔。

嬉しいけど、素直に喜べないみたいな。

どうしたよ。

もう撫でられるのは嫌になった?

あー、そうだな、ごめん。

君はもう子供じゃないんだな。デリカシーが無かった、謝るよ。

「ち、ちがつ、ちがう、よ! おにいちゃんに、なでなでしてもらうの、

好き……だよ!」

じゃあ、どうして?

「んう……私、これ、嫌い……」

これ、って髪の毛のこと?

「ん……くしゃくしゃだし、色もベルちゃんみたいに、綺麗じゃないし、髪型だって、変えられないし……」

ふーん。

俺は好きなんだけどな、トウコちゃんの髪。

こんなに手触りがいいんだし。

ポリウムがあるのにこれだけ細くて柔らかいなんて、こんな上等な髪質はちよつとお目にかかれないぜ。

「ほんと……？」

ほんとほんと。

何だよ、誰も褒めてくれなかったのか？

「ん……おかあさんも、髪だけはおとうさんに似たのね、って、いじりがいがなくて残念だ、って」

あー、あの親父さんね。

俺、あの人の顔見たのって10回もないんだけど。今も放浪の旅に出ちやってるみたいだし。

これだからトレーナーっていう人種は……。

「学校のみんなも、変だ、って。つるが増えすぎたモジャンボみたい、って」

へえ。

で、その学校の奴らって、誰なのかな？

おにいちゃんに教えてみなさい。

ん？ 顔が怖いって？

ははは、俺は元からこんな顔だよ。

大丈夫さ、顔はこんなでも何も怖いことなんかしないから。ホントダヨ。

ちよつとお話ししてくるだけだよ。

モジャンボとかナイスチョイスじゃないかこの野郎。なら手前の頭をイシツブテみたたくしてやんよー、ってね。

スリーパーじゃないところが優しさです。

しかし俺はモジャンボ可愛いと思うんだけどなあ。女の子は嫌なのか。

って、ああダメダメ！

トウコちゃん、髪を引つ張ったらダメだって。

引つ張っても真つ直ぐにはならないから。

うおおい、泣くな泣くな。ほら、眼を擦らないの。

でも、トウコちゃんには悪いんだけどさ、ちよつとだけ嬉しいんだ、俺。

だつてさ、誰からも見向きもされてないってことは、俺だけがこの

髪の良さを知ってるってことだろう？

俺専用ってことじゃないか。

今のところはさ。

「おにいちゃん、専用……？」

そうだよ。

トウコちゃんの髪は、俺専用だ。

「ルーワ……！」

なんだポチ。

その恐ろしい子を見るような目は。

石になってるからって解るんだぞ。

「おにいちゃん、専用……わあ」

専用だなんて言っても、他にトウコちゃんの髪を褒めてくれる人が出て来るまでの期間限定だけだね。

どんな野郎が君の隣に立つのか、楽しみであり寂しくもあり。

あーあ、複雑だなあ。

「おにいちゃん、だよ？」

うん？

「わたしは、おにいちゃんと、ずっと一緒に、いたい……よ？」

そうかい。

ありがとうな、トウコちゃん。

俺もだよ。

「んう、おにいちゃん、解ってない……」

何か言ったかい？

声が小さくて聞こえなかったけども。

「んう、何も、言ってるない、よ？」

じゃあこっちにおいで。

また俺に極上の手触りを楽しませてくれ。

もふもふ。

もーもふもふー。

「ひゃー」

そうそう、これこれ。

あー、癒されるなあ。

ポケモンに似てるっていうんなら、トウコちゃんはエルフィンって感じだなあ。

髪型も似てるし。

リアルエルフィンだよ、本当に。

もふもふしてやりたくて仕方ないな。

「んう、だめ。もう、おしまい」

あー。

やりすぎちゃった？

ごめんな。

調子に乗り過ぎたか。

「ちがう、よう。これ以上、なでなでされると、大変なことになっちゃう、から」

大変なこと？

チエレンの生え際が後退するとか、チエレンのアホ毛が倍に伸びるとか、チエレンが急にサングラス掛けだして小学生デビューしようとしちゃうとか？

「ん、それは大変だけでも、ちがう、よう。あのね、これ以上されちゃうと、ね」

されちゃうと？

「嬉しくなって、ふにやふにやになっちゃう、から」

ああ、もう。

あああ、もう。

トウコちゃんは可愛いなあ。

トウコちゃんは可愛いなあ。

「ひゃー」

と、まあ。

真昼間の往来で自重しない、駄目大人代表の俺がいた。

現在、ふにやふにやになったトウコちゃんをおぶって家まで送り中である。

「あのね、おにいちゃん」

きゆう、と俺の首にしがみつくとウコちゃん。
うん、どうしたの？

「おかえりなさい」

……うん。

ただいま、トウコちゃん。

その後は、もう何年も繰り返された、いつもの通り。

トウコちゃんを送り届けた後、ママさんの勧めを断りきれず、夕飯を御馳走になったのであった。

泊っていけとの誘いは流石に断り、帰宅。

一晩離れるだけなのに、泣きそうな顔をしていたトウコちゃんが印象的だった。

無理もないか、一年も放っておいたんだから。

しかし一年、されど一年、たったの一年、どうとるべきか。

家の中は静かで、冷たくて、トウコちゃんの家のような温かさは少しも感じられなかった。

ここは本当に俺の家なのだろうか。

寒い、な。

「モエルーワ……モエルーワ……ッ！」

うるせえ。

静かにしてたと思っただらそれか。

トウコちゃんの家の方を向いて鼻息を荒くするんじゃない。

なんだって？

合格だって？

なんの試験だよ。

妹度審査？

なんだそりゃ。

「モエルウウウッ！」

いい仕事してますねとかうるせえよ。

お前は鑑定団の人かっつーの。

何の品評をしているのか、お前とはじっくりと語りあう必要があるしそ
うだな。

おいおい、またバイブレーション機能ONか。
マナーモードだった？

ははは、笑えるな。

おいおい、そんなに震えるなよ。まるで俺がいじめてるみたいじゃないか。

もう遅い時間だと？

安心しろ、夜はまだまだ長いんだ。

今夜は寝かさないぞ。

さあて、暑くなつてまいりました、と。

ぼけもん黒白4

黒白：8日目

いかんいかん。

この一週間、食つちや寝を繰り返してしまった。

自室の布団から台所までしか移動した記憶が無い。

だつてご飯とか掃除とか洗濯とか、全部トウコちゃんがしてくれるんだもん。

おにいちゃんはずつてつて言うんだもん。

手伝おうとすると、わたしの生きがいなのにつて泣きそうになるんだもん。

だから仕方ない……わけあるか。

このままでは俺は本格的に駄目になる。

刺激だ。

生きるための刺激を得なければ、腐ってしまう。

というわけで散歩しようぜ、ポチ。

「ニンガー……」

ああ、気遣ってくれたのか。

いいつてのに。

でもまあ、ありがとよ。

周りの奴らの言うことは気にするな。

俺は気にしてない。

だから、いいんだよ。

「……バーニング」

まったく、しよげた声を出すな。

わかったわかった。

帰ったら一緒にDVD観てやるから。

「ンバーニングガッ！」

うるせえ。

途端に元気になりやがって、こいつは。

そら行くぞ、と玄関を出る。

出た所でぼすり、と飛び込んで来る見慣れたふわふわ頭。結構なスピードだったが、髪に衝撃が吸収されたのか。

おお、リアルコットンガード。

「おに、お、おにいちゃ……たす、たす……」
なんぞ？

「あー、クロにいさんだあ！　ねね、そのままトウコちゃん捕まえててえ！」

「ひゃー！」

この独特なアクセントの口調は、ベルちゃんか。

おはよう、二日振り。

「もうお昼だよ。クロにいさんのお寝坊さん」

にこー、と大きめの帽子を抑えて笑うベルちゃん。

ウェーブが掛かった短めの金髪が、すっぽりと帽子の中に収まった。

トウコちゃんが見た目がふわふわなら、ベルちゃんは中身がふわふわな子だな。

それで、どうしたのさ。

「トウコちゃんのお着替えするの」

「やーっ！　やーっ！」
なるほど。

それで逃げ出したトウコちゃんを追って来た、と。

受け身がちなトウコちゃんがこれだけ嫌がるのも珍しいな。

どんな服を着せようとしたのさ。

「んとね、クロにいさんに送った写真の服。トウコちゃんてば、あれ以来一度もあのお洋服着ようとしななんだよ」

ああ、あれか。

まあトウコちゃんの趣味には合わないだろうな。露出多めだったし。

似合ってたけどね。

「だよね！　お兄ちゃんに見せるために買ったのに、トウコちゃんた

ら、恥ずかしがっちゃってあれから一度も着ようとししないの。

それでね、トウコちゃんのママにお願いされたの。もう無理矢理着替えさせちゃおうって」

「あうう……」

「駄目だよ、トウコちゃん。せつかく勇気を出してイメチェンしたんだから、ちゃんとクロにいさんに見てもらって、感想聞かなきゃ」

感想って。

あいつみたいなのを言うなあ。

あいつって誰、と小首を傾げるトウコちゃん達。

ほら、あいつだよ。一度会ったことなかったかな。

俺の学生時代の同期。

「あー、あのすつごくキレイな人」

「……むう」

この前も新しく買った水着の感想聞かせろって、ガレージに押し掛けて来てさあ。

それで色々あつて。

「着る」

「トウコちゃん？ ど、どうしたの？」

「行こう、ベルちゃん。着替え、手伝って」

お、おう。

急にやる気になったな、トウコちゃん。

「負けない、から」

「あ、まってよー！」

気を付けて帰れよー。

つてもう見えないし。何だか解らないけど、慌ただしいことで。

さて、もう二人共行っちゃったぞ、チエレン。

「気付いてたんですか、クロイさん」

もちろん。

上手く隠れてたけど、気配の消し方がまだまだ甘いな。

「あの二人には付き合いきれませんが、もう」

はは、そう言うなよ。

女の子と損得抜きで付き合えるなんざ今の内だけだぜ。

「興味ありませんよ、そんなの」

クイツとメガネを上げるチェレン。

「今日も優等生キャラだなあ。」

ブレザーが似合ってることで。

「そんなことよりもクロイさん、聞いて下さいよ。今度、博士がポケモンをプレゼントしてくれるそうなんです。とうとう僕達もトレーナーになるんですよ！」

そう、か。

お前達ももう、旅に出る年か。

トレーナーになるにしろ何にしろ、旅の目的はちゃんと持っておけよ。

「ええ、もちろん。僕は最強を目指します」

チェレン……それは、辛いぞ。

やめとけよ。

折角の旅なんだからさ、楽しく観光でもしてさ。

「余計な口出しはしないで下さい。トレーナーになる以上、強くなる以外に、何があるっていうんですか。」

僕はあなたとは違います。途中で諦めた、あなたとは」

……そうだな。

俺は何も言えないわな。

頑張れ、チェレン。

満足がいくところまで、自分の力を試してみろ。

きつといるんなことが解るようになるさ。

「ええ、そのつもりです。覚えておいて下さい。いつか僕は、あなたの前に立つ。そして勝つのは僕だ」

はは、そうなるといいなあ。

「最強のポケモントレーナーに、僕はなる」

では今日の所はこれで、と去っていくチェレンを見送る。

「バーニンガププ……！」
うるせえ。

笑ってやるな、ポチ。

男の子は誰もが通る道なんだ。いやさ、病気か。たいていは中学二年くらいに掛かるんだけど、あいつは早熟だったからなあ。

しかし、博士にポケモンをもらおう、ね。

明日はアララギさんところに行ってみるか。

黒白：10日目

やって来ましたポケモン研究所。

アララギ博士に会いにきました、とだけ受付に告げ、中へ。

アララギさんに会うのも一年振りか。

本当はいいの一番に挨拶に来なきゃいけないかったのに、あんまりにも居心地が良すぎて先伸ばしてしまっていた。

うーん、本格的に墮落してるな、俺。

「ハアイ！ クロイ君、元氣してた？ もう、いつ挨拶に来てくれるかと待ちくたびれちゃったわ！」

お久しぶりです、アララギさん。

相変わらずお綺麗で。

「やあねえ、もう。冗談が上手いんだから！」

いえいえ、冗談なんかじゃ。

ばしーん、と背中を叩かれる。懐かしいなあ、この痛み。

ところでアララギさん、聞きたいことがあるんですが。

何でもあの三人にポケモンを渡すとか。

「そうそう！ 初心者用の三体をね。ああ、誰がどの子を選ぶのか、楽しみだわ！」

俺の世代はボール渡されるだけでしたからね。

外したら旅は終わりとか、リスクすぎる。

「それで、話を聞いて私の所に来たってことは、納得いってないってことでしょうか？」

それは……はい。

やっぱり、アララギさんに誤魔化しは通用しませんね。

誤解の無い様に言っておくと、俺はあの子達が旅に出ることや、トレーナーになること自体に反対はしていません。

ただ、あなたの手から、ポケモン博士が手ずから旅の支援をするとは、俺は頷けません。

見識を広げるためや、学業のため、純粹に観光のためでもいい、旅の理由はたくさんあります。

そうして子供達は自分を見つめ、職に就く。

でも、ポケモン博士の支援を受けるということは、研究に協力するということ。

凶鑑を埋めるためには、たくさんポケモンが集まる場所に足を運ばなくちゃいけない。

つまり、どんな形であれ、チャンピオンロードを目指すことになります。

あなたの手からポケモンを受け取ったなら、あの子達はもう、専門トレーナーになる以外なくなる。

旅を終えて将来、どんな職に就いたって、戦いから離れることは出来なくなる。

それは、あの子達の可能性を狭めることになるんじゃないですか？

「そうね……。ねえ、クロイ君。この町の様子を見た？ あなたがカノコタウンを出てからまだ数年しか経ってないけれど、たったそれだけでこの町は変わったわ。」

もちろん、良くない方向にね。この町にはもう、あの子達を含めて子供は10人もいないのよ。

あなたは子供たちの可能性と言ったけれど、カノコタウンに居る限り、あの子達に未来はないわ。この町を出ない限りは」

……はい。

解ります。

「でも、だからと言ってあなたのように強引に出て行ってしまっただけ、皆の反感を買うことになる。それは悲しいことよ。」

どれだけ寂れても、ここはあの子達の故郷なんだから。だから、あ

うるせえよお前ポチこの野郎オオウウアアア！
俺の子供の時から憧れのお姉さんによくも！
マナーモードON、じゃねえよ！
出て来やがれポチィ！
このっ、アララギさんは十二分にモエルわ！
モエルーワ！

東方Project 幻想郷の傘屋さん3

小高い山の上に、大柄な女が一人、胡坐を搔いて座っている。頭の前から足の先まで、全てが朱色の女だった。

否………朱色に染まった女だった。

坊主の死体から剥ぎ取ったのだろう、檻樓同然の黒衣もまた朱に染まり、だらしなくそれを着こなす女にこの上なく似合っていた。

女の前髪からは朱の雫が落ち、掲げた赤漆の大盃に波紋を広げる。

一つ、二つ、三つ、四つ――。

落ちた雫の数は、それでも未だ、女が摘み取った命には届かない。その長い髪から滴る雫の全てを合わせても、まだ届かない。

女が腰掛けていたのは、人の死骸によって築かれた山だった。

血に染まった女が夕暮れの中、小高い人の肉の山の上で、女は憂鬱に盃を傾ける。

適当に積み上げられたそれらは皆、薄汚れた鎧兜を着た武者姿。目視だけでも30は下らない数がある。どこその戦場から落ち延びて来たのか、あるいは死体剥ぎを生業とする野党崩れであるか、あるいは彼女を滅ぼすために組織された調伏師であったか。

まあそんなことはどうでもいいと、心底興味無さ気に女はぐいと盃を背ごと反らす。

「ごぶり、ごぶり――」。酒か血か、もうどちらか解らなくなった液体を喉を鳴らして嚥下する。

ぶふう、と豪快に息を吐く姿は決して下品には見えぬ、むしろ女の魅力を妖しく惹き立てていた。

「――ああ、まずい」

口直しにと、大盃へ腰に吊るした瓢箪より明らかに容量以上の酒を注ぎ出し、再び盃を傾ける。

「ごぶり、ごぶり――」。呑み干して、女は吐き捨てた。

「い、ぶ、ふうう——。ああ、まずい。まずいねえ」

女が酒を飲む時の台詞は、決まってそれだった。

女は酒を美味いと感じた事は無かった。酒に吞まれて酔っぱらったこともない。女が吐く息は酒気の混じった満足の吐息ではなく、嫌悪の呻きだった。

それでも酒を飲むのを辞められないのは、女の産れの業だろうか。しかしどれ程の美酒を口にしても悪態しか口にしない女は、身内連中からも避けられ、遠ざけられていた。

最近はありがたくもない渾名を付けられる始末。

構うものか、と女は嗤う。

不味いものは不味いのだ。

身内連中は酔うために酒を飲むが、女は違った。酒には浄の力が宿る。女は身を内側より清めるために酒を飲んでいた。

だがいくら酒を流し込んでも、身の内に澱む泥は流れない。そこいらの神社から奪い取って来たのがいけなかったか。酒に浄の気を感じない。

まずいまずいと繰り返し、女は盃を傾け続ける。

「百薬の長とは言うけれど、それ以上は体に毒ですよ」

不意に、男の声が聞こえた。

チイ、と忌々し気に女は舌打ちを零した。

此処は村から離れた死体ばかりが転がる合戦跡だ。野党がたむろするこんな場所にわざわざ足を運ぶ者など、どうせろくな人間ではない。しかも自分の風体を見て驚きもしないとは。

知り合いに声を掛けるような気安さは、自分達が何たるかを熟知しているからだろう。呼び声の一つも上げない客は迷惑なだけだ。

肺腑の奥から絞りだされる熱く酒臭い溜息。

酒を飲むといつも鬱屈とした気分になる。これだけ近付かれても気配に気が付かなかつた程、滅入っていたのか。

ああいやだいやだ、と女は髪を掻き回して水気を飛ばすと、面倒だと言わんばかりに男を睨みつけた。

空気を含んで、彼女の元来の髪の色である金が、空にぶわっと舞った。

金色に燃える炎のようだった。

「消えな。今なら見逃してやる」

言つて、高密度の殺気を雨あられと飛ばしてやる。

心臓が弱い者ならば、そのまま死んでしまいかねないほどの殺気だ。

相手が唯の人間ならば、よほどの実力者かよほどの馬鹿かでない限り、立っているのすら困難だろう。

これでケツを捲くつて逃げ出すはず。

男から視線を外し、盃に瓢箪を傾けようとする女は、しかし目論見が外れたことに目を細める。

「そんなに不味いのなら、飲まなければいいのでは？」

「……聞こえなかったのか？ 私は消えろと言ったんだ」

男は困ったように笑うだけだった。

まいったな、と女は内心辟易とする。

馬鹿か強者か、どうやら後者のようだった。

「俺としても立ち去りたいのは山々なんですけど……」

どうやらキノコの毒からまだ咲夜さんが回復してないみたいで、時間が逆さに回ったままなんですよ」

「訳の解らんことを……変な奴に捕まっちゃったよ、まったく」

魔理沙さんにも困ったものです、と男は苦笑いを零すが、女は男が何を言っているのか少しも理解が出来ない。

理解するつもりもない。
全てがどうでもいい事だった。

「能力を狂わせるとか、魔法の森のキノコは流石に一味違うなあ。咲夜さんも口に含んだ瞬間に、七色の光を吐いてたし」

「お前さん耳が聞こえないのか？ 鬼の慈悲も三度まで、これが最後だ。消えな」

「だから、それは無理なんです」

「そうかい。なら死にな」

女はもう男の方などろくすっぽ見ず、盃を振り抜いた。

恐ろしい膂力によって盃から撒かれた酒、その一粒一粒には、女が直接口を付けて吹き入れた膨大な妖力が込められている。

浄の気を以てしてもなお濯げぬ怨念が、朱色の呪となって散弾の如く、男を貫かんと殺到する。

これで男も自分の椅子の一つとなることだろう。

酒が気持ちよく酔えるものなどと信じてはいないが、肉を清める手間が省けることにはありがたい。

女は物憂げに溜息を吐き、空になった杯へと瓢箪を傾け――

「ぱん、という軽い音に、眉根を跳ね上げた。

死体の山の上から見下ろせば、男が趣味の悪い傘を広げている。

薄紫色の傘に描かれた大きな一つ目と口が、威嚇するようにぎよろりと女をねめつけた――
――ような気がした。

「うわっ、危なっ！」

「……能力持ちか。助かった、なんてほっとした顔をして、これだから人間はすぐに思い上がる」

あのまま死んでおけば苦しまずに済んだものを。

重い腰を持ち上げ、女はひよいと山から飛び降りた。黒衣の裾が捲くれ上がり、女の腿を剥き出しにする。女の魅力の全てを備えたよう

な白く美しい脚であったが、それが見た目通りにか弱いものであるとは誰も思わないだろう。男より二回りは大柄な女であったこともあるが、それよりもっと単純な話だ。

着地した瞬間、まるで重さを感じさせず男に向けて爆発したかのようには歩を進めた女の姿を見れば、誰だつて震え上がる。足元から火花が散る程の加速。体当たりでもされたら、唯では済まない。

女にしてみればただ歩いただけなのだろうが、人間にしてみれば暴風に等しい速度だった。

そのまま女は無造作に拳を男に放つ。

妖力をそのまま固めた攻撃は効かないだろうと判断しての接近戦。たった一度の攻撃で男の特性を見切ったのは、女の才が抜きん出ていることを示していた。

あるいは、あまりもの面倒臭さに思考を放棄したのかもしれない。恐らくこの男に遠距離からの攻撃は効くまい。だがそれがどうした。

女の本分はその膂力にあり、であるために己の最も自然とする機能を發揮したらいいだけのことだった。即ち、近付いてぶん殴るだけだ。

男は慌てて傘を閉じると、それを刀に見立て振り上げたが、そんなもの、役に立つかどうか。

「む——！」

「あざっ——！」

拳に感じる違和感に、女が声を上げた。

空気を殴ったかのような手応えの無さ。これは、受け流されたか。オンボロ傘でよくやる。

しかしまるきり効いていない訳でも無さそうだ。受け流し切れなかった重圧に、男が苦悶の表情を見せている。食いしばった口の端から滴る血の雫。

ならば数を放てばいいだけだ。

そうと決めた女の行動は早かった。実際、どうしようもない程に速かった。

女の肩から先が消え、無数の拳戟として再現される。

男に迫る拳、拳、拳、拳——拳の弾幕。

「無駄だよ。無駄無駄、無駄だつて」

「うぐぐぐぐぐつー」

「もう諦めな。なるべく、痛くないようにしてやるからさ」

言うも、どこかおかしさを女は感じていた。

どうにも男の気配が捉え難い。

拳を放つ場所放つ場所に、解っていたかのように傘が据えられている。まるでこちらの手の内を全て読み明かしたかのような反応だ。

こんなことが出来るのはサトリだけだと思っていたが、さてそれが能力ではないことは解っている。不意を付いてやれば、そちらにも反応するのだから、思考を読んでいるわけではない。

純粹に男の磨き上げた技術によるものだ。

そして男が膝を突きつつあるのは、これは純粹に種族による力の差ではない。女が勝っているように見え、勝負の流れを掴んでいるのは男だった。

そこまで考え、何か思い当たる節があったようだ。拳を放ち続ける女は、ニヤリと口蓋を釣り上げた。

紅も引いていないというのに真っ赤な唇から、なお赤い舌先が覗く。

赤い舌が、鋭い歯をぞろりと舐め上げた。

男が初めて見た女の笑みは、野生の獣を思わせる獰猛でいてどこか美しい、磨き抜かれた刀身の様だった。

東方Project 幻想郷の傘屋さん4

「……ははあ、そうか、そうかそうかそうか、そうか！ お前、ぬらりひよんか！ はは、そうか！ 初めて見たぞ、ぬらりひよん！」
「お、俺は妖怪では、ない、ですよ！」

「そりゃあそうだ！ ぬらりひよんは人間だからな。間借りの能力を持った人間、それがぬらりひよんだ！」

そいつはどこにだつて入り込む。他人の家で平気で飯を食い、気付けば妖怪たちの先頭を歩み……。面白いのはな、ぬらりひよんがそこに居ても、誰も部外者だつて気づかないのさ。

当然さね。そこに居る間、ぬらりひよんはそいつらの一員に成り切っているんだから。自分自身だつて、よもや他所者であるなどと思つてもいないのだろうよ！

家に入れば家族となり、妖怪に紛れば妖怪となつてしまふ、間借りの能力者。それがぬらりひよんなのさ！ そこにちよつとでもスキマがあれば、ぬるりと入り込んで本物になつちまふ。

それは物質に限つた話じゃない。魂だつて例外じゃあないのさ。入り込まれた人間は、限りなく人妖に近い存在となる」

「じゃあ、俺は」

「憑依物だか何だか知らんが、そういう系統の存在だよ。死人の欠けた魂の間を借りてるだけの、何処かの誰かさ！ その証拠に、お前、自分の名を言えるか！」

「お、俺は、俺の名前は……！」

「だがまあ、そう悲嘆に暮れるものでもないよ。お前は私をこうして喜ばせているんだから。お前から感じる恐れが、美味くつて仕方がない。」

ぬらりひよんは究極に人間的な存在であると言えるからな。人間の持つ適応力つてえ奴を極限まで引き上げた能力なんだ。当然さ。

嬉しいじゃないかい、人間代表様とこうして拳を交えられるなんて、鬼冥利に尽きるねえ！」

「う、ううっ……」

男にはもう、先ほどまでの勢いは微塵も残ってはいなかった。氣力が根こそぎ失われている。辛うじて女の拳を防いでいるだけのようだった。

「……ぬらりひよんならもしやとも思ったが、やっぱり人間なんて、こんなものってことかい」

女は一撃で上半身を吹き飛ばさんと、真後ろにまで腰を捻った。今までのように手抜きをした速いだけの拳ではない。それでも殺意を込めていた拳はどれも必殺の威力であり、それは手抜きであって手加減ではなかったのだが、これは別物であると肌で刺すように感じる。

女の腕に幾筋もの筋と血管が浮かび、みしみしと骨が軋む音がした。一回り、二回り、筋に血液が送られて女の腕が膨れ上がっていく。その一突きは山を穿ち、地を裂く拳。

人間相手には過剰至死の、女の全力だった。

これは女なりの礼儀のつもりだった。

少しばかり期待させてくれた男への。期待が裏切られたことへの恨みも込めて。

音を置き去りに、女の拳が放たれた。

《おつと残念。うらめしやー》

「むうっ………！ またか、しつこい奴！」

ずばんと勢い開かれた傘に、女の拳は狙いを反らされた。

流石に無理な態勢から完全に弾くことは出来なかったようで、女の拳先は傘の一部を抉り取った。だが、男は必殺の一撃から難を逃れている。

大きく見開かれた目玉模様から、涙が滲んでいる——よう

に見えた。

《あいたたたた！ もう、ほらお兄さんもシャキツとする！》

「お、俺は……」

《お兄さんは何さ？ その体に憑依して来た、どこかの誰かさん？ そんなことはどうでもいいでしょ。だって、幻想郷は全てを受け入れるんだもの。》

あそこに流れついたやつらはどうせ幻想なんだ。確かなものなんてない。だったら名乗ったもの勝ち、言い張ればいいんだよ。それが全てさ！ さあ、お兄さんは何！ 言ってごらんよ！》

「俺は——ぬらりひよんなんかじゃ、ない」

《そう。それでいいの。まったく、お兄さんはわちきが居ないと本当危なっかしいったら——》

女には、掲げられた傘の目玉模様が、それはもう嬉しそうに細められている——ように見えた。

どこからともなく風に乗って少女の声が聞こえて来たように、それは幻覚だと思った。

「じゃあ、何だって言うんだい？」

「俺はただの……通り返りの、傘屋ですよ」

数瞬の沈黙の後、男は静かな笑みを湛えて、女へと名乗る。

それは名と呼べるものではなかったが、男を表すにはこれ以外にないと思わせる不思議な響きがあった。

「……なるほどね。役割を名とするなんて、面白い人間だ。そういう在り方が、お前さんのような人間にとっては一番良いんだろうさ。」

迷いの晴れたいい顔してるよ。でもね、それでこの私に勝てるだなんて、思うんじゃないよ」

「はい、解っています。だって勝つのはこれからですから」

「はん、言ったね！ 鬼を前にして笑うなんざ、気に入った！ もっと
愉しませてあげるから、駄目になるまでついてきなよ！」

女も耳まで裂けるような笑みを浮かべながら、男へとぐいと顔を近づけた。

額の骨から皮を貫いて直接生え出た真紅の一本角が、男へと差し向
けられる。

女は妖怪だった。

女は鬼と呼ばれる存在であった。

「そら、折ってみろ人間！ 折ってみろ！」

「勝ちます、必ず」

「下手くそな喧嘩の売り方したわりにやあ、いい答えだ。笑えるね！
殺さず手足を千切って、攫ってやろう！」

安心おしよ、寿命が尽きるまで愛でて、飼い殺しにしてあげるから
さあー！」

「俺が貴女に差し上げられるのは、敗北だけです」

「そいつはいい、私が負けたら首をやるよ！」

それは異様な光景だった。

女が撒き散らす暴虐の嵐を、男が穴の空いたオンボロ傘でいなして
は受け流している。

妖怪と真正面からぶつかり合える人間は、ほんの一握りだけだ。

そして女は力を象徴する鬼であり、そんな女の拳戟を前にしてなお
男が生き残っているのは、よほど技量が優れているか、何らかの能力
を駆使しているかのどちらかなのだろう。女の戦いの勘を信ずるな
らば、それは前者である。

視界に入れるだけでも恐ろしい光景だ。

だが当の本人である女鬼には狂気も愉悦も無く、男にも憎悪や義憤
は無かった。

その口元に笑みを浮かべ、まるでじゃれ合って遊んでいるようにも

見えた。

“この”時代、人と妖怪は、お互いに共生関係の中に在った。

あくまで、この時代では、の話である。男の知る時代ではもはや鬼は消え失せ、鬼と肩を並べられる人間も存在してはいなかった。

人は妖怪と争うことで力と知恵を身に付け、妖怪は人を害すること
で命を長らえる。

人と妖怪は食うや喰われるやの関係で、お互いの生活を支え合って
生きている。ある種の強い信頼関係で結ばれていたのだ。そんな時
代だった。

例えば、鬼がそうだ。

鬼退治の物語を紐解けば、古今東西津々浦々、どこにだってある噂
話に端を発している。鬼が悪さをするのは、掃いて捨てる程の、別段
珍しくも何ともない話だということだ。それだけ、鬼という種族は人
と密接な関係を持っていたということでもある。

ここで女が嗤ってしまうのは、鬼退治、までが鬼が持つ人との関わ
りの、一連の流れであるということだ。お話の終末の大抵が、鬼が退
治されてめでたしめでたしで終るのだ。

鬼にだって家族は居る。身内を食わせてやらなければならないし、
立場というものだってあるのだ。だから、退治されて犠牲になる鬼
は、そういう偉い奴らからだった。

鬼がどうしようもない無敵の存在であったなら、人間はずっと警戒
し、鬼の前から姿を消してしまっていただろう。

そうなれば、鬼は餓えて死ぬだけだ。

鬼に限らず妖怪は、人の肉だけではなくその感情や魂、思念を喰ら
うからだ。

だから鬼は無敵であってはならなかった。

つまり、鬼が選んだ人との在り方とは。鬼という種族とは——
——人を害し、人に敗れることで、初めて人と共に在れる種族、だっ
た。

いつか自分を打ち倒す人間が現れることを、闘争の権化である鬼は
待ち望んでいるのだ。

敗北も、鬪争の持つ一側面でしかない。それが鬼の考え方だった。しかし持つて生まれた力が本当に純粹な、唯の力でしかなかった女にとつて、それは不幸以外の何物でもなかった。

何せ、負けないのだ。

笑つてしまう程に、女は不敗を貫いていた。

彼女の力の前には、人間はあまりにも脆過ぎたのだ。

どれだけ手加減しても、ほんの少し撫でただけで手が飛ぶ、足が飛ぶ、首が飛ぶ。

遠くから術を撃たれようとも、腕を一振りしただけで悉く台無しにしてしまう。

普通の鬼であつたなら、そこそこ名を上げた陰陽師でも出張つて来たら、それで終いだつただろう。

しかし人間の用いる術など、女の持つ力の前には兎戯に等しかったのだ。

女には力があつた故に、力しかなかった故に、それを振るうしかなかった。

『怪力乱神』——語ることの出来ぬ程の、破滅的な金剛力。

若鬼である女自身には、抑えようとして抑えられるものではない。人間と戦いになどなるはずがなかった。

「ほうら、どうしたどうした！ 受けるだけじゃあ勝負にならないよ！」

女は生まれて初めて満たされていた。

実の所、女の実在は危機に瀕していたのだ。

妖怪は人に恐怖されるだけではなく、その在り方を満たさなくては消えてしまう。

人との鬪いを楽しめない鬼は、生きながら死んでいるようなものだった。

だがこの瞬間だけは違う。

息を吹き返したように、女の表情は爛々と輝きを放っていた。

きれいだな、と男は率直にそう思った。

「ああ、でも鬼を殴り返せと言うのも酷か」

よし、と女は頷く。

男の突き出した傘を片足で絡め取り、女は盃をずいと掲げた。

戦いを楽しみたいのであって、流石に人間と対等に戦いたいとは、女も思っではいなかった。

種族の壁はそう簡単に超えられるものではない。鬼と殴り合いをしようとは土台無理な話である。

故に、鬼は己に枷を嵌める。

人間が付け入ることの出来る隙を造ってやるのだ。

有名所を挙げるならば、かの酒呑童子である。

あの鬼は素面で人と戦うことは決してない。その名の如く、飲酒した後の酩酊状態でのみしか人と戦おうとしなかった。

女も鬼であるために、己に枷を嵌め、人の前に現れていた。

友である女鬼のように自分の密度を萃めたり薄めたりといった器用な真似は出来ないため、始めは手足に重りを付けて戦った。しかしそんなものに意味は無かった。次はまずい酒を浴びるほど呑んで戦った。それも意味は無かった。酔えないからだ。

終いには大盃になみなみと酒を注ぎ、一滴でも酒を零させたらお前の勝ちとしてやろう、などと首を掛けるには重すぎる枷を嵌めるまでに至った。

だが、それも女の力の前には無意味だった。

そして女は人間の脆さに諦めを抱くようになった。

しかし、と女は淡い期待を抱く。

この足先で顎をくいと上げられながら、必死の形相で傘を押す男ならば、あるいは。

「条件を付けてやるよ。この私の盃に注いだ酒を一滴でも零す事ができたら、お前さんの勝ちってことにしてやろう」

「それは有り難いことです。ついでに足を解いてくれると嬉しいんですが」

「観音様を拝めたんだ、むしろ手を合わせて感謝してほしいもんだね！」

蹴飛ばし、木っ端のように吹き飛んで行った男が危うげなく受け身を取った様に、確信を深くする。

流石はぬらりひよん。これまで間借りして来た人間の経験が集約しているのか、見た目の年齢に見合わぬ体術の達人である。

首を洗っておくべきだったか。

さて、余力は十分だが、そろそろ男の身体がもたないだろう。

これを最後の一撃としよう。否、三撃か。

「人間、いやさ傘屋さんよ。どうか死なないでくれよ。お願いだから、防ぎ切ってみせておくれ」

腰溜めに構えた拳に宿る妖力は、これまでの比ではない。

そこはまだ拳の間合いではなかった。だが、臂力に合わせ妖力までも上乘せされた拳には、距離など無に等しい。

空気が震える。地が揺れる。天が悲鳴を上げ始める。

だが女の盃にそそがれた酒には、波紋一つ出来てはいなかった。

「いくよ——！」

三歩破軍、三歩必殺——。

裂帛の気合と共に拳が放たれる。

巻き起こる拳風は、さながら竜巻の様。

大気を殴り付けることで拳戟そのものを拡散して飛ばす、妖力を用いた間接打撃である。

怖気を震う大気の塊に渦巻く妖力が絡みつき、壁となって男に迫り来る。

男の穴だらけになったオンボロ傘と、女の奥義とがぶつかり合っ
た。

東方Project 幻想郷の傘屋さん5

「は」

気の抜けた声が自分の声であると思ひ至るまで数秒。

「はは」

頬がにやけていると自覚するまで数十秒。

妖力の輝きが失せた後、地に倒れていたのは女だった。

奥義をかい潜って男が何か攻撃を仕掛けてきた訳ではない。

足首に何か違和感を感じ、気が付いた時には天地が逆さになっていた。

恐らくは、あの趣味の悪いオンボロ傘の柄を、足首に引っ掛けたのだろう。

使用された技は臂力と妖力を受け流して一方向に誘導するという、とんでもなく高度なものだったが、まさか命がけの勝負でそんな子供騙しを使ってくるとは。

笑いが込み上げてくる。

そしてそんな子供騙しにまんまと引っ掛かった自分にも。

思えばここまで人間に近付かれたことはなかったか。人を舐めたら痛い目を見ると身内連中に幾度も聞かされていたが、なるほどこういうことか。

出来ればもう少し派手にやられたかったが、人に対する警戒がまったく無かった自分が悪い。

笑ってしまう。

人間が弱いなどと勝手に失望し、人の強さを舐め切っていたのは自分だ。

文句なく、自分の負けだ。

零れた酒が顔を濡らしていた。

鬼に二言はない。

一滴どころか、酒を全て空にさせられたのだから。

「俺の勝ち、ですね」

「ああ、そうか、そうだね。負けたのか。私は負けたのか……」

ゆっくりと女は身体を起こした。

負けたのか、と繰り返す女は、どこか憑き物が落ちたような、すつきりとした顔をしていた。

「なあ、すまないんだけどさ、盃が空になっちまったんだ。お前さんがよけりや、注いでくれないかい？ 安心おしよ、暴れやしないから」

「喜んで」

男は女から瓢箪を受け取ると、とくとくと酒を注いだ。

くい、と盃を煽る。

熱い塊が喉を通り、胃に溜まり、体の内側から熱を放つ。

「………美味しい」

「もう一献いかがですか？」

言うが速いか注がれる酒に、女はありがとうよと一言返し、それを口元に運んだ。

気付けば夜の帳が落ちていた。空には円い月。月は狂気を誘うというが、女の心は波一つなく静かに凧いでいた。

水鏡となった盃に、月の光が満ちる。

水月は円ではなく、揺ら揺らと幾つもの波紋に歪んでいた。

波紋を生んでいたのは、女の両眼からぼろりと一粒だけ落ちた涙だった。

それに女が気付いたのは、水鏡に映る自分の顔を見て後だった。

「ああ、美味しい、美味しいねえ……」

酒とはこんなにも美味しいものだったのだろうか。

何時も飲んでいたものと同じものはず。

だというのに、どうしてこんなにも染み渡る。

人に負けた時に飲む酒が一番美味しいのだと、友である女鬼は言っていた。

その通りだと思った。

「ありがとうよ、傘屋さんよ。酒がこんなに美味しいもんだと、もつと早くに気付いていればよかったよ。」

出来れば今少しお前さんに酌をしてもらいたいが、これ以上手間を取らせるのもなんだ、さつくりやってくれ」

「はあ、さつくりとですか。ええと、さつくりとは、何をしたらいいのですか?」

「首を。やると言っただろう。持っていくな。なあに、私もそれなりに名の知れた暴れ鬼だ。都の大臣にでも献上すりゃあ、一生遊んで暮らせる金子を貰えるだろうよ。」

流れる血を飲めばきつと寿命も延びるだろう。鬼は酒呑みだからね、臭みはないから、一気にいってくれ」

「いや、それは」

心底困ったなと男は頭をかいていた。

「あの、首とかは要らないですから」

「だめだめ、何を言ってるんだ。鬼に二言は無いんだ。ちゃんと持つて行ってくれないと、困るよ。鬼を倒したつわものには褒美を。当然だろう?」

「いや困るのは俺の方で。じ、じゃあ別のもの。首は要らないから、別のものを下さい」

「私は別に首くらいいくれてやってもいいんだけどねえ……。お前さんがそう言うならいいけどさ。」

しかし、別のものか。金銀財宝なんてないしねえ。他になんて、私には身一つしかないわけで……。ははあん、そういうことか」

合点がいったと頷いて、女は手を打った。

酒が美味いと感じたと同時、酔いも回るようになったのだろうか。頬が熱くなっていく。

身体が熱くなって、じつとりと汗が噴き出てくる。女の肌がてらてらと艶やかになっていく。

女が僧衣の端をもって仰ぎ、風を入れてやる様から、男は目を離せないようであった。

そんな男を見て女は気付いたのか、にやりと子供が悪戯を思い付いたような笑みを浮かべる。

ほれ、と僧衣の襟元をもっと大きく開いてやった。ごくりと喉のなる音。

他者が混じっている男である。

元より酷く存在が薄く気配が希薄であり、しかしその精神性の濃いという相反する特性を持つ男は、人の気配の機微に敏感である妖怪にはそれは好かれることだろう。

しかし逆に人間には、そう関心を向けられなかったに違いない。人肌恋しかつたのだろう。男の視線が更にぎらつくのを感じる。

礼儀正しく冷静ぶってはいるが、人並みに性欲はあるということだ。

並外れた艶やかな身体を持つ女は人間に情欲を向けられることが多く、そのほとんどを鬱陶しく感じていたが、男のそれには嫌悪を感じることはなかった。

むしろ、とても気分が良かった。

「お前さん、私が欲しいのか」

「はあ……ええっ?」

「そうかそうか。いやあ、何て言うか、そう真っ直ぐに言われると照れるねえ。ええと、確かこうするんだっけか」

女は佇まいを正すと正座をして、三つ指をつき、頭を下げる。
角が地面を引つ掻いた。

「未永く……」

「いや、だから違いますって！　そういうのは冗談でもやらないでくださいよ」

「冗談なもんか。お前さんだったらいいって、お前さんがいいって思ってたんだ」

「うぐ……いや、その」

「なんて、ね。そうなたらいいなって、ちよこつと思っただけさ。

私だって鬼じゃないんだ、嫌がつてる奴のところに無理矢理押しかけることはしないさ。ああ、いやさ、鬼だけでも。」

しかしねお前さん、本気で私を殺さないつもりなのか？」

「はい。御察しの通り、依頼を受けてあなたを負かしには来ましたが、殺せだなどは一言も言われてませんから。俺も貴女を手に掛けたくはありません」

依頼、と聞いて女の顔が申し訳なさそうに歪む。

やはり、祓い屋か退魔師であつたか。ここまで凄腕なのだ、間違いないなろう。

女は、だがそんな凄腕の男が望むものをくれてやれないことに、とても申し訳なく思ってしまう。

鬼殺しの名すらくれてやれないとは。

「それはどうして？　私は人殺しの鬼なんだぞ？　生かしておいたって人間に益はないぞ。それとも、依頼主に生かしたまま連れてこいとても言われたか？」

「いいえ。ただ貴女を倒せ、とだけ」

「じゃあいいじゃないか、堂々と首を取りなよ。さつきも言ったが、首を取る前に、私を好きにしたっていいんだぞ。お前さんも体温がある

ほうがいいだろう」

「見境無い殺人鬼であったなら考えますが、でも貴女は理由のない殺しは好まないでしょう？」

そこに積まれているのは、近くの村を襲っては女子供を攫っていく盗賊団なのでは？ 近くの洞窟に奴らのねぐらがありましたよ。中は酷い有様でした」

「……ふん。人攫いなんて、鬼のお株を盗むからだよ。別に人間のためにやったんじゃないさ」

「ここに来る道中で奴らに襲われた村に立ち寄ったんですけれど、生き残っていた姉弟が、角が生えた優しいお姉さんがきつと仇をとってくれるって、泣きながら話してくれましたよ」

「これだから、人間は……」

天を仰ぐ。

また涙が零れそうになるが、それは耐えることが出来た。

何を泣くことがあるのかと。

月の光が目染みただの。

そういうことに女はしておいた。

鬼の目に涙など。人のために泣く鬼があるものか。

「あそこは戦で親を失った孤児を集めた集落でね、村なんていう程の規模はなかったんだ。子供たちだけで肩を寄せ合って何とか生きていたってのに、あいつらが……」

「どうりで、大人の死体が無いと……」

女がああ村でどのように過ごしていたかを、男は問うことはしなかった。

ただ、女が子供が好きであることと、子供達を守れなかったことを悔いていることだけは理解できた。

脆く、弱く、儂く、直ぐに死んでしまう人間。子供であれば、尚更直ぐに死ぬ。

そんな人間を、女は深く愛していたのだ。

人が鬼を倒すために技を鍛え、知恵を凝らすこと。

例えそれが殺意によるものからであっても、それだけの時間と労力でもって真摯に想いながら、人は鬼のために全てを費やすのだ。

鬼は、そんな真つ直ぐに自分達に向つて来てくれる人間が、好きでたまらないのだろう。

いつか倒されてしまいたいと思うくらいに。

殺し愛い、そんな言葉が男の胸に浮かんだ。

「ねえ、勇儀さん」

男が女の隣に膝立ちになる。

弾かれたように、女は顔を上げた。

「傘屋、お前さん、どうして私の名を……。都には大江山の鬼としか伝わっていないはずだが」

「そんなことはどうでもいいじゃあないですか。ねえ勇儀さん、面白い事を教えてあげましょうか？」

「面白い事だつて？」

「ええ、今よりずっと未来の話です。何百年か先、貴女は不思議な場所に招かれることになる。そこは人と妖怪が等しく住まう場所。

宴をしたり、力試しをしたり、きっと楽しいですよ。郷を飛び回っている巫女さんがこれまた色々な意味で凄くて——」

男の語る内容は破天荒で、理解不能な事ばかりだった。

人と妖怪が等しく在り続ける、そんな場所があるならばそこは妖怪にとつての樂園だろう。

鬼に匹敵する人間が居るのならば、最高だ。そこが地の底だつて構わない。

面白いね、と女は素直に頷いた。

法螺話にしては、面白い。

ただ、遍く妖怪を幻想にしてしまうくらいに人間が脆弱となったと

したら、自分がこの男と出会うまで感じていた失望を、全ての鬼が抱くようになるだろうという、確信めいた予感を胸に。

「そんな所があるなら、いつか行ってみたいもんだね」

「ええ、きつと行けますよ。そこでまた、一緒にお酒でも飲みましよう」

「あつはつは、何だよそれ。お前さんは一応人間だろう。何百年も生きていられるもんか」

「はは、そうですね」

笑って、男は懐から何か丸いものを取り出した。

それが懐中時計という物であることは、この時代に生きる女には知る由もない。

「おっと、そろそろ咲夜さんが復活したのかな」

「確かに、お前さんの話は面白かったよ。そいつが法螺話でも、騙されてみたいって思うくらいには」

「じゃあ騙されたと思って生きてください。人と鬼との勝負はね、本当はきつと、もつと楽しいものなんですよ。楽しむべきものなんですよ。命掛けなんてやめましょう」

「そいつが出来たらいいんだけどねえ」

「勝負は楽しむもの。命のやりとりは、殺し合いでするものですよ」

「ふうん、お前さんはそういう区別をしてるのか。鬼にとつちやあどつちも同じだが、まあ、鬼が嫌われ者だつてのは、昔から決まり切つたことさ。生き辛い世の中だよ、まったく。こいつも目立つしね」

「そうですね。それだけ綺麗な星ですから、そりやあ目立ちますよね」

「そういう意味で言ったんじゃあないんだけどねえ。だけど嬉しいよ。角を褒められたのは初めてだ」

「そんな貴女に、はい、これをどうぞ」

「何だいこりやあ。傘、いやさ笠かい？」

「はい。傘屋の笠ですよ。ほら、ここの窪みに角を通して、あご紐を

しっかり締めて。もう少し上を向いて、締めてあげますから」

「お、おう」

「うん、よく似合う。それではご注文の品、確かにお届けしましたよ」
「いや、注文なんてしてないだろう。お前さんとはこれが初対面だぞ」
「何百年後か先の話、ですよ。大丈夫ですよ、勇儀さん。人は、貴女が思っているよりもずっと強いのですよ。」

貴女が見て来た人なんて、ほんの少しですよ。それをかぶって、人の世を歩いてみれば、すぐに解りますよ」

「傘屋？」

「それでは、また。何百年後か先に、幻想郷で会いましょう」

「おい、傘屋？ あれ……どこいったんだよ、おーい」

笠の据わりを気にしていた女が振り向いた時、そこに男の姿は無かった。

しばらく首を傾げ、何をかを納得した風に女は立ちあがった。
にいつと不敵に笑って笠を持ち上げる。

男とじゃれあっている時と同じ、獰猛でいて美しい笑みだった。

「鬼を前にして一年先どころか数百年先の話とは、笑わせるじゃないか。いいぞ、生きてやる。人に寄り添いながら、喰らい合って生き抜いて、生き合ってやるさ。」

だからお前さんも忘れるなよ。私の命は、お前のものだ」

さてと、と軽く砂を払ってから、女は何処へなど無く歩きだした。

「とりあえずあの村のガキんちよ共を寺にでも放りこんで、それからどうするかな。ああ、頼光とかいうお偉いさんの相手をしてやるのもいいねえ」

盃に口を付け、傾ける。

満足そうに女は息を吐いた。

数百年後の約束に想いを馳せながら。

「ああ、美味しい」

——やがて山の四天王と称されるまで登り詰めた女鬼の、未だ若かりし頃の話であった。

この日を境に頻繁に鬼の宴に顔を出すようになった女鬼は、酒の肴にと毎回事あるごとに自分を打ち負かした不思議な傘屋の話を語るものだから、惚気はたくさんと同じく四天王となる友人にまで呆れられ、身内から非常に迷惑がられることになる。

結局鬼達から避けられ遠ざけられるのは変わらないまま、女は各地を旅することになるのだが。

それはまた別の話、別の機会に。



「お帰りなさいませ、傘屋様。ご無事のように、安心しました」

「ああ、咲夜さん、ただいま。無事に時間旅行から戻りました。体調は良くなったみたいですね」

「その節はとんだご迷惑をおかけして……お詫びのしようもございません。」

「能力の暴走にお客様を巻き込むなど、この咲夜、一生の恥でございます。どうかお気の済むまで鞭を」

「いや、鞭打ちはちよつと。脱がなくてもいいですから」

「そう、ですか。残念です。ではお詫びはまたの機会としまして、そうそう、黒白にはパチュリー様がけじめを付けておきましたので。触手で」

東方Project 幻想郷の傘屋さん6

太陽の畑に近付いてはならない。

それは人間に問わず、妖怪に問わず、幻想郷に住まうもの全てにとつての共通認識である。常識、と言うやつだ。

幻想郷縁起にあるところの安全な幻想郷ライフを送るためには、決して近付いてはならない聖域と呼ばれるものがある。いいや、魔境、と表した方が適切だろうか。近付けば命の保証は無い。そんな場所が幻想郷には多々あった。

妖怪の山とは正反対に位置する奥地、南向きに傾斜するすり鉢状の草原にあるその畑もまた、そんな場所の一つ。

太陽の畑、という名が現わす通り、夏になるとそれはもう見事な向日葵が咲き誇るといふ。

夏の夜には、妖怪の楽団によるコンサート会場として賑わうのは、幻想郷の芸術家達の間には有名な話である。

そんな素晴らしい土地がまるで地獄のように忌み嫌われ、忌避される理由……それは、この一帯を凶悪な妖怪が根城としているからだ。

人間に対する友好度は最悪、危険度は最凶。凶悪どころではない。礼儀を欠く手合いへの容赦などなく、礼という概念が薄い中堅までの妖怪にとつては出会ったが最後、命尽きるまで罅られ、蹂躪され尽くすだろう。

妖怪殺しの妖怪である。即ちそれは、恐怖の中の恐怖ということに相違ない。

もちろん友好度最悪と記される通り、人間であっても例外は無い。それどころか、虫の居所が悪ければ、視認された瞬間に踏みつぶされて終いだ。

幾度となく繰り返される惨劇に、いつしか太陽の畑は、その美しい景観とは裏腹に忌むべき場所として広く知られるようになったのである。

妖怪が向日葵に吸わせた血はいかほどになるか。

伝え聞くだけでも身の毛がよだつ。

曰く、暇つぶしに高笑いしながら、泣き叫ぶ虫妖怪を足蹴にしていた。

曰く、掃除をしようと羽ぼうきを作るために、烏天狗の羽をむしり取っていた。

曰く、遠方で陰口を利いた人間の長屋を、辺り一面ごと妖力を練り合わせた光線で焼き尽くした。

曰く、本来自由奔放なはずの妖精が、太陽の畑では必死に隠れ潜んでいる理由は、見つかったが最後その妖怪が持つ傘の先端で、目玉を抉り抜かれるからである。

曰く、曰く、曰く。

例を挙げれば枚挙に暇がない。

見た目にも惑わされてはいけない。

外見は可憐な少女なれど、その微笑みの下には恐ろしい形容不可能な何か、暗き澱が詰まっている。

正に、妖怪だ。暴力と理不尽の権化。恐るべきもの、そう称されるに足る存在だ。

あれを愛らしい笑みだなどと言うものは、よほどの強者か、見た目ではか物事を判断出来ぬ夢想家か、彼我の実力差さえ解らぬ愚物か。とかくその妖怪が、究極加虐生物などと呼ばれるのは、理由があるということだ。

太陽の畑に近付いてはならない――。

踏み入れたが最後、五体無事では帰れぬぞ。

先も説明した通り、それが幻想郷での共通認識、常識だ。

そんな、誰もが忌避する場所に、二人の少女が訪れていた。

「ふっふっふ、ここがああの女のハウスね！」

「ややや、やめようよう！ やめようようってばあ！ ここって、ここってあのフラワーマスターの家だよ！」

「やっぱりここで間違いなかったのね！ 一番強い奴をやっつけければ、そいつが一番強いってこと。つまりここにいる妖怪を倒せば、ア

タイが最強ってことね！」

「無理無理、無理だって！ やられちゃうよ！」

「アタイってば天才ね！」

「あああ、どうしてこうなったの。どうしてこうなったの！」

少女二人は生い茂る向日葵の高い背を、“羽”を震わせて飛び越えながら、騒ぎ声を上げる。

少女達は人間ではなかった。妖精、と呼ばれる自然現象の具現である。

あろうことか妖精種の少女達は、この畑に住まう妖怪に挑もうとやってきたのだ。

無謀、と言う他ないだろう。

いかに自然の具現化された存在であるとしても、恐怖の権化、恐ろしい者達の総称である妖怪の、その最上位にいる者を相手するには、自然の力はあまりに心許ない。

そして少女達が着地した先は、そこだけ向日葵が植えられておらずぽっかりと開いた、いかにもという様な空間。

「いない……ね」

「きつとアタイを怖がって逃げてつちやったんだわ！ んんーっ、アタイってば何て最強なのかしらー！」

「本当かなあ」

「これはもうアタイの勝ちね！ これでアタイが幻想郷最強！ アタイはかざみ何とかに大勝利して」

少女が勝ち名乗りを上げようとした、その瞬間。

「あら、楽しそうね」

時が、止まった。

少女の肩に手を置いた何者か。

何者かの正体など、今更言うまでもない。
ここは太陽の畑なのだ。

「ひ———!？」

「……………っひ!……………ひう!？」

「うふふふふ、楽しそうね。二人して遊んでいたのかしら。私とも遊んでくれない? ねえ」

恐怖が頂点に達すると、声など出ないと言う。

少女達は悲鳴にならない悲鳴を上げる。

最強を自称するだけのことはあり、少女には力があつた。だから、彼我の力量の差を正確に読み取つたのである。

己の肩に掛かる細指からは、尋常ではない握力が伝わってくる。万力のように締められていく指。

肩の骨が軋みを上げてもなお、少女達は悲鳴すら上げられなかつた。

「ねえ、さつき、私の名前を言いかけてたみたいだけど」

「あわわ、あわわあわわあわあわあわ」

「ほら、遠慮しないで最後まで言いなさいな。私の名前を」

「あうう、あうあうあうあうあうあう」

「聞こえなかつたの? 私の名前を、言つてごらんなさいな。ねえ」

恐ろしくて、背後を振り向けない。

目が合ってしまったえば、それだけで心臓が止まりかねない。いいや、その前に目玉を抉り抜かれるか。無事では済まない、そんな予感がひしひしと細指から伝わる。

背筋が凍つた。冷や汗も、比喻抜きで凍りつく程に。

少女の流した冷汗は氷の粒となって、きめ細やかな肌の上を転がり落ちていった。

「ほら、ねえ、ほら。遠慮せずに、言いなさい。ねえ、ほら、さあ、言つて。さあ、さあさあ、さああ——」

少女達の頭上から覗きこむ、底知れぬ真紅の瞳。

幼い精神の籬を崩壊させるには余りある瘴気が、直接注ぎ込まれる。

「う、ううううあああああつっ！」

「ああ、あああ、うわああああんっ！」

力を振り絞り、手を振り払う少女達。

二人は後ろを振り向かず、全速力でその場から飛び去った。

「ばばば、ばーかばーか！ これで勝ったと思わないことね！」

「はっ、はやく、はやく帰ろう！ おうち帰ろう！」

「ばーか！ ばーか！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

太陽の畑に住まう最凶の妖怪、フラワーマスターを知る者ならば、驚愕することだろう。

この時、花妖怪はあろうことか追撃を加えなかったのである。少女たち二人を見逃したのだ。

確かに礼を欠いた行いなどしなかったが、そも何をするにも出来なかったが、常の花妖怪ならばそれでも羽をもぐぐらいはしそうなものだが。

「ひっ、ひう、うわーん！」

「あだいぎいぎようなのに……あーん！」

いいや、あるいは、少女達の恐怖を煽っていたのかもしれない。そちらの方が面白いと思つてのことだろう。

存在として自由に空を舞うことを約束されているはずの少女達は、飛ぶ事を忘れてしまったかのように、時にお互いぶつかり合いながらほうほうの体で逃げ去っていく。

泣きじゃくりくりながら逃げる少女達。

花妖怪の笑い声がずっと少女達の耳に木霊していた。

「ふふ、うふふ、ふつふふふ、うふふふふふふふ——」

美しき太陽の畑に静寂が戻る。

後に残るは、向日葵の葉鳴りと、花妖怪のさざめく笑い声。

そして、みしみし、みちみち——と、何か引き千切られていく破滅的な音。花妖怪の両手に握り込まれた傘が、じつくりと時間を掛けて、押し曲がっていく。

花妖怪の顔には変わらない、裂けるような笑みが張り付いていた。

少女二人を逃がしたことが、もったいないと言わんばかりの。

ああ、ああ、口惜しや、口惜しや。だが今は未だ、時を待とうぞ。

「次こそは、次こそは……」

花妖怪の呪詛を吸い、向日葵達は一層美しく咲き誇る。



最近評判の幻想郷入りした新参者。

小傘屋の主人であるところの傘屋は、着実に幻想郷内傘屋のシェア

を拡大しつつあった。

彼が作る丈夫な傘が妖怪たちの目に留まり、有力妖怪御用達の品となったからである。

未だ新参でありながら、人里内で小傘屋は品質だけでなく、ブランド力を付けつつあった。

ほとんど傘業界を独占しているようなものであり、同じ職人たちのやっかみを買いたいような所だが、しかしその主人である傘屋は鼻に掛けた様子もなく、慎ましい生活を送っている。

というのも、元々が閉鎖空間である幻想郷内の流通はそこまで大きく動くことはなく、また傘など一度買われてしまえば長く売れることはないからである。

同じ傘業界の職人から恨みを買わないのも、普段は彼等も別の仕事に手を付けていて、こうして年中傘ばかり張っている傘屋の方が珍しいからだ。副収入がありそちらの方が実入りが良いのだから、こんな割に合わない仕事など譲ってやろうではないか、ということだ。

そうなる之主と副職が入れ替わるのも早く、專業傘屋はいまや幻想郷ではこの男唯一人となっていた。

上手くスキマ産業に身を置いた形である。いいや、入り込んだのか。

しかし、一度傘が売れてしまえばしばらくは収入が無くなるのは傘屋も同じだった。

多くの職人たちと同じように、売り物が消耗するまでの間、材料費、生活費諸々は、日雇いの仕事を請け負うことで稼いでいる。

職人のコミュニティなど狭いもので、元々たった一つの能しかないのだから職人になったような人間達である。そんな複雑な仕事など出来るはずもなく、下請けか伝手による内職しかすることはない。外の世界でいうところの、アルバイトというやつだ。

では傘屋はというと、例に漏れず伝手を頼って今日も日銭を稼いでいた。

先生、と呼ばれる人里の守護者から紹介された、さる商店の従業員の仕事である。

「傘屋さん、これは何と言う道具なんだい？　音楽が流れるものだと解るんだけど……」

「ああ、それは音楽プレーヤーですよ、霖之助さん。いや、そのまま耳にあてても何も聞こえませんかよ。波の音が聞こえる、じゃなくて。イヤホンを付けないと。その前に充電も必要ですし」

「また電気か。動力が同一規格にまとめられているのは便利だと思っただけれど、こっちで使う分には不便だね」

「産業革命すつとばしてますもんね、こっち。霊力とか妖力が中心の世界なんだから、魔法技術みたいなのが発展するのかもしれないよ、やっぱり一般家庭には浸透しませんし。」

ましてやここにあるようなゲーム機で子供たちが遊ぶなんて、ここが幻想郷である限り、そんな発想は出ないでしょうね」

「いいや、そうでもないよ。子どもたちは遊びの天才さ。このゲーム機だって、外の世界のおもちゃだと説明したら、すぐに遊び方を理解したよ。必要なものも、全部自分たちで準備してしまった」

「へえ、それはすごい。でも紫さん達は何も言わなかったんですか？　外の技術が普及してしまうのは、あまり歓迎出来ることではないのでは」

「はは、所詮は子供のおもちゃじゃないか。あれはそんなに危惧するものではないだろう。こっちでも蹴鞠にして遊ぶのが一時期流行ってたね。その時だって、賢者達のおとがめはなかったから、大丈夫さ」

「そうですか。なら安心ですね……ん？　蹴鞠？」

「僕も何回か誘われて、中々の腕前になったんだよ。いや、足前かな。ほら、こんな風に」

「やめっ、やめろオ！　メガドラ様を足蹴にするんじや、あああああ」

「一度使うと二度と使い物にならなくなるのが困ったところだね。使い捨てのおもちゃか。なるほど外の世界の贅沢品、ということか。ほら、傘屋、今度は君が蹴るといい」

「あああああ」

そこは幻想郷では珍しい、外の世界の道具を専門に取り扱う店。魔法の森、その入口に面した危険な場所にある店の名を、香霖堂と
いった。

傘屋が雇われ従業員として働いている店である。

外の道具だけではなく、魔法の道具、妖怪の道具、果ては冥界の道具までも取り扱う珍品専門店であるが、客の入りは滅多に無い。

それはひとえに、商品に値札が貼られていないため、品物が欲しければ店主に相談しなければならぬ、というルールのせいであった。店主がこれがまた生真面目な性格で、いい加減な者の多い幻想郷の面々にとって、非常に付き合えない男だったからである。

傘屋も生真面目な性質であるが、打てば響く所もあり、からかい甲斐のあるということ。こちらは年を経た妖怪を中心に受け入れられている。

足して二で割れば丁度いいような男達であった。

馬が合うらしい二人が、こうしてああでもないこうでもない、無為な会話に時間を費やしながらい庫の整理をしていた、その瞬間のことである。

がらり、と扉の開く音。

「お邪魔するわ」

時が、止まった。

霖之助の表情筋が全て凍りついたようにして動かない。

客だ。客が来たのだ。

だが霖之助は出入り口を振り向くことが出来ずにいる。異様な圧力が声の主より放たれていた。

時間を空間ごと縛りつけるような濃密なプレッシャーの中、傘屋は「ああ咲夜さんも能力を使っている時、こんな気持ちなのかな」などとあっけらかんと考えていた。

「いらっしやいませ」と道具の整理を中断し、にこやかに接客に入る傘屋。

『雨を防ぐ程度の能力』によって、雨あられと降り注ぐ圧力を受け流したのだ。

「うふふ、そう固くならないで欲しいわね、店主さん」

「いらっしやい。珍しいね、君がここに来るなんて」

ここに来てようやく再起動する霖之助。

招かれざる客に対しても、接客サービスを忘れないのは流石だが、流れる冷汗は止められない。

よくないパターンに入ったことを感じているのだ。

こういう手合いの客が来店した時、店が無事であったためしがない。

「ええ。でもごめんなさいね、今日は買い物に来たわけじゃなくつてよ」

ひやかしであると公言しても、嫌みを感じさせないのは、その客が気品溢れる女性であるからか。

薄らと浮かべられた可憐な笑みが、酷く似合っていた。

恐ろしい程に。

「安心して。お金は払うわ」

「……ははあ、つまり商品を買いに来た訳ではないと。では、何をお求めかな？」

すうっと、白磁のような指が真っ直ぐに伸ばされる。

その先にはきよとんとした顔の傘屋が。

「貴方のお店の従業員を」

「これはこれは、お目が高い。ただいまタイムサービス中でしてね、ええ」

「いや、俺はまだ勤務時間で」
「いいじゃないか傘屋さん。ほら、行ってきなよ。後は僕が全部やっておくから安心して外に出てくれさあ早く行ってくれ今すぐに」
「話のわかる店主さんで嬉しいわ。確か………こーりん、だったわね。覚えておいてあげるわ」
「それはどうも。何度も顔を合わせているはずだけどね。名前………」
「いや、だからですね」

抗議する傘屋を無視し、彼女は財布を取りだす。
勤務時間と等価の金を支払おうというのだろう。
無視して攫ってしまえばいいものを、そうしないのは彼女が大妖怪であるからか。

時を経た妖怪は理性的となり、貸し借りや約束といった決まり事を守ることを重視するようになるのだ。
霖之助が弾いたそろばん通りの金額を出そうと、彼女は紙幣を数える。

傘屋の代金を手渡された時、霖之助は気付いた。
紙幣が、赤い。
それを掴む彼女の手から、血が滴り落ちて――。

「こ、これは、まさか返り血では………!」
「あら、ご不満? お金に綺麗も汚いもあるかしら?」
「いや、それは、しかし、一体誰の………」
「誰の、だなんて嫌ね。私が怪我をしているとは思ってくれないのかしら?」

「君が? 馬鹿なことを。君ほどの大妖怪を傷つけられる者が、そうそう居るはずがない」

「あー、ちよつと、霖之助さん。あのですね」

「そうね。最強の妖怪だなんて噂が立って、本当に迷惑しているの。最近では礼儀を弁えた人間も、妖怪も少なくて、つまらないわ。遊び

に来てくれた方には、素敵なおもてなしをしてあげる事を約束しているのよね」

くすくす、くすくすと笑いながら、彼女は指先を伝う血を舐め取る。くちゆくちゆと情欲をそそる音。

ちゆぷ、と細い指先と紅い舌から伸びる銀の橋に、傘屋は腰の後ろに鈍い衝動を感じた。

「待つてくれ。この店に来る途中で君が誰かを手に掛けたのだとしたら、僕の責任にも……」

「気にする必要はないわ。貴方には関係の無い事よ」

彼女はさも何でもなかった風、ぴしゃりと吐き捨てる。

有無を言わせぬ態度。

窓ガラスがひび割れ、品物が倒れる。凄まじい妖力が彼女を中心に吹荒れた。

発せられた妖気に霖之助は無理矢理口を閉ざされた。

「受け取りなさい。対価よ」

「……まいどあり」

肩を竦めて霖之助は紙幣を受け取る。

諦めた様子だった。

冷静を装ってはいたが、紙幣を受け取る際の手の震えは隠せてはいなかった。

妖気におびえたのではなく、店内の荒れ具合に心を痛めている様子だった。

面白いという様に彼女はにいと笑う。

このように、大妖怪を前にしておびえを見せぬ者は、たとえば半妖であつても珍しい。

裂けるような笑みだった。

彼女が店に踏み入ってからこちら、霖之助は決して目線を合わせようとはしなかった。

台風を存在として恐怖するものはいない。現象として受け取るしかない。

はやく過ぎ去ってくれと、ただ思うのみである。

「うふふふふ．．．．．それじゃあ、行きましようか。ねえ、傘屋」

「いや、だから、いいいいっ!?! たたたっ!」

「まさか、嫌だなんて言わないわよね?」

そつと握り込まれる傘屋の手。

細くて白い彼女の両の手に握り込まれ、武骨な職人の手が硬直する。

傘屋は総身が緊張に強張るのを自覚した。掴まれた腕の骨が危険な音を立てて軋む。

真つ直ぐに彼女を直視出来ず、掌にじつとりと汗が噴き出てくる。心臓がドキドキと、痛いくらいに脈打ち始める。

このままでは耐えられないと、無理矢理振りほどこうと思っても、そうは出来なかった。細くて白い指はひたりと吸い付いて、離れない。

「嫌、なの? ねえ．．．．．?」

じつりと下から覗きこむように、上目使いで問う彼女。

細指がまるで万力の様に傘屋は感じた。

比喻ではなく、本当に、物理的な意味で。

骨が軋む。

靱が伸びる。

筋繊維が破断されていく。

傘屋の指の体積を無視して、押し別けるように彼女の指が喰い込んで来る。

びち、びち、びち……破滅の足音がはつきりと傘屋には聞こえていた。

「いやじゃないです！どこへでも、喜んでお供させて頂きます！」
「そう、ありがとう」

曲がっていく手を涙を浮かべてさする傘屋。

手は職人の命である。いくら今は本職から離れていたとしても、大事にせねばならないというのに。

痛みを堪え捻れ曲がった指を一つ一つ霊力で元に戻しながら、傘屋は彼女のなすがままに、引き摺られていく。

掴まれた場所が手首に変わったが、大して良くはなっていない。うっ血し始めた手首から先が、嫌な色に変わり始めていた。

「じゃあ、あなたの所の従業員さん、借りていくから」

「ええ、こんなのでよかつたらいくらでもどうぞ」

「こんなのって……俺の意思は……」

「ごゆつくり、と良い笑顔で霖之助に見送られながら、引きずられていく傘屋。

店を出る瞬間に足で自分の傘を引っ掛けて帯に差したが、傘に描かれている趣味の悪い目玉模様は、何とも迷惑そうに歪められていた――

――ような気がする。

そのまま人里の方へと歩んで行く二人。いや、引きずられていく傘屋。自力で歩かせるつもりはないようだ。

彼女は傘屋の様子など意に介してはいないようだった。焦点は常に前に、視線は固定されていた。

反対の手に握られた傘屋謹製の鉄傘が、ミシミシと叫び声を上げている。めったな力では曲がらないように、妖怪の武器職人に頼んで鍛えてもらったはずの鉄だったが、彼女の握力には耐えられないようだ。じわじわとした圧迫に、軋む音は一層激しくなっていく。

当然傘屋の手首もあらぬ方向へと傾いていく。

と同時に傘屋の顔色も、自分が持つ趣味の悪い傘のように、紫色に染まっていく。

人里の道行く人は一斉に家屋に引っ込み、戸の隙間からこちらの様子を覗っていた。

「おい、見ろよあれ、花妖怪だぜ……何て恐ろしい。笑ってるよ、きつと誰かを殺した帰りなんだ」

「よせ、直視するな！ 気が触れるぞ！」

「あいつ、腕がひん曲がってやがる。確か職人長屋のあんちゃんだったよな。可哀想に」

「きつと、あのまま引き摺られて行って、喰われっちまうんだ。ああ、恐ろしい恐ろしい」

「ああ、そうだな。なんてうらやましいんだ……！」

「ひいっ、こっ、こっ、こっち見た！」

「う、うああ、あああつあああ！ ししし死にたくねえよおう！」

「人里だつてのに、おかまいなしかよ！ クソツ、妖怪め！」

「G O T O U ・ S ・ C ! G O T O U ・ S ・ C !」

「しいっ！ 声がでかい、気付かれるぞ！」

ひそひそと聞こえる声は、彼女の加虐性を恐怖するものばかり。

誰も助けに入ろうなどという者はいなかった。恐ろしくてたまらないのだ。守護者を呼べ、という声さえ上がらない。どうか嵐よさつてくれと、声押し殺して祈るばかりだった。あるいは小さく声を出して。

上級妖怪の聴覚に余すことなく届くそれらは、傘屋の腕を容赦なく砕いていく。

唇を噛み締めながら、彼女の顔色も傘屋と等しいまでに青紫に染まっていた。

我慢しかねているようだった。

そしてそれに、いつ爆発するのか、と恐怖する人々。前衛芸術と化

していく傘屋の腕。それを見て恐怖を煽られ、悲鳴を上げる人々。負のスパイラルである。

強張っていく彼女顔が、傘屋の腕の残り耐久度を予感させる。脂汗を流しながら、傘屋は口を開いた。

「幽香さん。そろそろ手を離して頂きたいのですが。その、また勘違いさせてしまいますよ?」

「黙って歩きなさい」

「……はい」

黙って歩を進める傘屋。

そのまま二人は人里を抜けた。

向う先は解っている。

そう、踏み入ったが最後、生きては二度と出られないとされる、幻想郷屈指の危険区域——太陽の畑だ。



太陽の畑に臨した場所。

一件の簡素なログハウス、そのテラスで傘屋と彼女は向きあっている。

さざ波のような風が舞う。

物理的な威力を伴う程の殺気を至近距離からぶつけられてなお、傘屋は涼しい顔で言う。

「やっぱり何度来ても、素敵なお家ですね」

「そうかしら? ありがとう」

くすくすと笑って彼女は答える。

「そうですよ。丁度品の趣味もいいし、これはオリジナルブレンドのアロマかな。うん、いい香りがする」

「私のお気に入りなのよ」

「幽香さんの香りですね」

空気が軋む。

彼女の表情が一変したが、見ないふりをして傘屋の言葉は続く。

「温かくて、柔らかくて、それでいて……寂しい香りがします」

「——そう」

風が凍る。

たなびく細く吹く風を目視してしまえるかのような錯覚。

凍える風を見詰めて、彼女は今まで時を過ごして来たのだろうか。

「なら寂しくないようにしてくださいませんか？　ねえ、傘屋。あなたも

向日葵達の養分になってくれる？」

「まあ、俺が死んだ後は灰をそこらに撒いてくれたらいいですけど」

そつと首元を、動脈に爪を立てる彼女に傘屋は苦笑する。

「まったく、無理して悪役なんてやらなくてもいいのに」

「無理ですって？」

「顔、すごく引きつってますよ。そうまでして人間の期待に応えなかつたっていいんですよ。別に、恐怖の大妖怪じゃなくなつていいじゃないですか。」

イメージを守る必要なんてないでしょうに」

うつと喉を詰まらせる彼女。

引つ込められた手が、握りこぶしを作る。

ぱきん、と軽い音。

彼女の握りこぶしから、血が滴っていた。爪が割れた音だった。割れた先から修復されていくのは、彼女の妖力が絶大である証拠だ。

「霖之助さんにも誤解だつて、言えばよかったじゃないですか。さっきの血も、爪が割れちゃったからなんでしょう?」

「花は孤独に咲くものよ。私は強者として生きて、そう振舞つて来た。今更言い訳などしないわ」

「でもそれはきつと、寂しい生き方ですよ」

「人間に同情される謂れなんてないわ。自分に都合のいいことをわめくしか能がない羽虫の分際で、おこがましい」

「そして貴女はその虫を喰らう食虫花、ですか。そうは見えませんかどね。むしろ——」

「むしろ、何? 言ってみなさいな」

「いえ……まあ、こんなぬいぐるみを持つてる人には、似合わない台詞だなあと」

「え……? あっ! やっ! 見ちゃだめ!」

こんな、と傘屋が指差したのは、窓ガラス越しに見える室内。

小さく整えられたベッドの、枕元にちよこんと座っている熊のぬいぐるみだった。

席を勢いよく立ち上がった彼女が背にガラスを付けて、傘屋の視線を遮る。

凍えていた風が、燃えるように熱くなったように感じる。

開いた間合いは傘で埋められた。

痛い。

「か、かつ、関係ないじゃない! 関係ないじゃないの!」

「痛い痛い痛い」

「い、いいじゃない! 可愛いものが好きで悪い!? 悪いの!? それ

で貴方に迷惑かけた!? 株価が暴落するの!? 世界が滅びるの!?」
「ま、待った待った落ち着いて! マSPAは不味いですって! 射線
上にあるものを考えて!」

傘の先端に集まっていた妖力の輝きが霧散する。

広域殲滅妖力砲である。

傘屋の背に向日葵畑が無ければ間違いなく放たれていただろう。

妖怪との付き合いでは、あまり口を滑らせない方がいいというのは
言うまでもないだろう。

彼等は人間など簡単に殺してしまえる手段を幾つも備えているの
だ。

ちよつとしたことで機嫌を損ねてしまえば、そこまでだ。
例えそれが照れ隠しであったとしても。

「何なの? 可愛くないと可愛いものを集めたらだめなの? 馬鹿な
の!?! 死ぬの!?!」

「いや、だからですね」

「ぐぎぎ、ぎぎぎぎ……どうせ私は可愛くなんかいいわよ……
!」

「そんな歯を食いしばらんでも」

奥歯をギシギシと軋ませながらテーブルを叩く彼女。

一打毎に水平であった卓上が傾いていくのが恐ろしい。

「寂しくなんてないわ」

「そうですか」

「ないんだから。ほんとよ? 人間の心配なんていらさないわ」

うつ血している手首に優しく花の蜜から作られた軟膏を擦り込ま
れつつ、傘屋はまた苦笑した。

まったく、この人らしいなあ、と。

傘屋の気配を察知したのか、不機嫌そうな気配。
肩口まで伸ばされた翠色の髪から覗く、紅い瞳が傘屋を睨む。

「あ、つつつ」

「だ、大丈夫？ きつくなかった？」

「ええ、大丈夫ですよ。ちよつと染みただけですから。もう痛くなくなりましたよ」

おっかなびつくりといった体で傘屋に触れる彼女。

研ぎ抜かれた刃のような切れ長のまなじり。ゆるやかにウエーブがかかった翠色の髪。小さな鼻に、薄い色合いの唇。

白い簡素なブラウスに、赤いチェックのスカートとおそろいの柄のチヨツキが良く映えている。

それぞれのパーツ全てが鋭く整っていて、触れば骨までぎつくりと切れてしまいそうな、怖気を振るう程の美貌だった。

「痛くない？ ねえ、本当にもう痛くないの？」

「もうそれほどには。薬が効いたんですね。ありがとうございます」
「本当に？ 隠していると酷いわよ」

「いや、そんな怒られても……」

そんな彼女が今、冷たい美貌に涙を浮かべている。

涙を浮かべて、鼻水をすすってさえもいる。

まるで自分が犯してしまった所業を後悔するように。

ともすれば見下されて蔑まれていることを心底思い知らされる凄味を醸すその顔に、涙を滲ませながら鼻をすすっているのだ。

それを傘屋に悟られてはいないと思っっているのだから、指摘はしない。

先ほどまで万力の様に傘屋を締めつけていた指は、今は反対にやわやわと傘屋の腕を撫で、薬を塗り込んでいた。

幻想郷に伝え聞く最凶の妖怪像からは、考えられない光景だった。

思いつめた表情で凄味を滲ませながら、ぐすぐすと鼻を鳴らしているのは、むしろ不気味である。

「迷惑、かけたわね。ごめんなさい」

素直に頭を下げる姿も、これも普段の彼女を知るのならば信じられない光景だった。

「私、落ち込むと周りが見えなくなっちゃって……」

「いいんですよ。気が滅入っていたら、そういうこともありますよ」

「子供達は皆、私が近付くと泣いて逃げちゃうし……」

「後ろから声を掛けられて、びっくりしちゃうただけですよ、きつと」
「えうう」

「ああ、ほら、泣かないで」

「何よばかあ。ばかあ」

傘屋のとりだしたハンカチを遠ざけようと、「うぐーっ」と両手で胸板を押してくる彼女。

ほほえましい光景に見えるが、彼女は膂力に長けた妖怪である。される傘屋はたまったものではなかった。

傘で叩かれる方がよっぽど良い。直接力を注ぎこまれるのがどれだけ危険か。

肋骨がひび割れていく音が体内に響く。

「ごきぢきぢき」

「あ、ちよっ、傘屋!? ご、ごめんなさい!」

苦悶を噛み殺し、内傷を霊力で回復させる。

霊力発現の修行を始めてからこちら、弾幕ではなく自身の傷を癒すことに使われる方が多かった。

傘屋も癒しの力を行使する方が得意である。これは傘屋に修行を

付けてくれた国守の神の影響だろう。双つ神様々である。二柱で御利益二倍二倍。どこかの駄目脇巫女とはえらい違いだった。

山の神社に傘を奉納しに行こうと心に決めながら、傘屋は彼女に呼ばれた理由をまとめてみた。

自然と頬が緩むのは、痛みのせいではない。

「なるほど。まとめると、一緒に遊びたかったのに怖がられて、逃げられたのがショックだった。それで笑うしかなかった、と」

「……そうよ、文句あるの？」

「まさか。たまたま警戒心が強い子達だったんですよ。きつと」

「………ん」

「まあ、愚痴ぐらいはいくらでも聞きますよ。でもそこで折れちゃあだめです。ね、次がんばりましょう？」

次、とはもちろんのこと、彼女のやさしいお姉さん化計画のことである。

黒白の魔法使いあたりならば、似合わないお腹を抱えて笑うだろうが、この二人は本気である。

傘屋が彼女と初めて出会ったのが、彼女の落とした日記帳の中身を改めそれを届けたからであり、どれだけ彼女が本気であるかを知っているからだ。

余談であるが、運悪くその時の彼女は歌の練習中で、自作の歌をフリ付きで向日葵に披露していた真っ最中だった。

羞恥に悶える彼女に半殺しにされたのは、今ではいい思い出である。

お詫びにと傘屋が作った傘を買ってくれるお得意様の一人になってくれたのだから、これくらいのアフターサービスに付き合うのは当然だ。

その日から、何かと傘屋は愚痴の聞き手として彼女の自宅に招待されるようになったのである。

「どうして怖がられちゃうのかしら……」

「ああもうほら、鼻をかんで。もつとこう、にこやかにしてないと、子供たちに好かれませんよ」

「っ、っこう？」

ぐつと堪えて、彼女は笑った。

背筋に氷柱を刺し込まれたような感覚に傘屋は震える。

怖い。

爛々と紅く輝く眼。裂ける唇。

こんなにも笑うことが苦手な女性も珍しい。

がんばれと言った手前、これは無理そうだと言う訳にはいかない。

「そ、そうそう。そんな感じですよ。はは、は……」

「ん……ありがとう」

本人にしてははにかんだつもりなのだろうが、怖い。

彼女から目を逸らすようにして、傘屋は天を仰いだ。太陽が目に見える。

ニヤリ、ニタリ、ギシイ、ククク——と頬笑みを練習している彼女と最も付き合いが深い人間は、これは間違いなく自分であるだろう。

霊夢や魔理沙とも付き合いが長いが、深くはないのだ。付き合いが深くなれば、その人の違った側面が多く見えて来る。

例えばこんな、彼女の意外な一面が。

趣味はお花を育てること。

なりたい職業は歌のお姉さん。

将来の夢はお嫁さん。

日記には自分の事をゆかりんと書いている。

子供大好き。一緒に遊びたいが、輪に入れたためしがない。

等々。

傘屋が知った彼女の一面は、幻想郷中から最凶の妖怪として恐れら

れているものとは、全く正反対のものだった。

彼女自身も物怖じしない人間と出会えたことは嬉しかったらしく、それは多くの事を教えてくれた。他愛もない、彼女自身のことを。

そこで傘屋は気付いたのである。

幻想郷の先入観を全て取り払って考えるならば、つまりは彼女は――

――風見幽香という、妖怪は。

彼女が誇る容姿と力から、他者に無用な勘違いを巻き起こす、勘違い系の妖怪なのだということ。

「ん、よし。元気でた。ありがとね、傘屋」

「そうですか」

「どうしたのよ、そんなにやにやしちやって」

口を尖らせて不機嫌さをアピールしている幽香。

やぶにらみの眼がナイフの先端を思わせて、恐ろしい。いつ刺されるのかと肝が冷える。

しかし一人しんみりと考え込んでいたからか、傘屋の口は滑らかになっていたようだ。

「いえ、なんだかんだ言ってもほら、やっぱり幽香さんは可愛いな、と」

「は、え？ か、かわ、かわあああ!」

高まる妖気。

傘屋は墓穴をほったことを気付いた。

だがもう遅い。

「あ、いや! い、いまの無しでお願いします! いえ、幽香さんは可愛らしいですが、いやそういうことではなくてですね! 待って、それは本当にやば――」

「あああああ………ばかあ!」

「い――!」

肩口から先が視認不可能になる程の、神速のストレート。
実の所、幽香が恐れられている最たる理由は、純粋な暴力に依るものであった。

長く生きた妖怪はその時間に比例する妖力を持つ。彼女も例に漏れず、花妖怪の呼び名が指す能力である『花を操る程度の能力』は、おまけ程度でしかなかった。

恐るべきは純粋に高い妖力と、桁外れの身体能力である。

脅威の脅力で殴りつけられた傘屋は、悲鳴を細く残し、血反吐を撒き散らして地面を転がる。

かつて鬼の四天王に受けた必殺の一撃とは、全く比べ物にならない威力だった。

当然、こちらの方が上である。

「は、恥ずかしいことを言うんじゃないわよ！　な、な、殴るわよ！　殴るわよ!?!」

「殴る前に、言っただけで、す………」

中々に洒落にならないレベルの吐血でのたうつ傘屋だが、幽香は一瞥もくれる事は無い。ぎゅつと目を瞑り、あうあうと何事かを口走りながら、両手を振り回すのに忙しそうだった。

性根は純粋な乙女なのだろうが、立ち居振る舞いがどうしようもなく強者なのだ、と思いきる傘屋だった。さすが究極加虐生物である。

妖怪との触れ合いは常に命の危険が付きまとう。猛獣もかくや、いや野生の虎の方が可愛らしく見えるだろう。

一通り慌ててから冷静になったのか、幽香は惨状に気付いて傘屋に駆け寄る。

「ああっ、ま、またっ！　ご、ごめんなさい傘屋」

「いえ、いいんです。いいんですよ………」

双つ神の巫女仕込みの霊力で内傷を癒し、どうにか立ち上がる傘屋。

そんな傘屋の様子を、ちらちらと幽香は盗み見る。

何かりアクションを求めているようだが、ここで間違った対応をすれば痛い目を見るに違いない。

虎が親愛の情でもって人にじやれついたとしても、それで人が無事でいられるか、という話だ。

彼女と交友を持つとうとするならば、自己治癒能力の一つや二つがなければ、事故で普通に死んでしまう可能性が大なのである。

そして、それに彼女自身あまり自覚が無いということが、一番の問題であろうか。

力を制御するには常に気を張っていないければならず、遠慮のない対応はそれだけ傘屋が信頼されているという証拠にもなるのだが。

全く悪意の無い行動が、全て暴力に繋がってしまう。

勘違い系は伊達ではない。

彼女自身は大したことはないというつもりでももしれないが、あんなレベルの殴打を喰らえば今度こそ死んでしまうだろう。

よし、と傘屋は作務衣についた土を払った。何をかいい事を考え付いたという顔。

「よし、解りました。ここはお詫びということで、幽香さんのために一肌脱ぐこととしましょう」

「ふえっ？」

「ちええええええん！ 来てくれ、ちええええええん！」

天高く、声を張り上げる傘屋。

「うにゃあーん！」

すると間もなく、不思議な事が起こった。

じわりと空間が滲んだかと思えば、どこからともなく緑色の帽子を

被った小柄な少女があらわれたのだ。

帽子の脇からは猫の耳がはみ出し、スカートに空けられた穴からは、こちらも二つに別れた猫の尻尾が飛びだしている。

空中でくるくると三回転すると、すっとと器用に着地して、傘屋へと歩み寄って来る少女。

「あー、傘屋さんだー。こんにちわ!」

「はい、こんにちは。早速だけど橙、助けてくれないか?」

「もつちろん!」

どーん、と飛びつく少女を危うげなく抱き上げる傘屋の袖を、幽香が引く。

「ねえ傘屋、今この子、どうやって現れたの? 妖術にしては、構成がおかしいように見えたんだけど……」

「ああ、あれはにとりさんの実験で、ちよつと、まあ、色々ありまして」「実験? 何の?」

「量子的にどこにでもいたりいなかったり……。まあまあ、それは今は置いておきましょうよ。さあ今回のゲストはこの橙ですよ」「え、ええっ!?! い、嫌よ! 何をするつもりか解らないけれど、どうせまた怖がられちゃうんだから!」

少女を怖がらせないためにか、そっぽを向く幽香だったが、この少女が何者かを問う事はなかった。虚空から瞬時に現れてみせたのに、である。

そう、少女は知名度だけならば、幻想郷内でもかなりの高位にであった。

妖怪の賢者の、式の式。その名を橙（チエン）という、化け猫の少女である。

虚空から現れたのも、妖怪の賢者の式の式、と考えればなるほど相応しい能力であるのかもしれない。

「んー……？ あ、このお姉さん知ってる！」

「知っているのか橙」

「うん！ どえすさんでしょ？ 里の皆が言ってたよ！」

「どえっ!?!」

「あ、ごめんね。えっと、アルティメット、何だっけ？」

「ゆうえすしい……」

「こ、こら橙、そんな言葉どこで覚えてきたんだ！」

「人里。みんな言ってたよ。このお姉さんは、三度のご飯より人間の悲鳴が好きなんだって。特に子供の」

「……枯れたい」

「幽香さんしつかり！」

膝から崩れ落ちた幽香に掛ける言葉がない。

見目が幼い相手からの言葉であったことが余計に堪えたのだろう。うつ伏せにピクリともしなくなった。

これは早い所ことを進めた方がいいだろう。

幽香が枯れる前に。

「ねー傘屋さん。このお姉ちゃんにいじめられてるの？ 顔が怖い

し、やっぱり悪い人？」

「えううっ!?!」

「違う違う、このお姉ちゃんがね、皆と遊びたいんだけど、人数が足りないからって。だから助けてくれーって橙を呼んだんだ」

「わああ、一緒に遊んでくれるの?」

ぴよんと傘屋から飛び降りて、幽香へと近付く橙。

幽香はどう対処したらいいのか解らないといった風に、おろおろとしていた。

「えっ、えっ、ええっ!?!」

「ほら、幽香さん。今ですよ」

「や、やめっ、背中押さないでよ！ ど、どうしたらいいのか解んないじゃないのー！」

「いいんですよ、解らなくても。頭で考えるのなんかやめましようよ」
「で、私はこんな感じに振舞ってればいいわけだ。面倒なところこぼっかに呼んでくれるよね、ほんと。」

いきなり花の大妖怪の相手しろなんてさあ。そろそろ脳天気で純粹元気な橙ちゃんは品切れよ。

そこそこ、解ってるの？ 指の一本二本もらわなきゃ割に合わないんだけど？」

「橙ちゃんはそんな大人っぽいこと言いません」

「外からきた屑人間見つけたら私に一番に知らせなさいよ。最近、血の味が口寂しいわ」

「ほ、ほら幽香さん。この子と一緒に遊んで来たらどうです？ そこに隠れてる二人も一緒に。ほら、出ておいで」

そこに、と傘屋が指差せばがさがさと向日葵が揺れ、二人の少女が転がり出て来る。

「ひいっ！ ばれてる、ばれてるよチルノちゃあん！」

「ふっふっふ、これはこうつごーね。最強のアタイは逃げる訳にはいかないんだからー！」

「チルノちゃあああん!?!」

「アタイが勝てばアタイが最強ね！ さぁりベジンだ！」

「それリベンジだよチルノちゃん！ やめてー！」

緑の髪を頭の横で一束ねにした少女に、水色の髪を大きなリボンで結んだ少女。

二人の背には薄い羽が。少女達は妖精と呼ばれる自然の具現した存在だった。

確か湖に住む氷妖精と、その親友だったか。

霊夢や魔理沙につつかかかっていくのを何度か見たが、傘屋にとつてはこれといった面識はない相手だった。

この際だから巻き込んでしまえ、という傘屋の魂胆である。

「おっと、今日は弾幕ゴツコは無しだ。これだけ参加人数が多いんだから、バトルロイヤル方式でいこう」

「私も入ってる!？」

「バトルロイヤルってなーに？」

「つまり、最後まで勝ち残ってた奴が最強、ってことさ」

「うなー」

「わかりやすくいいわね！」

「勝負方法も特別なものにしよう。そうだな……………」

「ちよ、ちよつと傘屋！ 貴方を勝手に……………！」

幽香には悪いが、やはり人間を相手するには彼女は強すぎるのだ。ましてや人間の子供など。

強き者は弱き者の気持ちなど、解らないという。それは真理だと傘屋は思う。

あまりにも強者。

あまりにも強靱。

あまりにも強力。

絶対者足り得る彼女が、子供などという、弱さの象徴とも言える存在にそれ程まで執着を注ぐ理由。

それは、彼女の中に弱さが、欠片も存在していないからではないだろうか。

弱者を庇護することで、自身に弱さを取り入れ、それを慰めにしようとしているのではないだろうか。

人はそれを強者の理屈であると言うのかもしれない。

だが傘屋には、それは孤独な妖怪の母性ではないかと、そう思うのだ。

幻想郷に来てすぐのことだ。傘屋は賢者達と語らったことがある。

その場で語られた話題の一つに、こんなものがあつた。
曰く、完全な存在などない。

妖怪が人間の精神的エネルギーを必要とするように、あらゆるものは弱さとも呼ぶべき欠けたる部分を持つているのだ。

陰陽併せ持つのが存在の必定である。幻想郷の住人ならば、なおさらのこと。

他の強い心で補わなければ、括らなければ、精神の存在である妖怪は消えてしまう。それは恐怖か、あるいは――。

妖怪たる私も例外ではない、とそう言つて、賢者は哀しそうに星を眺めていたのを覚えている。

それは、花を愛でている幽香に良く似た横顔だつた。

自らが強者であればある程、他者に弱さを求めねば、存在し得ない者達――妖怪。

普通の妖怪であるならば、人間に恐怖を与えていればそれで事足りるだろう。だが幽香は普通の妖怪などではない。普通の妖怪などでは、断じて違う。

幽香は花を愛でる妖怪だつた。生命として圧倒的に弱き草花を愛する妖怪だつたのだ。

花妖怪である。力無き花を庇護し、愛でること。その尊さを、産まれたその時より知つている。

だから、恐怖をばら撒く側であるはずが、幽香は気付いたのだ。人間の儂さ、愛おしさを。

まるで花のように咲き誇る、弱き者の、一瞬の命の輝きを。妖怪は恐怖を具現する。

普通の妖怪は物理的な手段でしかそれを為し得ないが、幽香程の妖怪となれば、息をするのと同じように自然に、当然の様に、そこに在るだけで恐怖を与えられるのだ。

彼女が人里で恐れられているのは、何もその妖力や膂力だけが理由ではない。無自覚な立ち居振る舞いもあるだろうが、それだけではなかつたということだ。

恐怖は生へしがみ付く原動力である。つまり恐怖とは、生の輝きで

ある。何とかして生き延びよう、死にたくないと思える余地があるからこそ、恐怖は産まれるのだ。

その生命の最後の閃光が、妖怪を生き長らえさせるのである。

そして時を経た大妖怪ならば、同じ妖怪相手であつても恐怖を糧とすることが出来る。

存在の次元が違うのだ。化物も更なる化物には無力、喰い物になるしかないということだ。

だが、と幽香は思ったという。

全ての花は——命は、本当に散る瞬間こそが、真に美しいのだろうか。

そう自問したという。

答えなどとうに解っていたというのに、せずにはいられなかったという。

幽香は花妖怪なのだ。答えは解っていた。だが妖怪である自身の本能が、その答えに異を唱えていた。

だが、だが、だが………。

幽香は長い時を掛けて、自らに問いを発し続けた。

殺したらしい。

たくさんたくさん、殺したらしい。

歯向う人間を。無抵抗な人間を。同じ仲間であるはずの妖怪を。

その間中、ずっと。

妖怪なのだ。当然である。

例え自らの行いに心が悲鳴を上げていたとしても、そうしなければ、妖怪の業に従わなければ、消えてしまうのだ。

だが、だが、と言いつつ、そして幽香は一つの答えを眼にした。

それは最も弱き種族である人間の営みの中にあつた。

花咲くように輝く人間の、最後の命の瞬き。確かにそれは、美しいものである。

だが、それ以上に人間が輝き、咲き誇る時があつたのだ。

それは、愛する人をその腕に抱いた時。

それは、親が子を抱き上げた時。

人が、大事なものを守ろうと決意した、その時——。

あるいはそれは、愛と呼ばれるものであろうか。

幽香が目にした人間の最も強い感情、命が輝く時——それは恐怖などではなく、愛だった。

その瞬間、幽香の中で全てが合致したという。

幽香は花妖怪である。

咲き誇る花は、愛でられるべきなのだということを、知っていた。

強烈に憧れたという。焦がれたという。幽香の中で、制御不可能な強い欲求が爆発していた。

ああ、ああ、愛されたい、と。

私も誰かに愛されたい。そう思ったという。

太陽に向かう、あの花のように——。

だが自分は時を重ねた妖怪だ。多くの人間を、妖怪を殺しすぎた。恐怖される側の存在でしかないのだ。そんな存在が愛されるには、どうしたらいい。

簡単だった。

ある意味、人間や妖怪達と寄り添って生きて来た大妖怪は、心の機微を把握しているのだ。

心とは鏡であるということ、よく理解していた。

ある一つの感情を向ければ、同じものが返ってくるのだ。

ならば、愛されるには、愛すればよい。簡単だ。私は人を大事に思う事が出来る。

こうやってにこやかに頬笑みかけたら、きつと——だが返答は、殺意の刃だった。

結局その時も、いつも通りに恐怖をばら撒いてお終いだっただうだ。

幽香は考えた。

心は鏡だが、それが曇ってては澄んだ景色は映らないだろう。

ならば綺麗な鏡であればいい。

そう、子供だ。

子供を愛することが出来たならば、きつと。

相手は人間でなくてもいい。妖怪であっても、幼い精神性であるならばよい。

初めは彼等に好かれることから始めよう。

そして、いずれは――。

「勝負方法は、そうだなあ……。」

傘屋は思う。

人間と妖怪の合いの子、という話はよくある。傘屋の身近ならば、霖之助がそうだ。彼はその身に流れる血の半分が妖怪だった。

幻想郷ではそう珍しくもない事例かもしれないが、「二人は幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし」と締めくくられる話がほとんど無いこともまた、事実だった。

何もそういう物質的に人間と愛を交わした話でなくてもいい。

例えば忠誠や、恩義、好意に友情……河童が解りやすい例だろうか。古事に曰く、葛の葉狐。物語ならば、雪女、あるいはゴンという妖怪の子狐の話が有名だ。

人間を愛してしまった妖怪。その末路。

それは幽香も承知のうえのことだろう。それでも――。
妖怪の愛は、いつも切ない。

「よし、じゃあ勝負の方法は鬼ごっこだ！ お日様が赤くなった時に、鬼になってたやつが負けな。最初は幽香さんが鬼だぞー」

「にやにやーっ！」

「よし！ その挑戦受けて立つー！」

「ひい、鬼より怖いー！」

言うが早いか、ぴゅうつと飛んで逃げていく三人。

誰が一番強いかを決める勝負からは完全に趣旨が外れているというのに、誰もそれを指摘しない。あまり頭がよろしくはないようだった。

氷妖精は特にそんな感じである。

さて、と逃げていく三つの背を仰ぎながら、傘屋は困惑したままの幽香に向き直る。

「え、えつと、えつと」

「ほら、何をしてるんですか幽香さん。早く10数えないと」

「で、でも、追いかけてたりしたらまた怖がらせちゃうかもだし！」

「怖がられてますかね？ あれ」

「ゆーかが鬼だー！」

「ゆーかが来るぞー！」

「こ、怖くないわよー。怖くないわよー。ふ、ふふ。うふうふうふうふふふふふ」

「うわあん、うわああん！」

「あたいつてばさいきよ……ひいやつぱり怖、つくない！こわくな……うわあああん！」

「泣いてるじゃないのあの子たち！」

「何を馬鹿な。あれは汗ですよ」

「違うでしょ！」

「涙という名の心の汗ですよ」

「違うでしょ!?!」

適当に返事をし、傘屋も空へと飛び上がった。

傘を肩に風を掴めばこの通り。ふわりふわりと飛んでいく。

子供達とはめいっばい遊ばせて、最後に自分が鬼になってお終いという筋書きでいいだろう。

問題は幽香が力加減を誤ることだが、幼く見えても彼女たちは妖怪に妖精だ。少しばかりの負傷など、問題はない。

むしろ自分の方が気を付けなくては。

力加減の出来ない大妖怪と遊ぶなど、命がいくつあっても足りない。相当入れ込んでいなければ出来ない事だよなあ、と自分自身がおかしい。

相当入れ込んでいなければ出来ない事だよなあ、と自分自身がおかしい。

しくて傘屋は笑った。

「このっ、後で覚えてなさいよ!」

「ははは、俺を捕まえられればの話ですけどね」

「後ろからマスパ撃ち込んでやるんだから!」

「やめて。それだけは本当にやめて」

観念したか、幽香が「いーち、にーい．．．．．」と数を数え始める声がする。

ぶつくさと文句を言っていた幽香だったが、口の端が持ちあがっていたのを傘屋は見逃さなかった。

それは変わらず怖い笑みだったが、だがとても、とても嬉しそうに見えたのだった。

数を数えるために後ろを向いた時、幽香が目元をさり気なく拭ったのは、これは見ぬ振りをしておくのが正解だろう。

「よーし捕まえるわよ．．．．．一人目!」

「アツアツ」

「ぴちゅん!? つ、つぶれ、ちるのちゃんがつぶれれれ」

「あっあっ」

「ふ、復活するから! 妖精だからほら!」

「あたいつてばさいきよーね!」

「た、たーっち!」

「アツアツ」

「ち、ちるのちゃんがシャーベットにうわああああ」

「あっあっ」

「はい復活はやく」

「アタイツテバサイキョーネ!」

「付き合ってられんにやー」

傘屋はそんな嬉しそうな声を耳にしながら、高度を上げた。

見下ろせば、辺り一面が黄。

ここは太陽の畑。

生きては二度と出られないとされる、幻想郷屈指の危険区域。

今日だけは、子供達の笑い声が響く場所――。

「ねえ、傘屋！」

「はい、何ですか幽香さん！」

「今日はいい天気ね！」

「ええ、本当に」

向日葵に囲まれて傘屋を見上げる幽香が、両手で口元を覆って、大声で叫んでいた。

その後、小さく口が何かを発したように動いたが、それは聞こえなかった。

言い終えた幽香が手を振っている。

その顔には、自然な笑みが浮かべられているように見えた。

まるで向日葵のような、明るい笑みが。

高度を上げたせいで本当はよく見えなかったが、そう思ったのだから、それが全てでいいではないか。

「さあ皆！ 覚悟はいいかしら！」

「ひいっ！ あれは狩る側の顔だろう！」

「あ、アタイは最強、最強なんだから、なんどやられても立ち上がる。そう、絶対、絶対にだ！」

「逃げるが勝ちだよー、にやーん」

「あ、あ！ 逃げないで！ 待ってえー！」

「いや、鬼なんだから逃げるでしょ。常識的に考えて」

「このっ！ 待ちなさいよ傘屋！」

「俺にだけ弾幕使うのやめてくれませんかね。あ、あれ？ 思ったよりも足遅……………あれー？」

「えううーっ！」

傘屋はいつものように傘を開こうとして、やめた。
たまには傘を差さぬ日があってもいいだろう。
今日はこんなにも向日葵が綺麗なのだから。

魔法少女マジか☆マミさん1

結末から語ろう。

ある男の死と、一つの世界の終焉の話だ。

我城壮一郎——という男がいた。

見てくれは普通の中年男性である。中肉中背、特に羅列するべき事柄は無い。強いてあげるとするならば、お人好しのきらいがあることぐらいだろう。そんな、何所にでもいるような男であった。

ただ一点のみを除いては。

壮一郎は、魔力に干渉することが出来るという、特異な能力を有していた。

より詳しく言うならば、『魔法少女』の保有する——否、魔法少女がその最後の瞬間、呪いと共に世界へと撒き散らした魔力を、自身と周囲の魔法少女に還元する能力を有していたのである。

魔法少女のように、その発生の瞬間の希望を以て奇跡を起こすことは出来ないが、世界に澱のように沈んだ呪いの汚泥から、事象を修正することを可能としていたのだ。

「有り得ざる現象を引き起こす、という観点から見れば、彼の事象修正も同じかもしれないね」

そう言ったのは、魔法少女らから『きゆうべえ』と呼ばれる、ただの少女に力を与えて奇跡の代価に魔法少女へと変ずる、白い獣だった。

なるほど、と暁美ほむらは頷く。

ベクトルは違えども、同一の力を使っているのだ。本当に可能性ゼロの無から有を産み出す奇跡よりも、不可能であると思われる可能性を実現させることくらいの方が、よほど現実に思えた。魔法少女が現実的などと言うのも、おかしな話ではあるが。

ほむらも壮一郎が事象修正を行うのを何度か目撃している。

その一つが魔法少女の魔力の源、魂の結晶たる『ソウルジエム』の

再生だったのだから、憎いきゅうべえの言にも頷く以外ない。

きゅうべえから壮一郎の力の仮定を初めて聞いた時、ほむらは笑いが止まらなかつた。

きゅうべえ「達」がせつせと溜めた呪いのエネルギーを、我が物顔で横取りする男。それも、無自覚に。いくらきゅうべえが止めてくれと可愛らしく懇願しようが、壮一郎自身も理解不能の能力なのである。止めようと思って止められるものではない。

結果、針で空けられた穴から風船の空気が抜けていくように、エネルギーは消費される一方だ。

出所が魔法少女のように自分自身ではなく、世界にプールされたエネルギーであるのだから、それはきゅうべえも白い顔をいつそう白くさせたに違いない。

彼等には苦々しく思う感情自体が無いのだが、ほむらには「しまった！」とほぞを噛んでいるように見えた。

それが自己願望の投影であると解つていても、ほむらは笑うのを止められなかつた。

ざまあみろ。

そう思った。

きゅうべえの企みは防がれたのだ。

そう思った。

私たちには、私には、今度こそ――。

そう思った。

魔法で幾度となく時を駆けたほむらは、「今度こそ上手くいくかもしれない」と希望を胸に強く抱いた。

世界に保存されていたエネルギーを扱う以上、壮一郎の奇跡の御業は、有限であるということも忘れて。

万能に思えた壮一郎の能力も、万能ではなかつただけの話だ。

事象修正は、ひどくエネルギー効率の悪いものであつたらしい。人類発祥以来、何千年ときゅうべえ達が溜めこんだエネルギーは、たったの一戦で全て失われた。

限界は直ぐに訪れた。

その結果が、これだ。

腕の中で力無く横たわる親友。

割れた植木鉢。

燃えて灰になった小さな人形の服。

赤く染まった水溜りに沈む壮一郎。

ここは、地獄だ。ほむらはぐつと唇を噛む。まだ私は、地獄にいるのだ。

いいや、そこがどこであろうと、何であろうと構わない。ただ、ただ戦い抜くのみ。失くした未来を、私はまた見ることが出来ると、そう信じて。

そつと親友の亡骸を横たえようと、ほむらはゆらめいて、立ち上がった。

「世界が終わるね」

きゆうべえが言った。

「魔女と戦わなくていいのかい？」

ほむらは答えなかった。

時計盤を起動させる。

「なるほど、そういう事か。理解したよ。君は時の平行線からやってきた、来訪者だったわけだ」

ほむらは答えない。

口を開く代わりに、ほむらはきゆうべえと睨みつける。

「そんなに怒らないで欲しいな。奇跡の代りにエネルギーを提供してもらおう。平等な取り引きじゃないか」

「黙りなさい……!」

ほむらがようやく口を開いた。

戯言に我慢がならないといった風だった。

腕の巨大な時計盤を模した盾から、大口径の拳銃を抜き放ち、小首を傾げるきゆうべえの二つの赤い瞳、その真ん中に据えた。

怒りで銃口が震え、定まらない。

「みんな、みんな、あなたに……！」

「ああ、なるほど。地球が、というよりも人類が滅亡してしまうから、君は怒っているんだね。仕方ないよ。『まどか』は至上最強の魔法使いだっただ。」

敵わなくて当然さ、それを君が責任に思う事はない。だから何の気兼ねなく、別の時間軸に行けばいい。うん、でも最後にお礼を言うっておくべきかな。

ありがとう。君たち魔法少女のおかげで、宇宙は救われた」

「お……ま……え……が……いなあ……ツ！」

引き金を引く。

引き金を引く。

弾を撃ち尽くし、それでもなおトリガをガチガチと鳴らしながら、ほむらは絶叫した。

穴だらけになったきゆうべえが崩れ落ちても、まだ指は止まらない。

荒くなった息が落ち着くまで、ほむらはトリガを引き続けた。

「やれやれ。この話を聞いた魔法少女は、みんな君のような反応をするよ。願いを叶えてあげたのに、まったく、わけがわからないよ」

するりと。

ほむらが冷静に戻ったのを見計らったか、肉片になったきゆうべえ

の影から、"きゆうべえ"が現れた。

はぐはぐ、と小さく咀嚼音を立てながら、きゆうべえはきゆうべえを食む。

その様子を、ほむらは驚くこともなく、忌々しげに睨み付けていた。ほむらの左手の甲。ソウルジエムの一部が、どろりと黒く濁っていた。

期待が大きかった分、絶望もまた深い。

その格差が宇宙を支えるエネルギーとなるのだ。

最強の魔女が産まれてしまった以上、もはや自分程度のエネルギーなど必要もないのだろう。

きゆうべえはほむらのソウルジエムに見向きもしなかった。

予想通りの反応だった。

ほむらは懐から黒い石ころを取りだすと、それを手の甲に当てる。

親友に使うために隠し持っていたグリーンフィードを、結局自分を使うことになった皮肉。悔しさにほむらは奥歯を噛んだ。

「そうだなあ、もって後三日、ってところかな」

頼んでもいないのに、きゆうべえは人類が残る存在の許された日数をカウントする。

それは正しいのだろう。

どおん、どおん、と次々に最新鋭戦闘機が撃墜される音が響いていた。

どおん、どおーん、どお——ん。

世界最後の魔女、救いの魔女が、生き残った人間に救いを与えるために奔走する足音が聞こえる。

どおん、どおおーん。

救いとは、苦しみを取り除くことだ。

皆が皆、悩みも無く、幸せに暮らせる世界につれていくこと。

それは何所か。

天国である。

即ち――。

「まどか――」

天を衝く巨体の魔女が、ぬうつと分厚い雲から顔を覗かせた。
ぎよろぎよろと救われぬ人間を探す巨大な瞳を、ほむらは見上げた。

ほむらは溢れそうになる涙をぐつと堪えた。

戦闘機が墜ちて来る。

時計盤が回転する――。

「行くんだね」

「行くわ」

「さようなら、暁美ほむら。次の時間軸じゃあ、仲良く出来ると良いね」

「未来永劫有り得ないわ」

「つれないなあ」

クスクス、クスクス――きゆうべえの笑い声が、時間の螺旋廻廊に響く。

戦闘機が爆裂四散するその数瞬前。

いつまでも止まないきゆうべえの笑い声を耳に、ほむらはこの時間軸から消えた。

クスクス、クスクス、クスクス、クスクス――。

喜びの感情など無いというのに。

きゆうべえはほむらが消えたその後も、ずうつと笑って“みせて”いた。

どおん、どおん。

救いの魔女が、福音の鐘を鳴らす。

クスクス、クスクス。

きゆうべえが笑う。

きゆうべえはひとしきり笑った、さあて、とゆつくりと腰を上げた。

「じゃあ、はじめようか」

「はじめよう」

きゆうべえがそう言うのと、きゆうべえがそう返した。

ぐるりと辺りを見渡すと、そこにはきゆうべえがいた。たくさん、たくさんいた。

たくさんのきゆうべえが、一斉に「はじめよう」と言った。

中心には、赤い水溜りに沈んだ壮一郎が居た。

わらわらと、たくさんのきゆうべえ達が、壮一郎に群がっていく。

「あれ？」

一斉にきゆうべえが首を傾げた。

「まだ生きてるんだ」

そうして、へえ、と一斉に感心した声を上げた。

「ぐ、ぼ………ごぼつ、げ、ぼお………！」

壮一郎が紅い水を吐き出す。

冷たい水温で、仮死状態にあつたのだろう。戦闘機の爆発に吹き飛ばされたシヨックで、息を吹き返したようだ。

苦しそうに喘ぎ、咽込んでいる。

手足は冷たく凍えて動かない。

大量の血が流れ落ちていた。

息を吹き返したはいいが、これでは。

「おはよう、我城壮一郎」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

おはよう、おはよう。

全てのきゆうべえは壮一郎に優しくあいさつをした。

きゆうべえにとってはとても優しくしたつもりだったが、壮一郎は怯えた様子で悲鳴を噛み殺していた。

まったく、感情という奴は理解できないよ。

そう言つて全てのきゆうべえは首を傾げた。

「く、くるな、来ないでくれえ………！」

「君はもうすぐ死ぬというのに、僕を怖がっている。理解できないよ。人間は死ぬのを一番怖がるはずだろう？」

「ひい………」

「うん、その様子だと、解っているようだね。我城壮一郎、君はもうすぐ死ぬ。だから僕が君を再利用してあげるよ」

じり、ときゆうべえ達の輪が狭まる。

「やめろ………よせ、近付くな。頼むから、来ないでくれ………！」

「やれやれ。暁美ほむらにも言つたけれど、奇跡には対価が必要だ。それは当然のことだよ。君は多くの奇跡を起こしてきた。その対価を、ここで払ってもらおうことにしよう」

輪が狭まる。

別のきゆうべえが、きゆうべえの言葉を引き継ぐ。

「まどかのおかげで宇宙は救われたけれど、エネルギーは有限なんだ。僕たちは次の滅びのために、備えなくてはいけない。

認めよう、僕たちの魔法少女システムは穴があつた。君という穴がね。だから僕たちは、君をシステムに取り込んで、改良を加えなくてはいけない」

「よせ、やめろ、来るな……！俺をどうするつもりだ……！」

「言つただらう？僕たちのシステムに取り込むつて」

輪が狭まる。

先頭のきゆうべえが壮一郎の肩に足を掛けた。

あーん、ときゆうべえが口を開けた。

あーん、あーん、あーん……。

次々と、きゆうべえ達が口を開ける。

壮一郎の顔が絶望に歪んだ。

「その表情、君は今、絶望しているね」

「でも残念だ。君ならば、と思つたけれど、魔法少女じゃあないんだから、それも当然か」

「さて、じゃあ僕達も始めようか。暁美ほむらのように別の世界軸へは行けないけれど、このまま、次の宇宙のために。」

次の感情を有する、知的生命体の宇宙のために——」

きゆうべえ達が次々と壮一郎の肩に足を掛け、言葉を落としていく。

「こういう時は人間は何て言うんだっけ」

「ああ、そうか」

「こう言うんだつたね」

「それじゃあ」

一瞬の間。

壮一郎の脳裏に走馬灯が駆け巡る。

離職。植木鉢。飛頭蛮。人形。餡子。魔女。ヤクザ。拳銃。嵐――

ああ、ああ、俺の人生は何だったというんだ。

「いただきます――」

きゆうべえが、きゆうべえが、きゆうべえが、きゆうべえが――

たくさんのきゆうべえ達が、一齐に、壮一郎の身体に喰らい付いた。はくはく、はくはく――。

死に体は既に痛覚は無く、何も感じない。

何も感じていないのに、どうしようもない程の喪失感がせり上がる。

「ああ、あああ、あああああ……」

喰われていく。失われていく。

視界いっぱい、真っ赤なルビーの瞳が映された。

はくはく、はくはく。

視界が消えた。

「ううう、ああああ――ツ！」

耳が、喉が、あらゆる箇所が消えていく。

「安心しなよ。君は、僕達になるんだ。僕達インキュベーターにね」

どおーん。

どおおーん。

壮一郎が上げた最後の絶叫を聞き付けたのだろうか。福音の鐘が近付いていた。



前も後ろも、時間の概念さえあやふやな闇の中。

壮一郎は怨嗟に喉を張り上げた。

しかし壮一郎の絶叫は迸ることは無かった。

手足の感覚も無い。

なるほど、ここはここは化物の腹の中というわけか。

何千という欠片に喰い千切られたはずだというのに、壮一郎の意識は分断せず、一つのままだった。

ほむらが言った奇跡、とやらが起きたのだろうか。

恐らくは、そうだろう。

これだけエネルギーに満ち満ちた宇宙だ。

散々に散った俺の意識を繋ぎとめるくらい、出来るだろうさ。

壮一郎は嗤う。

ははは、ははは。

世界は滅び、何もかもが消え果てた。

地球はお終いだ。

人間はお終いだ。

これが笑わずにいられるか。

ははは、ははは。

全ては無駄だったのだ。無為だったのだ。何もかも、無意味だったのだ。

ははは、ははは。

嗤って、嗤って、ああ、嗤い飽きた。

何だこれは。

何という悪夢だ。

ああ、ああ——こんな結末、認められるか。認めてたまるか。

壮一郎の意識が再び怨嗟を振り撒く装置となった、その瞬間のことだった。

何処までも続く虚——淵の見えぬ闇の中、一筋の閃光が射したのだ。

その光は温かな意思で壮一郎をそっと包みこんだ。

君は——どうして、君がここに？

壮一郎の失われた喉が震えた。

あらゆる世界を超え、あらゆる宇宙を超え、全ての魔女を、産まれる前に消し去ること。それが私の願いだから——。

光がそうつと、優しく輝いた。

音は無い。念による交信だった。

あらゆる宇宙を超えて——？

そう。あはは、まさか自分を救う事になるとは思わなかったけれど

宇宙、世界、時——光の中、壮一郎は全てを理解した。

後ろを振り返る。

自分達の宇宙が粉々になっていく。

あらゆる宇宙を超えて、魔法少女の最後を呪いで終らせないように、頑張ろうとしたんだけど、どうしても救えない魔法少女がいるの——。

それは、君自身、だね——？

そう。始まりも終わりも無くなった私だけけど、だからかな、私自

身の終わりは救えないんだ。それだけは――。

君は、それでよかったのか？ それで満足したのか――？
うん。私の願いは叶ったんだから、だから私が絶望することだつて、ないもの――。

そうか。ならおじさんは、何も言わないよ――。

ありがとう、おじさん。私の最後は救えないけれど、魔法少女の終わりに繋がったおじさんなら――。

いいや、結構。それにはおよばないよ――。

壮一郎の意思が、光の差し伸べる手を拒絶する。

現実世界で――きゆうべえ達の内、壮一郎の身体を喰んだ個体が、その動きを止めていた。

壮一郎は幾つにも解れた自分を知覚していた。

壮一郎を内包したきゆうべえ達が、お互いの身体に喰らい付く。

はくはく、はくはく。

一つになっていく。

おじさん、駄目だよ――！

いいや、これでいいんだ。今、はつきりと解った。自分のすべきことを――。

おじさん――！

君は願いを叶え、魔法少女を救った。それは素晴らしいことだと思うよ。でも、あらゆる宇宙がねじ曲がってしまった。違うかい――

――？
どうして、解るの――？

大人はね、子供の言いたい事を察してやらなきやあいけないんだ。これがまた実に変なことだ。大人は頭が硬いから、てんで見当違いのことを考えてしまう。

これも、そうかもしれないね。でも俺は、決めてしまったんだ――。

一つになって体積を増したきゆうべえは、ゆらりと空気の抜けた風船のように、二本の脚で立ち上がった。

それは人間のような姿をしていた。

体軀はあまりに巨体であるが、人と同じような手足を持ち、真っ白な布を身に纏っていた。

そしてその顔は、まるでモザイクが掛かったように不鮮明でいて、認識することが難しい。崩れているのか、隠されているのか、判別が付かない。

救いと悲劇はバランスによって成り立つのかもしれないね。それはとても悲しいことだけれど、諦めないといけないこともある――

待って、駄目だよおじさん！ 私は、おじさんを助けたくて――

いいや、これでいいんだ。いままで女の子たちがずうつと頑張ってきたんだ。そろそろ野郎も痛い目を見るべきだと思わないか？ 思わないか。ははは、残念――。

そのまま真っ白な巨人はどこへなど、光が射す方へと消えていく。存在を薄く延ばしているのだ。

こんなはずじゃなかったのに、と光は淡く輝いた。

優しい少女のすすり泣く声が聞こえたような気がした。

ごめん、ごめんね。でもね、やっぱり犠牲は必要なんだ。でも、君はそれを認められない。解るよ、君は優しい子だから。だから、悪役になるのは、俺のような駄目な大人で十分だ――。

ごめんね、おじさん、ごめんなさい。ごめんなさい。私、本当は解つてたの。魔女を消してしまえば、世界は狂ってしまおうって。解つてたの――。

いいんだ、いいんだよ。これで、いいんだ――。

白い巨人が宇宙から完全に姿を消す。

壮一郎の意思は、その瞬間、完全に消えて無くなった。

魔法の力で意思を繋ぎとめていた壮一郎は、白い巨人が世界の再編に呑まれ、魔法では無い別のエネルギーを動力とするように改変された瞬間に消え去ったのだ。

その意思が消え去る寸前、壮一郎がかつて自分であった白い巨人に下した至上命令は、唯一つ。

世界の歪みを正せ——それだけだ。

かつてきゆうべえでもあった肉体の制御権を奪った壮一郎は、自分にその機能が備わっていることに気付いていた。

後は自動的に事が進む筈だ。

こうして白い巨人は別の宇宙、別の世界で自己を増殖させながら、魔法の元となる感情を吸い上げ、体内でグリーンフシード化させる存在となった。

壮一郎は、少女の切なる願いが紡いだ新たな世界で、たった一つの悲劇となることを決めたのである。

かつてきゆうべえであり、壮一郎であった白い巨人は、またこことは別の世界で『魔獣』と呼ばれることになる。

魔女の代りに世界中に溢れ返る魔獣の存在。

だが魔獣が何処から来たのか、何を目的とするのか。

知る者は誰もいない。



これでいい。

救いはなかったが、これで。

哀しみと満足感の中、壮一郎は消えていく。

一瞬が永遠にも思える時の中、不思議と壮一郎に恐怖はなかった。それは正確ではないのかもしれない。恐怖を感じる意思の部分が、

もう消えてしまっていた。

壮一郎はゆっくりと無に意識を沈めると、笑ってしまう自分の数奇な人生を、振り返ることにした。

色々あったけれど、哀しい終わりだったけれど、それでも幸せだった。

俺達はその日、あの時、家族だった。そうだろうか？

幸せな記憶が再生される。

魔法少女と初めて出会った、あの時から。

壮一郎の意思が闇に閉ざされるその一瞬、瞼の裏をよぎったのは、

一人の少女の笑顔。

壮一郎が初めて出会った魔法少女の頬笑み。

その魔法少女の——生首、だった。

魔法少女マジカ☆ママさん2

我城壮一郎。

一身上の都合により本日付けで退職致します——。

何度読み返しても文面は変わる訳が無い。

たった一行の退職届けの写しを広げながら、くそつたれ、と男は吐き出した。

男の吐息に混じり、辺りに酒気が立ち込める。相当飲んでいるようだ。

男の向う先から歩いて来る女子大生が、眼を合わさないようにして足早にしてすれ違った。すまんね、と男が振り返って声を掛けたら、小さく悲鳴を上げられた。それに対してもまた、すまんね、と男は声を掛ける。とうとう女子大生は走り出した。

はて、婦女子に悲鳴を上げられる程、自分はそこまで人相が悪いのだろうか。男は考え、悪いのだらうなと頬を伸ばした。

酷い顔をしているのは自覚していた。

先日のことである。

取引先の会社で、嫌な上司の見本とも言える脂ぎったハゲ親父が、恐らくは新人であろうOLの尻を揉みしだいていた。

デスクの影となって他の社員には死角となった場所での行為。

常習犯か、などと考えるよりも早くに男の右拳は唸りを上げていた。拳先はハゲのツラミ（頬肉）にクリーンヒット。一撃で奥歯を散らし意識を刈り取ったのは、学生時代に日本格闘技研究サークルの部長であった男の面目躍如というところ。

さてOLは不安がっていないだろうか、と出来る限りにこやかに手を差し伸べた男が喰らったのは、痛烈な平手打ちだった。そしてこれでもかと言う程の罵倒の嵐。

これは後で知ったことだが、どうやらこの二人、不倫関係にあったらしい。

それも社内で公然の秘密として黙認された。

ハゲは離婚秒読みで、協議離婚が成立し次第、このOLと籍を入れ

るつもりだったのだとか。そして周囲はそれを知っていて、祝福もしていたのだとか。

なんだそりゃあ、である。

つまり男が目撃したのはプレイの真つ最中だったということだ。

暴力沙汰を起こした男に待っていたのは、自主退職という形での、平たく言えばクビ処分である。

警察沙汰にならなかつただけ有り難いと思え、と上司から、否、元上司から丸めた書類で頭を叩かれた男。なんだそりゃあ、と胸中でもう一度繰り返す。

しかし社会人である以上、手を出してしまえば例えどんな状況であつても負けなのだ。

頭に血が上った馬鹿が痛い目を見ただけだ。仕方ないと諦める他はない。

これで俺も晴れて自由人かあ、と男は笑った。

めでたい、めでたい。

こんなにめでたいのだから、雀の涙程の退職金で、真昼間からしこたま酒を飲んでもいいだろう。

酒は魔法の水だと思う。

こいつを飲んでいる間は嫌な事はきれいさっぱり忘れられる。

明日の苦痛に目をつむればこれ程有り難いものはない。有り難過ぎて涙が出て来る。

へらへらと笑い始めた男に、通行人達は気味の悪そうにして進路を変えていく。そう時間を待たずして、男の周囲には誰もいなくなつた。

誰もいないんだからいいか、などと酔っ払いの理屈で男は道路に寝転がる。

かつん——と手に当たる、硬質な感触。

深く考えずに引つ搦んで目の前に。

桃の種を思わせる大きさと形のそれは、散々にヒビ割れて砕けた黄色の宝石——。

否、どうセイミテーションだろう。こんな所に宝石が転がっている

訳がない。

しかし、その石には不思議と心を惹きつける輝きがあった。石を掲げ、月の光に透かしてみる。気付けばもう夜だった。黄色の輝きを透して、夜空を見る。

万華鏡を覗いたように、ヒビ割れた石の中を星の光が反射して、ほうと息を吐くくらいに綺麗だった。

酒で霞んだ目にもきらきらと輝いていて、手を伸ばせば星に届きそうなくらい。

まだやり直せるよな、と男は石を握りしめた。

夢も希望も願いすらも何もないけれど、こんなにも綺麗なものがあるのだ。だから俺は大丈夫だ、なんて根拠の無い自信に酔っ払い男は勢いきって体を起こした。

「やばい吐く」

さて、これが男の第一声である。

腹筋を使って跳ね上がったのが仇となったか。

込み上げる酸味を手で封じながら側溝にまで這いずる男。道路を汚してはいけないという意識が働いているのだろう。そもそも路上で寝転がるなど言いたい所だが、そこは酔っ払いである。常識など通らない。

ふうふうと破水した妊婦のように苦しげな吐息を吐きながら、しかし今産まれてはいけないといきむ男。

「あれ？」

「坊や、まだ駄目よ。まだ産まれちゃ……おえつぶ。な、何だあ……」

途中で暗闇に浮かぶ二つの紅い光と、一瞬、眼が合ったような気がした。

眼が合った、のだ。

視線が絡んだのである。

その二つの紅い光点は知性を宿していて、つまるところその正体は、その正体はなどと言うのもおかしいが、正体不明の生物だった。パシツ、と音を立てて街灯が明滅する。

途切れ掛けの人工灯の下に晒されたのは、白色光よりもなお白い、四足歩行の獣だった。

白い獣も男と視線が合ったのに気が付いたのだろう。

興味深そうに小首を傾げながら、男の下へと近付いて来る。

「君、僕の姿が見えるのかい？」

「見えない」

しかし男と眼が合ったのも、先の一瞬だけのこと。

男の視線は道端の側溝に固定されていた。

幼児向けアニメのカレーパンを模した戦士と男が化すまで、あと数十秒である。

男にとっては獣が喋ったのどのよりも死活問題だった。

酔っ払いは文字通り世界が自分を中心にして回るのである。

自分のことで精一杯で、それどころではない。

「やっぱり見えてるんじゃないか。今返事したよね？」

「見えない。聞こえない」

脂汗を流しながら、ずりずりと肘だけで這いずるようにして先に進む男。その進路を塞ぐ白い獣。

どうあつても男を逃すつもりはないらしい。

仕方ないなと言いた気に、ガラス玉のように透明な瞳をまったく表情の変わらない顔に浮かばせて首を振る獣。

呆れたような気配が伝わるが、こいつに感情と呼ぶべきものが存在しているかは疑わしい。

「やれやれ。君達人間はどうしてそう未知との遭遇を否定したがるのかな。まったく、わけがわからないよ」

「やかましい。白まんじゅうの分際で、人様の言葉を喋るなよボケ。そこをどきやがれ」

にべもない男の一蹴を意に介したこともなく、白い獣は男に一步近付く。

仕草は小動物のようであったが、白一色に紅い二つの球が浮かんだ能面を至近距離で見詰めさせられれば、可愛いなどと言う感想は抱けない。

「僕にしても初めてのケースだけれど、だからこそ試してみる価値はありそうだ。ねえ君、何か願い事はないかい?」

「はあ?」

さも煩わしそうに返す男。

付き合わなければ解放されないと思ってたのことだった。

この不快感に男は職業柄、前職業柄よく覚えがあった。

首を縦に振るまでしつこく食い下がる、性質の悪いセールスに捕まったのと同じ感覚だ。

「叶えたい願いは無いかい? 届かなかった夢は無いかい? 実現し

たかった想いは無いのかい? 全部僕が叶えてあげるよ」

「何でもか?」

「もちろんさ」

「酔っ払いの幻覚にしちゃあ都合が良すぎるこつて」

もう男はこれが現実であるとは微塵も思っていなかった。

酔っ払った脳みそが見せる都合の良い幻覚であると断じていた。

そうでなければ、動物が口を利くなど、ましてや願いを叶えてやる

うなどと言いだすものか。

「だから僕は現実に存在しているんだってば。あ、願い事だけれどね、願いを叶える数を増やせていうのはやめて欲しいかな」

「不可能だと言わない辺りなるほど俺の脳内妄想だな。じゃあお前、キタロウ袋もってこいや」

「キタロウ袋………？ なんだい、それは？」

「げげげのげと、知らねえのか。エチケツト袋だよエチケツト袋。おらさっさと行け」

「本当にそれが君の願いなのかい？ そんな願いじゃあ宇宙のエントロピーは………」

「じゃあそこ退け」

「もつとよく考えるんだ。君の思うがままに願いを叶えられるんだよ？ 君の希望をありったけ込めた願いを教えてよ。さあ」

また一歩近付く白い獣。

もう男の視界は白と赤の二色で塗りつぶされていた。

吐き気が込み上げるのは呑み過ぎたから、それだけが理由なのだろうか。

「うるせえなあ。何なんだよお前は。幻聴に律儀に返事してるとか俺もなんだよ、くそつたれ」

「そういえば自己紹介がまだだったね。僕の名前はきゆうべえ。きゆうべえって呼んでよ」

「やかまし、白まんじゅうが。人様の言語を口にすぶえぶぶぶ……すっぱい、もう駄目」

少し漏れた。

慌てて手で押さえたが、レモンの果汁のような体液は指の隙間から滴り落ちる。

「ふう、わかったよ。僕が君たちの言語を話す事がお気に召さないと
いうのなら、君の流儀に合わせよう。【これでいいかい?】」

「あああ頭の中に声が響くぎぎぎ」

「うん、問題無く聞こえてるね。やっぱり、君には素質があるみたい
だ」

「もう駄目、もう無理、限界」

急に脳髓に響いた声がトドメとなって、男の堤防は決壊する。

テレパシーだとか、そんなことはどうでもいい。

どうろはみんなのものです。

こうきようぶつなのです。

だからよごしてはいけません。

ゆえにわたくしめにふくろてきなものをぷりーず。

もうだめ、でる。

「ねえ、君にお願いがあるんだ」

「おおおい白まんじゅう！ 俺の名前を覚えてやるうあ！」

「いや、もう知ってるからいいよ。繋がった時に、少しだけ覗いたか
らね。それよりも、ねえ、お願いがあるんだ」

「僕の名前はゲロゲロげろっぴー！」

男がやけっぱちになって白い獣を驚掴みにすると、背中の一部がぱ
かりと開いた。中は空洞になっているようだ。

そうなれば後は早いもの。

白まんじゅうの台詞が言い終るよりも早く、男はその空洞の両端を
むんずと掴むとぐいと引き広げた。

白い。そして空洞である。つまり、ビニール袋。わあい。

とはその瞬間に男の頭を占めた思考である。

「ワンダフル投下しペペペペペペペペペペpppp」

「僕と契約しペペペペペペpppp」

「べぺぺぺぺぺ p p p p」
「べぺぺぺぺぺ p p p p」

男と白い獣の間に描かれる黄土色のアーチ。

辺りに立ち込める眼に染みる程の発酵し切ったチーズ臭。

聞くに堪えない醜い効果音を発しながら、男は熟成させた我が子をワンダフル投下した。

「ひいっ!？」

人体と麴菌とが織りなす腐浄のハーモニーたるや、獣の後をこっそり着けていた同時間軸を五週くらいしていそうな元ロング三つ編み赤縁眼鏡っ娘を即時撤退させる程度の威力はあったようで。

「や、いやっ、かかった! 跳ねてかかったあ! 臭っ、臭いよう! まどかあ、まどかあー!」

黒髪ロングのクール系少女を元の引っ込み思案で気弱な人格に一時戻す程度の威力はあったようで。

「べぺぺぺぺぺ p p p p」
「べぺぺぺぺぺ p p p p」

少女の叫びを副旋律にして、魔の演奏は一層激しさを増すのであった。

魔法少女マジか☆مامィさん

第一話「stomakエイク」

朝である。

爽やかな日差しが瞼を撫で、意識を浮上させる。

段々と覚醒していく意識に、男は次第に記憶を蘇らせた。

ハゲ親父。OL。拳骨の痛み。商談を白紙に戻され怒りに震える上司の顔。自主退社勧告。事実上の首。居酒屋。酒。白いまんじゅう。すっぱ味。

「……………ああ、そっか」

枕元の時計は何時もの時間を刺している。

今日からもう出勤などしなくてもいいというのに、しかも記憶があまりまいになるほど酒を飲んでいたというのに、普段通りの起床時間。

律儀な体内時計に男は何だか笑ってしまった。

「自由さいいー」

再びベッドに身を沈める。

そうとでも思わなければやっていけない。

男は自分が小心者であるという自覚があった。

暴力に訴えておきながら、酒に逃げた。

でつかくなるんだと息巻いて社会に飛び込んだのはいいが、これだ。

結局のところ、そんな程度のちっぽけな男でしかなかった。我城壮

一郎という男は。

深く溜息を吐けば、昨晚から残ったアルコールが失せていった。

鈍い痛みを訴えるこめかみを揉みほぐしながら、壮一郎は記憶を辿る。

はて、自分はどうやって帰宅したのだっけ。

眼前を占める天井の染みは、間違いなく毎朝眺めている自室として与えられた社宅のそれだ。

首になった以上はここも引き払わなければならないが、今は置いておこう。

明確に覚えているのは、最後に梯子した居酒屋を出た辺りまで。その後は、背中にごつごつとした硬い感触がしたのも覚えている。路上にでも寝転がったのだろうか。

何やら白まんじゅうの悪夢を見たような気もするが……。硬質な感触と言え、もう一つ、何かを握り締めたような気も。

「ああ、そうか、思い出した」

何か珍しい石を拾った、はず。

その辺りになるとかなり記憶も曖昧で、夢であったのか現実であったのか、判断付け難い。

まんじゅうが口を利くなんてのは確実に夢だろうが、綺麗な意思を拾ったのは確かだ。

子供のころに石集めをしたのを懐かしみながら、ひび割れて砕けた表面を撫でていたのを覚えている。

不思議な触感のする石で、撫でつければ撫でつける程、ひび割れが消えていった。

石に見えて粘土質なのかもしれない、などとも思っていた覚えもある。

どこか柔らかい感触を指先に感じながら壮一郎が閃いたのは、プランターに入れる半固形の肥料にそっくりだということだった。

特にすることもなく枯れた青春を過ごした壮一郎は、ベランダガーデニングを趣味としていた。

やや前時代的な考えのある壮一郎はそれを女々しい趣味であるとして隠していたため、誰にも知られたことはない。そして、誰に相談したことも、学んだこともない。全て書物から取り入れた知識でもって、独自のやり方で草花を芽生えさせてきた。

ある時は卵の殻を撒いてみたり、またある時は焼いた土を混ぜ込んでみたり。

昨晩も酔っ払った頭であの石が有機肥料であることを疑わず、植木鉢に放りこんでいた。

あちやあと壮一郎は頭を抱える。

何でもかんでも放りこんで、それで多くの失敗を経験しているのだ。

植物は生き物である。

石ころ一つとつても、たったそれだけで土壌の性質は変わり、そこに根差す植物は当然影響を受ける。即刻取り除かねばならない。

仕方が無い、と痛む頭を抱えながら、壮一郎はベランダへと足を向けた。

からり——軽い音を立ててアルミサッシが開かれる。

あくびを漏らして腹を搔く壮一郎。

大口を開けた間抜けな顔は、しかしその瞬間に凍りついた。

「……え？ 何」

いつもならば朝鳴きの鳥のさえずりが聞こえるはず。

しかし町は凍りついたかのように無音でいて、静かだった。静かすぎた。時折遠方から響く長距離トラックのエンジン音が、返ってシニールに聞こえる。

まだ酔っ払っているのかと頬を思いきり張る。

痛い。

幻覚でも夢でもない。

目の前のこの光景は、現実だ。

いや、わけが解らない。

確かに自分の中にある幼稚な部分で、美少女が急に家に来たら——
——なんて妄想をしたこともたくさんある。

だが実際そうなってみると、素直にラッキーだと喜べるわけがない。

何だこれは、何かの陰謀か。

異様に手の込んだドッキリだろうか。はたまた嫌がらせか。

何だこれは、俺は死ぬのか、死んじゃうのか。

これは本当に覚悟をしないといけないのかもしれない。

「あ、おはようございます。この家の方ですか？」
「ひっ……ぎっ……」

喉が引き攣る。

壮一郎だつてそれなりに経験を積んだ社会人である。

滅多な事では思考停止に追い詰められるまで取り乱す事はないと
自負していた、はずだった。

だがこれは無理だった。

「不躰で……めんなさい。私、こんなだから、出来れば運んでいただけると
ありがたいのですが。お願いできますか？」

「は、は、はい……」

「わ、わ！ わー、すごい、高い！ 男の人ってやっぱりすごいですね」

ひいひいと息を引きつらせながら笑う膝を叱咤し、それを卓上まで
運び入れる壮一郎。

腕を下ろすと同時、どつと尻餅を着いた。腰が抜けたのだ。しばらく
く立ち上がれそうにはない。

「あの、大丈夫ですか？ どこか打ってませんか？」

「ひい……」

ここらが壮一郎の限界である。

こちらを心配そうにうかがう、優しさに溢れた瞳。

壮一郎がベランダから招き入れたのは、色素の薄い茶色の巻き髪が
良く似合う、可憐な少女――。

そんな可憐な少女が、ふつくらとした桜色の唇から、壮一郎の体調
をおもんばかる台詞を紡いでいた。

見ていてこちらが申し訳なく思ってしまうくらいに、見ず知らずの
男の身を氣遣う少女の心根の清らかさ。

きつとこの少女の心根は、などと、根っことはよく言ったもの。
少女は今にも壮一郎に駆けよつて、背中に手を当てて介抱しそうな程だ。

彼女に自由に動く身体があれば、間違いなくそうしていただろう。
そう、身体さえあれば。

「ぎ、ぎつ、ぎいいやあああああつ！」

「え、わ、わーっ！ きやあーっ！」

「ぬがあああああつ！」

「やーっ！ やーっ！ いやーっ！」

「どっせーい！」

「ちよいやーっ！」

壮一郎が招き入れたそれは。

復活した壮一郎が執ったファイティングポーズに、精一杯の威嚇を返す、それは。

大きめの植木鉢に可愛らしくちよこんと乗っかっている、それは。
まるで女神と見間違う程に可憐な少女の――。

生首――――だった。

東方Project 幻想郷の傘屋さん7

ぽつぽつという雨音。

幻想郷に響く、雨季の訪れ。

境界にぐるりと囲われた空間である幻想郷は、つまりは別世界である。外界と大結界を隔てた向こう側である幻想郷も、外界の影響を受けない空間となっているが、気候のみは繋がりがあろうだ。龍神との取り決めらしいが、詳しい事は解らない。

さて雨の気配が近くなる季節となれば、忙しくなるのは傘屋である。

妖怪の山、その麓にほど近い横穴の中、せっせと傘屋は傘を張る。湿気は細工職人にとつての天敵であるはずが、不思議とこの横穴の中は適温適湿に保たれていた。

剥き出しの岩肌、その壁際に設置された大型機械、おそらくは除湿機の機能によるものだろう。

傘屋の周囲には、用途不明の機械群が散乱していた。

どれも幻想郷にはそぐわない代物である。

それは理解していようが、傘屋は意にも介したようすはなく、せっせと傘を張り続けていた。

「そんなの作らなくても、こつちのを売ればいいのに」

こつち、と掲げられたのは鉄芯で作られた傘の骨組。バネ仕掛けを応用して傘の拡がるジャンプ傘、その作成過程にある品である。

スチールシャフトのみの傘を掲げ、さも不思議そうに首を傾げているのは、大きな緑色の帽子を被った少女。くりりとした眼と丸っこい顔が、大きめのキャスケット帽によく似合っている。

水色の作業着を煤で汚しながら、きよとんと傘屋に尋ねるよう、少女は小首を傾げていた。

頭の両側で二つ結びにした深い水底のような澄んだ青の髪が、ふるりと揺れる。

「にとりさん」

観念したのか傘屋は作業を中断し、少女の名を言う。
傘屋の鬱蒼とした面持ちに、これは大事なのだな、とにとりはぴんと背筋を伸ばす。

「タイマー、と呼ばれるものが外の世界にはありません」

糊付け刷毛を茶碗に置いて、傘屋は暗い目をしながらぼそりと呟いた。

自分自身の言葉に耐えかねる、そんな様子だった。

「たいまー？ タイマーっていうと、時計仕掛けのあれ？ 決められた時間を教えてくれるっていう」

「概念はそうですが、それが商売となると、別の意味で使われることになります」

「ほほう、別の意味とな？」

「一定期間使用していると破損してしまう、という意味です。そうすると消費者は、新しい商品を買わざるを得なくなる」

「……それってつまり、わざと粗悪品を売りつけてるってこと？」

「馬鹿な。いやしくも傘職人の端くれとして、いい加減な仕事は出来ません。丹精込めて作っていますよ」

ほら、と作りかけの番傘をにとりに手渡す。

受け取った番傘を眺め、ますます訳が解らないといった風に首を傾げるにとり。その出来栄えが見事の一言しかないのを、一目で看破したからである。わざと壊れるように、手を抜いているわけではない。むしろ、かなりの頑丈さを誇るはずだ。

「にとりさん達、河童の皆さんにはあまり理解できない感覚かもしれませんが、技術を漏らしたくないんですよ」

「私たちも、里の技術レベルじゃ再現出来ないから、教えないものだってあるよ。半端な知識で触ったら危ないものもあるし。技術独占してるつもりはないけれど」

「まあ、商売ですからね。これを言わなきゃならないのは、恥ですよ」「なんでや」

訳が解らない。

にとりは傾げ過ぎてずり落ちそうになった帽子を、慌てて手で押さえた。

その様を見て苦笑する傘屋に気付いたにとりは、咎めるように頬を膨らませた。

むむむ、と唸るにとり。向けられる苦笑が濃くなる。自覚はあった。これでは河童ではなく蛙だ。

傘屋と蛍光灯の灯りが眩しい洞窟内で相対している少女、にとりは河童と呼ばれる妖怪だった。

外の世界で伝えられる河童とは大きく生態が異なっていて、見た目は他の妖怪に多いように人間のそれと変わらず、水中で生活しているというわけでもない。泳ぎは得意であるが生活の中心は陸上で、陸上での身体能力は人間とたいして変わらない。

伝え聞く河童のイメージと一番大きく掛け離れているのは、彼等が持つ技術力であるだろう。

河童は非常に高い技術力を誇っていた。今や、外の世界に追い付かんばかりに。

元は泳ぎが得意で、手先の器用な妖怪であっただけの河童は、近代になって急激にその比重を増すことになった。河童の作る道具が、外の世界と並んで幻想郷内の二代近代道具として重宝されるようになりだしたからだ。

河童は種族的に人見知りの気質があるようで、人間の前には中々姿を現すことはない。しかし人間には非常に友好的で知られている。

だが、そこはやはり妖怪。

こうして妖怪の山に住まう事で、人間とは住み分けしている。

人里でもその姿を見かけることはほとんどない。

傘屋がにとりと出会ったのも、人里ではなかった。

染料となる木の実を採りに出かけた妖怪の山から、下山する道中のことだ。

ふと脇を流れる川に目を向けると、どんぶらこっこどんぶらこっこ、と流れるものがある。

にとりだった。

どうやら背負ったりユックサックに機械類を詰め過ぎて、上手く泳げなかったらしい。すきまから鉄パイプが顔を覗かせていた。

すわ手遅れか、と手を合わせてから引き上げると、ぱちくりと開いた目と真正面から見詰め会う。

「ひゅい!？」

奇声が一発。ファーストコンタクト。

「げげっ! 人間!」

「そういう君は、河童、かな?」

これが傘屋とにとりの出会いであった。

余談であるが、傘屋はあれが河童の鳴き声であると勘違いしたままである。

「ほら、鉄芯の傘は丈夫でしょう? それに比べて番傘は手入れしなければ、すぐ駄目になる。幻想郷の雨は激しいですからね」

「あ、なるほど。傘屋は自分の傘をいっぱい買ってほしいから、丈夫なビニル傘を流通させたくないんだ」

「お恥ずかしながら、そうです。俺はこれしか能がありませんし、生活がありますからね。それに」

「それに」

「幻想郷に、ビニル傘は似合わない」

なるほど、にとりは頷き、ビニルを裏打ちした布を骨組に取り付けていく。補強された洋傘、これは吸血鬼姉妹に渡す品である。妖怪のお得意様には強度も考え、鉄製の傘を、というのが傘屋の方針だった。

もちろん里にビニル傘の需要は大いにある。

あの花妖怪が愛用している、ということ、幽香が振り回しても壊れない」の口コミで爆発的に人気が高まり、傘屋の元に押し掛ける里の人々が多く居たのだが、その全てを傘屋は妖力のなせるところだと突き返していた。

事実、妖力で強化されているのだろうし、傘屋の手元にはスキマ妖怪や吸血鬼姉妹用の日傘もあったのだが、それらを里人に提供することとはしないと初めから決めていたようだった。

それがタイマーという自己中心的な理由のみによるものであったなら、技術者としてにとりは軽蔑したかもしれない。

ビニルと骨組の精製でにとりは傘屋の事業に協力しているが、最初その話を持ち掛けられた時、眉を潜めたのを覚えている。

にとりは技術者だが、現在の文化レベルの破壊、ブレイクスルーを望んではない。それでは外の世界と幻想郷は、同じになってしまうだろう。大結界で隔離したというのに、本末転倒だ。

河童が近年注目されたのも、裏を返せばそれだけ危険視されているということになる。妖怪の賢者達の公的、私的、秘密裏の査察、監視を受けたのも一度や二度ではない。

人間に必要な以上の技術を与えることは、幻想郷内ではタブーとなっていた。

外の人間であった傘屋も、それは人里に住み付く前に、幾度となく説明を受けている。そのルールに則った判断なのかにとりは思っていた。

だから、それくらいはいいのでは、と思いビニル傘の販売を提案し

たのである。

実際、河童もいくらかの機械製品を里に卸している。ちゃんと妖怪の賢者達の許可を貰えるくらいに、使用する技術レベルを落としたものだ。ゆか倫シールが貼ってあるのがその証拠である。

だが傘屋は首を振った。それは、幻想郷の景観を考えてのことだった。

なるほど、職人らしい発想だ。

にとりだつて、似合わないな、と思っていたのだ。便利なのは間違いないが、テカテカとした色合いの傘が幻想郷に並ぶのは、あまり好ましくない。一端の技術屋である河童にだつて、美意識はあるのだ。技術追求のために、環境破壊を是としたくはない。妖怪なのだ。河童も。

そして傘屋も、自分と同じ気持ちであった。

不思議な親近感。

にとりは何だか嬉しくなった。

「かっぱぱー、かっぱぱー」

自然と口ずさむ。

ちら、と傘屋と眼が合った。

「歌、うまいですね。自作ですか？」

「ひゅい!？」

聞かれているとは思わなかったにとりは飛び上がる。無意識に出た歌を聞かれるほど恥ずかしいものはない。しかもコメント付きである。

傘屋はひゅいひゅい——たぶん「はいそうです」という意味で、ひゅいと鳴きながら首を振る。恐らく盛大な勘違いをしている。ひゅい違いである。

「き、聞かないでよ、もう！」

「ははは、そろそろ休憩しましょうか、ね」

「うー、誤魔化された」

長時間作業をしていれば効率も落ちる。二人は立ち上がった背伸びをすると、背骨が小気味のよい音をたててぱきぱきと鳴った。

ついでに腹も鳴る。

時計の針は真上を差していた。

昨晚から何も食べていなかったのを思い出す。

にとりと傘屋は寝食を忘れて打ち込んだ後の、不思議な達成感に包まれていた。

「じゃあ、何か食べようか。準備してくるから、そこら辺に座って待っててよ。邪魔なもの足で除けてもいいからさ」

「それじゃ、失礼して」

「あ、それ、ネコを閉じ込めるための箱だから、危ないよ。触ると毒ガス出てくるよ」

「先に言ってくれませんかね、そういうのは……」

「あははー、じゃあちよつと料理してくるから。ラムネでも飲んでくつろいでて」

「すみません。ありがとうございます」

手渡されたステンレス製のコップに、ラムネが注がれる。

透き通った緑色。

しゅわしゅわという耳に心地よい気泡の弾ける音に、爽やかな青い臭いが鼻をくすぐる。

長らく見なかった炭酸飲料水に、内心傘屋は感動していた。

「わあ、懐かしいなあ」

「外からスキマ送りしてもらったものだけれど、そんなに喜んでくれるんなら嬉しいよ。ほら、もつとあるから、どんどん飲んでいいよ」

「じゃあ、遠慮なく。幻想郷に来てからこちら、飲みものの趣向品と
いったら果実水かお茶か、酒くらいでしたから」

うれしいですよ、と傘屋はしゅわしゅわと水面が弾けるコップに口
を付け。

「げぶうあ！ ぐぶつふ！ げぼお！」

次の瞬間、盛大に虚空に吐き出した。
むせる。

「な、な、なんじゃあこりやあ！」

「ちよ、ちよつと、傘屋、何してくれるのさー！」

「ご、ごほつ、何して、ごぼつ！ 何してくれるのは、こっちの台詞で
すよ！ なんですすかコレ！」

「これって、これだけど」

これ、と差しだされたペットボトルを目にした傘屋は、がっくりと
崩れ落ちた。

よりによつて、それか。

確かに、それならば幻想入りしているだろう。
もつとよく考えるべきだったのだ。

薄緑色のラムネなどない。ましてやペットボトルに入ったラムネ
は、珍しかろうと。

だからこんなにも、ラムネであると期待して生じた大きな隙に、ク
リティカルだったのだ。

「え？ 傘屋、これ嫌いだったの？ どうして？ こんなにも美味し
いのに」

「げほつ、げぼお！ 嫌いというか、合わない、ごほふつ！」

「だ、大丈夫？ 背中ぽんぽんする？」

傘屋の背をなでさすりながら、にとりは不思議そうにペットボトルをためつすがめつしている。

傘屋の口に合わなかったことに、どうにも納得がいかない様子だった。

あ、と何かに気付いた声。

「ごめん、傘屋。これラムネじゃなくて、コーラだった」

「知ってますよ、知ってますとも……でもね、にとりさん。人間はそいつと相容れることは出来ないんですよ。きゅうり味のコーラとは！」

静かに、諭すように、傘屋は言い切った。

えー、にとりは不満顔。

ぐびぐびとコーラを一気飲みし、ぷはあと大きく息を継ぐ。

「美味しいよ？」

「首を傾げられても困ります」

「ええー。河童達のあいだじゃあ、この一本のために生きてるなあ、って評判なのに」

「河童って、河童って……」

「しかし、きゅうり味の炭酸飲料とは。人間もたまにはいい事を考える。危うく脱帽するところだったもの」

絶句する傘屋。

さも美味しそうにペットボトルを啜るにとり。

河童のきゅうり好きは聞き及んでいたが、ここまでとは。

きゅうり尽くしの手料理を何度も振るわれたことはあったが、流石にきゅうりの絞り汁までは無かったというのに。これからのにとり宅で振舞われる食卓はわからないぞ、と傘屋は恐ろしさに身を震わせる。

全く、人間は余計なことを考え付いてくれる。
河童を超える人間の創造性に戦慄する傘屋だった。

「今度、里に持っていく新商品のおまけとして、生産してみようかなって思ってるんだ、これ」

「食品サンプル付けるって発想に辿り着いたのは、さすが河童はすごいなと思いますけど、それは止めておいたほうが」

「にとり印の商品を買った人間達は、望外のサービスにみんなこう思うに違いない。お、値段以上！ と！」

「聞いちゃいけないよこの河童」

へいお待ち、と運ばれて来たかっぱ巻きを二人してぱくつく。

小腹が膨れれば、次は眠気だ。寝不足の瞼がゆっくりと落ちて来る。

「それでねそれでね、今度はね——」

「そうですか——」

「うんうん！ でねでね——」

まどろむ意識。傘屋の耳に、それは届いた。

意識が浮上する。にとりの横顔。

にとりの視線を追えば、そこには山積みになされた、機械製品の箱が。

「買ってくれたら、いいなあ」

「にとりさん？」

「本当はお金もそんなに要らないけれど、ほら、妖怪の山にもいろいろあつて」

「そう、ですか」

言つて、スパナを回す。ゆっくり、ゆっくりと。

にとりは笑っていた。だが、それは、心からの笑顔ではない。

傘屋はにとりがとりかかっていた機械製品が何なのか、そこでようやくと気付いた。

確かあれは、冬場の寒波が厳しい季節に作っていた、暖房器具だったのではないか。

「にとりさん、それ……」

「あ、これ？ バッテリー式の全自動湯たんぽだよ」

「いや、そうじゃなくって。それ、確か一人暮らしのおばあさんに上げるんだって、作ってたやつだったんじゃないか」

「うん。まあ、そうなんだけど。知らないって、突き返されちゃったから。さつき工具の片付けしてた時に見付けて、いい機会だからメンテナンスしようかなって」

「突き返されたって、そんな……」

「何だか私、嫌われちゃったみたいなんだ。仕方ないよ、私、妖怪だもんね。あはは」

人里のはずれでくらしていた老婆が居た。

人見知りのにとりには珍しく、交友のある人間の一人であつたらしい。

傘屋は思いだす。

にとりはその老婆のことが大好きで、いつも何かしてあげたいと言っていた。

それまで老婆は息子と共に暮らしていたが、息子が結婚して家を出てから、一人暮らしを始めたという。歳のせいかな寒さが辛く、冬が心配だ。そう語っていたらしい。

だからにとりははりきった。

体を温める道具を作れば、きっとこの老婆は喜んでくれるだろう、と。

その年の冬、幻想郷は大寒波にみまわれることとなった。

冬が本格的にきつくなる頃、にとりはその老婆の話をしなくなっていた。

傘屋は湯たんぽを渡せたのだな、と思い、そのことについて深くは聞かずにいた。にとりが行った親切について根掘り葉掘り聞くのは、野暮だと思ったのだ。

傘屋は思いだす。

時を同じくして、幻想郷最速を名乗る鴉天狗から、一つの忠告を受けたことを。

あの老婆の話をにとりにするな、という。

その時の傘屋は、先の通りに思い込んでいたために、「そんな野暮はしませんよ」と答えたのだ。

だが、もつとよく考えるべきだった。そう傘屋は、今になって後悔する。

その天狗は、ぐつと、何かを堪えるような顔をしていた。

あれは怒りを堪えている顔ではなかった。

罪悪感に耐える顔だ。悔いている顔だった。今ならばそう思える。

たぶん、きつと、これは思い違いであつて欲しいが、おそらく、その場〴〵にこの天狗もいたのだろう。

売り言葉に買い言葉。

ちよつとしたはずみで出てしまったのかもしれないそれに、口の達者な天狗は、何をか言ってしまったのだ。

そして、にとりと老婆の関係がこじれてしまったのだろう。

傘屋が妖怪の山に顔パスで入れるようになったのも、その天狗の尽力のおかげである。

にとりの下へ向かうのだ、と言った時のあの天狗のほつとしたような顔は、そういう意味だったのだ。

罪滅ぼしのために、あの天狗は傘屋を妖怪の山に自由に出入り出来るよう、大天狗にまで掛け合つたのだ。

「妖怪の」

ぼそりとにとりは呟いた。

「妖怪の作ったものは、いらないうて」

スパナはもう、動いてはいなかった。

妖怪の賢者たちの取り決めで、人里に必要な以上の技術が普及しないよう、調整がされている。

ではなぜ河童達の造った近代道具はいいのだろうか。そう疑問に思ったことが、傘屋にはある。

おかしい話だ。間違いなく河童の造る道具は便利で格安で、だから傘屋も愛用しているのだが、これで売れない訳がない。

幻想郷の技術レベルが、少なくとも一般家庭に普及されている技術くらいは、外の世界のそれと同程度になっけていてもおかしくはないというのに、そうはならない。なぜか。

答えは簡単だ。

妖怪が作ったから、これに尽きる。

幻想郷の住民達は、いかに妖怪が恐ろしい存在であるか、骨身に染みている。

人間がそうやって畏怖を抱くことが、幻想郷の前提である。妖怪は恐ろしいと、魂の髄にまで刻まれているのだ。そうでなければ、幻想郷に住まう資格は無い。傘屋や、過激派の固定ファン達のような存在の方がイレギュラーなのである。

確かに人里で普通に買い物をする妖怪もいる。

だがそれは、人が彼等を敬い、畏怖しているからこそ成り立っている関係だ。恐怖がその根底にあるのである。

すると、どうなるか。

恐怖は、その対象がいけない瞬間は、嫌悪に変わる。

恐ろしいものは避けたいと思うのは当然のことだから。

妖怪のにおいが染み付いた品を、好んで家に置きたがる者は、なるほど居はしないだろう。

金の余った好事家か、傘屋のように妖怪と人間との区別が薄い者しか、売れやしない。

それでも河童が作った道具が大量に店頭に並ぶのは、彼等が人間の

ためにとその技術をこらした結果であり——それが売れずに在庫として返品されていくのも、賢者達が予測した通りなのだ。

幻想郷の生活は変わらない。賢者達は初めから解っていたのだから。

幻想郷は、間違いなく妖怪のための楽園である。

河童が人のために道具を作りたいと言うのなら、その通りにさせればいい。

それを買うかどうかは、人間の決めることだ。

賢者、と呼ばれるだけのことはある。

河童の望み、人間の対応、全て承知の上での取り決めだったということだ。

ゆか輪シールが、なんだというのだ。

傘屋は笑ってしまいそうになった。

だが、笑えなかった。にとりと一緒には、笑えない。今は、駄目だ。そう思った。

「おばあさんね、先週、死んじゃったんだって」

「にとり、さん……」

「冬の寒さが体にたたったんだって、息子さんが言ってた。おばあさんが死んじゃったのは、私のせいだって。私があの時、無理矢理にでもこれを渡していればって」

「それは違う。違うんだよ、にとりさん。違うんだ」

「あはは、いやー流石にそれは私にも解るよ。母親を亡くして、悲しみをぶつける相手が欲しかったんだ。うん、だから大丈夫だよ、ね？」

老婆がにとりに良くしてくれたのは、なぜか。

妖怪が来てしまったら、へりくんだり、媚を売って、どうか食べないでくださいと懇願する。それを徹底する態度こそが、人間が幻想郷で生きていくために身につけなくてはならない、必須条件なのである。

にとりはそれに気付いてしまったのだ。

いいや、ずっと前から解っていたのかもしれない。

老婆との間に感じていた絆は。

人間と交わした友情は。

まやかしてしかなかったのだと。

「もー、考えすぎなんだから、傘屋は。そんな顔しなくつてもいいってのにさ。大丈夫だつて」

にとりが大丈夫、と言う度に、傘屋はそれは自分自身に言っているのではないかと、そう聞こえてしまう。

「もっと便利なものを作れたら、みんな、喜んでくれるかなあ」

傘屋はいてもたつても居られなくなって。

だからにとりの頭上に傘を差してやった。

何故か、などとそんなことを考えるのは止めた。

自分は傘屋でしかない。どうせ傘を差す事くらいしか出来ない。それでも何もしないよりは、ずっといい。

「ちよ、ちよつと傘屋。ここ室内、というか洞窟内だけど、天井あるんだから、傘なんか差さなくても」

「雨だからですよ」

「だから、雨漏りもしないんだつてば。それにほら、外、晴れてきたじゃないか」

「雨ですよ」

「いや、もう晴れたつてば」

「雨なんです。だから、ほら、もっと深く帽子をかぶつて。いくら河童でも、濡れちゃつたらいけない」

「わっぷ」

無理矢理にとりの帽子を目深にかぶらせる傘屋。

大きめの帽子は、にとりの鼻さきまでを覆った。

そのまま頭に手を置いて、ぽんぽんと叩く。

「…………お節介な人間だなあ」

「傘屋ですから。婦女子が雨にうたれるのを、見ぬ振りは出来ません」
「うん、ありがと。じゃあ、もうちよつとこのままでもいいからおうかな」

そう言つて、にとりはぎゆうつと帽子のつばを握つた。

顔を隠しているようにも見えた。

雨が降っている。

傘屋はすっかりと晴れた外を見ながら、そう思った。

「ん、よし、と。ほら傘屋、もう雨は止んだよ」

「にとりさん、でも」

「いいから、もう雨は止んだんだから、傘屋は店じまいしなつてば。押し売りは嫌われるよ。払う銭もないけれど」

「でも」

「大丈夫だつてば。休憩終わり。作業に戻ろうよ」

「本当に、もういいんですか？ もう少し休んでいてもいいのでは」

「だめだめ。人間達のためだもん。ようし、がんばるぞー！」

妖怪は人を襲う。

人を襲わぬ妖怪は、妖怪ではない。

それは河童も例外ではないのだ。

河童は川でおぼれた人間を、そのまま川底に沈めてしまう。他の妖怪に比べて頻度は多くはないが、それでも人を襲っているのだ。

それはもちろん、にとりだつて。

何ヶ月かに一度、にとりは傘屋の前に姿を現さなくなる時がある。

それは糧としてスキマ送りにされてくる外来人を、川底に沈めた時であると、傘屋は知っていた。

可憐な少女にしか見えないにとりも、妖怪として恐れるに足る理由

があるということだ。

ようやく顔を見せたにとりのその顔が真つ青で、今にも泣きそうなのを堪えて、無理矢理に笑っていたとしても。

妖怪なのである。

河城にとりは、妖怪なのである。

人間に恐れられることは、避けられないことなのだ。それは自然の摂理で、どうしようもないことなのだ。

にとりはそれを、ちゃんと理解している。

「どうして」

「んー？ どしたの、傘屋？」

「どうして、そうまで人間に良くしてくれるんですか？ 人から恐れられてると、解っているんでしょう？ なのに河童は、どうして」

「そんなの当然じゃん」

何でもないと、当たり前のことを言うように、にとりは傘屋に振り向いて、にっこりと笑った。

心からの笑顔だった。

だというのに、それは深く傘屋の心に突き刺さる。

「人間は河童の盟友だから。私、人間のこと好きだもん」

差し伸べた手を振り払われてなお、にとりは人間を好きだと言った。

ああ、と傘屋の心は、真つ白に漂白されてしまった。虚しさではなく、哀しみが溢れてくる。零れ落ちぬよう、必死にそれを留めた。

傘屋は、にとりも解っている。

河童が人間をどれだけ想おうと、人間は河童に想いを返してはくれない。

にとりも、河童たちも、それでも人間を好きでいてくれるのか。好きで居続けてくれるのか。

傘屋は天を仰いだ。

洞窟の岩肌と、蛍光灯の灯りが目に染みる。

白色の輝きを理由に、傘屋は一度だけ目を拭くと、作りかけの傘に向き合った。

本日の幻想郷の空模様。

雨、のち、晴れ。ところにより、にわか雨――。

東方Project 幻想郷の傘屋さん 8

落ち窪んだ目。

こけ切った頬。

水分が失せひび割れた唇。

がさがさとした土色の肌。

立派な作りをした神社の一室で、死体か、木乃伊が一体、手足を投げ出して転がっている。それは少女、だったものだ。少女だったものが一体、干乾び上がって倒れている。

手足の力は失われ、視線は天井の一点を見詰め、閉じられることはない。

ただ、少女の胸が時折思い出したかのように上下しているのだから、死んでいないことだけは解る。

つまり、この少女は死に瀕しているのだ。まるで生気を感じさせない、五体投地の姿勢のまま。

畳の上で、死体の様相を醸している少女――。

彼女こそが、博麗神社今代の巫女。

博麗霊夢である。

「お待ちせしました。お粥、持って来ましたよ」

「あー………あー………」

「水ぐらい飲みましようよ、霊夢さん………」

「うー………うー………」

虚ろな呻き声を零す霊夢の上に射す影。

呆れ顔で霊夢を抱き起こしたのは、傘屋だった。

ここ博霊神社で最近、週一で見かけられる光景である。

腹が丸出しだったのは、とりあえず服をと脱ぎかけて力尽きたのであろう。

日が経って異臭のする巫女服を全て脱がし、寝巻へと換えてやる傘

屋。

霊夢の膝と背に腕を回して持ち上げてから、敷いてやった布団へと寝かせる。

意識があることを確認し、部屋に来る前に作っておいた粥を口元へと運ぶ。匙を傾ける。霊夢のひび割れた唇に、ペースト状の米が流れ込み、嚙下される。

こうして霊夢の世話をしてやるのは、傘屋にとってはもう慣れたものだった。

何せ、週初めに今週も良い仕事が出来ますように、と祈願のため神社へと足を運ぶと、決まってこの巫女は干乾びているのだ。

栄養失調と脱水症状である。

初めて霊夢の瀕死一步手前になった状態を目の当たりにした傘屋は、これは医者に見せねばと迷いの竹林まで飛んで運ぼうとした。しかし霊夢は頑なに首を振る。

掠れる声を聞けば、どうやら食事と水分さえ取れば霊力で回復するのだという。死にはしない、だから放っておいてくれ、と。ここから出たくない、と。

流石に祈願に来た身としては、神に仕える巫女様を放っておくわけにはいかず、霊夢自身に許可を取って社に隣接する母屋へと上がり、そのまま食事を作ること。しかし台所に立ち、傘屋は啞然とした。

何も無い。

野菜も、肉も、米も、何も無い。

いくつかある井戸の内、「水垢離用・飲料×、触れるべからず」と書いてあるもの以外は全て干上がっていて、からっぽだった。傘屋には解らなかったが、水垢離用の井戸水は井戸ごと清められていて、常人が触れるのは許されないそうだ。巫女であってもそれを飲んではいけないらしい。

つまり飲料水すら無いということだ。

こんな状況でどうやって生活していたのか謎だったが、仕方なく傘屋は人里に飛んで帰り、食材を買って来てやる羽目になったのである。

まさか巫女に食費を請求するわけにもいかないのです、実費である。こうして傘屋がお布施という名の生活支援を初めてからしばらく。一向に霊夢の生活は改善されずにいた。

「はい、お水ですよ」

「うー……」

「ほら、ちゃんと水差しを啜えて。零さないようにゆっくり吸って」
「うぐ、うぐ、うぐ」

流石は歴代博霊の巫女最高峰の霊力を持っているからか、水を含んだ途端、みるみる肌に張りが戻っていく。取り込んだ養分を一瞬で活力に変換しているのだろう。

顔色の悪さは変わらずだが、これならば粥も直ぐに消化されて活力へと変わるだろうか。

水差しから可愛らしく、ぷあつ、と口が離されたと同時に、頬に紅が差す。

思ったが早いかな、もう健康体へと回復したようだ。

恐るべき霊力と回復力だった。

「何と言いますか、回を追う毎に回復力上がってますよね。もしかして、新しい修行か何かだったりしますか？

ほら、意図的に自分を痛めつけて超回復させるとか、禅の精神修行だったりとか」

「ブツデイズムに目覚めた覚えは無いわね……」

返事をするのがさも面倒臭そうに、肌艶を取り戻した霊夢は傘屋をねめつけた。言外に「余計な事を」とその視線は雄弁に物語っている。

美人が怒ると何とやら。未だ少女の風貌を残す霊夢であるが、今現在も、将来の美貌は約束されていると感じさせる程の可憐な容姿である。そんな彼女に睨みつけられると、それはそれは恐ろしい迫力があつた。

汗と油で広がって固まった、胸のあたりまで伸ばされた黒髪。丸っこい輪郭に、引き締まった唇。抜き放った刀身のような眉は、大きな焦げ茶の瞳をより可愛らしく見せる。全てのパーツが美しく、それでいて嫌みなく整えられていた。誰もが振り返ることは無いが、しかし頬笑み掛けられたなら温かな気持ちになってしまうような、そんなかんばせであった。

だが、今は鬱陶し気に細められている大きな瞳、その下には濃い隈が縁どられている。隈縁に視線はより一層鋭く研がれ、もはや刺突の域に達する程。

傘屋が参拝しに来るまでじっと天井を睨みつけていたのだろう、寝不足で刻まれた隈は、少女の愛らしいはずであった外見と魅力を著しく損なっていた。

こんなだから里人にやさぐれ巫女なんて呼ばれるのだ、と傘屋は知られぬよう溜息を吐いた。

「はい、おはようございます霊夢さん。それだけ喋れるなら大丈夫です。さ、お風呂沸かしておきましたから、お湯でも浴びて来て、さっぱりしてきてください。結構酷い臭いですよ」

「うー、仕方ないわねえ」

「お尻を搔かない。お風呂から出たら、今度こそ人里に降りて、買い出しをしましょう。一緒に行つてあげますから」

「うー、仕方ないわねえ」

「布団に戻らない。そんなに人前に入るのが嫌ですか。ほら、お風呂行きますよ」

寝がえりをうって身体ごと傘屋から顔を背ける霊夢。

傘屋の口元が引く付く。

務めて常の頬笑みに整形し、霊夢を向き直させる。

「いっち向いてくださいよ」

「……………」

「無視ですか。いいでしょう、なら無理矢理にでも」

「ぬううー、触らないでよこの鬼畜！ 性犯罪者！ 年若い乙女の柔肌を守る衣を脱がそうとするなんて、この変態！」

「ああ、もう、暴れないでくださいよ。あのね、霊夢さん、俺が何度あなたを着換えさせたと思ってるんですか。」

最初の内はともかく、今はもう介護してるのと同じで、何も感じませんよ。そんなにお風呂に入るのが嫌ですか？」

「だってお風呂に入ったら人里に行かなきゃ駄目なんでしょう？ 絶対嫌よ！ 人前に出るくらいなら、一生お風呂になんて入らないわ。このままぶーんと臭ってやるんだから！」

「あなたという巫女は……！」

どこか浮世離れた雰囲気を持つてはいるが、感性は人並みの傘屋である。感性自体は人並みだが、そこに辿り着くまでに致命的にトンチンカンなのだ、とは彼の知人達の弁。

とかく、余りに馬鹿なことを面と向かって言われては、普段は温厚な傘屋であつても腹は立つ。

「ええい、覚悟しなさいな！ 博霊の巫女でしょう、あなたは。人里に出ないと顔を忘れられますよ！」

「やー！ いやー！ あうああー！」

「駄々をこねない！」

じたばたと両手足を振り回して暴れる霊夢を抑え、鍛え上げられた体術でもって、寝巻を脱がしに掛かる傘屋。

サラシを一息に引つ張られた霊夢は、空中で独楽のようにくるくると回つて、ぼすんと布団に落ちた。

あつという間に一糸纏わぬ姿に剥かれた霊夢だったが、それでも這って逃げ出そうとする。

しかし回り込まれてしまった。

必死に逃げる霊夢の、左右に揺れる小ぶりの尻たぶを見下ろしても

顔色一つ変わらないのは、なるほど彼がトンチンカンと言われるのも理解出来よう。

性欲はあるが、そこに辿り着くまでにえらく遠回りしなくてはならないということだ。傘屋にとっては、これは本当に介護の一環という認識なのだろう。

ここで霊夢がかつての女鬼のように、色気を前面に押し出していたならば話は別となるのだが。

巫女に色香など求められる訳もなく。

がっしと傘屋は霊夢の両足を抱え込むと、そのまま風呂場に向って歩き出す。手を握らないのは、以前それでまんまと振り払われて逃げられたからだ。その時は、押し入れの中で霊夢は発見された。探し出すまでに3時間掛かった。また隠れられてはたまらない。

ずりずりと、足をロツクされたままうつ伏せに引き摺られていく霊夢。

「いた、いたたたたつ！ 胸！ 胸削ってるってば！ おっぱいなくなるー！」

「はいはい。元から無いでしょう」

「言っではならんことを！ アンタは！」

「はいはい。嫌なら自分で歩いてくださいね」

「むうう、どうせなら仰向けに引き摺ってよね。あ、やっぱりおんぶして」

「そんなに動くのが嫌か」

仕方なく足を離れた傘屋は逃げ出さないと警戒しつつ、背を向けてやる。

よっこいせ、という声と共に、背に重さ。柔らかさは感じない。無いものを感じろと言われても、土台無理な話である。

栄養失調であったことはさて置き、霊夢はこれは軽すぎやしないかと心配に思うくらいの体重だった。

地に足がついていないような、雲のようにふわふわと空を飛んでい

るような。有り得ない例えだが、風船を背負っているような感覚がする。

以前、そう本人に言ったことがあるが、「あんたが言うな」と返され、納得がいかなかったことを覚えている。

失敬な、自分は三食ちゃんと食べているし、働いてもいる。ちゃんと地に足付いた生活をしている。

そう言い返しても、呆れたように笑われるだけだった。

やはり、納得がいかない。

「ああ．．．．．気もちいいわね。このまま消えてしまいたい」

「おーい、霊夢さん。寝ないでくださいよ」

「あー、楽ちん楽ちん．．．．．ぐう」

よだれが首筋に垂れ、顔を顰める傘屋。このまま本当に寝入るつもりだ。

持ち上げている尻を振り上げると、霊夢はぎやつ、とうら若き乙女にありえざる悲鳴を上げて目を覚ました。

風呂嫌いという訳ではなからうに、そうまでして嫌がるのは、やはり人里に下りたくないからか。

盛大に傘屋は溜息を吐いた。

どうせ風呂場に連れて行っても、駄々をこねて動かないに決まっている。

テコでも動かないつもりなら、それもいいだろう。

このまま丸洗いしてやる。

初めの頃はどぎまぎとしていたが、もう霊夢の裸体を見ようが触れようが、まるで動じなくなっていた傘屋だった。

「あー．．．．．死にたい」

ふひい、と憂鬱の吐息を吐いて、霊夢は傘屋の首にもたれ掛かった。汗臭い。

傘屋は湯気の蒸す風呂場へと霊夢を放りこむと、自分も手早く衣服を脱いで下着だけになってから、霊夢を追って風呂場へ入る。

細い肩に掛け湯をしてやってから、手を上げさせて、固く絞った手ぬぐいをその白い脇にあてた。



※1. 《霊夢とお風呂》の歴史は白沢に美味しく食べられました。

※2. ワツフル味だったそうです。

※3. 決して私が書くのが面倒臭くなったわけではない。ワツフルワツフル。



博霊神社が幻想郷で担う役割は、大別して二つある。

一つは大結界の管理。幻想郷を外の世界から隔離している大結界を、郷の東の先から監視すること。

一つは異変解決。幻想郷内に発生する異変、人為的妖為的に引き起こされた天変地異のようなものを、時には武力でもって静定すること。

この二つだ。

前者は幻想郷を幻想郷たらしめる要であり、後者は放置しておけば幻想郷内のパワーバランスが崩れ、内部崩壊してしまう。

どちらも欠かすことの出来ない役割を、博霊神社は担っている。であるというのに、こうまで寂れている理由。

それは、人里から続く獣道は険しく暗く、見通しが悪く、安全は保障されていない。なので、こうして傘屋の様に純粹に参拝に訪れる客

は数少ない。集まる者の多くは、外界に接する神社の近くに時折落ちて来る外界の品の蒐集家か、巫女の人柄に惹かれた妖怪しかないのである。

賽銭箱の前で柏手を打つ者は、もはや傘屋しかない状態だ。

妖怪が集まるのも巫女の人柄、とは言うが、それは彼女が親妖怪派という訳ではない。人間に仇さえ為さなければ妖怪の存在を容認してしまう彼女の度量に惹かれているのだ、と妖怪達は口を揃えて言う。

だが傘屋は思う。それは違う、と。

容認しているのではなく、働くのが面倒臭いのだ。

忌み嫌っていると言ってもいい。

何故か。

「ほら、霊夢さん、行きましょう」

「む、むりっ、無理っ！ 無理無理無理、無理だっばー！」

山の頂にある神社から伸びる長い階段の手前、傘屋の手に縫りつき、腰を落とす霊夢。

ここまでずりずりと引き摺られては来たが、これ以上は無理のようだ。

顎はガチガチと鳴らされ、膝はガクガクと揺れている。繋がれた手は痛いくらいに震えていた。

彼女が頑なに人里に下りるのを嫌がるのは、本人曰く「下界から離れて浄の気を保つためよ」とのことらしいが、それは嘘だと傘屋は断ずる。

そう言った時の霊夢は、すごく眼が泳いでいた。
今と同じように。

「しゃんとしてくださいよ。あなたは幻想郷を代表する博霊の巫女でしょう」

「や、やだっ、やだ！」

こうまでして霊夢が人里に下りたがらない理由。それは。

「ううう、人間怖いよう」

ということらしかった。

あろうことかこの巫女は、人間と妖怪の中間者に在るべき存在であるというのに、どうしようも無い程に人嫌いであったのだ。

より詳しく言うならば、視線恐怖症というやつだ。

人に見られるということを、霊夢は極端に恐れていた。

さて、霊夢がこれまでこなした仕事の中で、妖怪と人間との争いを「おだやかに」決着させる方法を考案した、というものがある。

妖怪と人間、あるいは力のない妖怪との力量の差を埋めるための、スペルカードルールと呼ばれる決闘法である。

大雑把に説明すると、お互い繰り出す技を宣言した後に技を撃ち合い、それを破った者の勝ちとなるルールである。

この決闘法を普及させたはいいが、そのせいでスペルカードルールにおける強者は老若男女問わず、大いに人気を集めることとなった。技の威力は元より、美しさにも重点が置かれたことが、大いにウケたのだ。

飛び交う弾幕の美しき光景。その中心を舞うのが美しい少女であるとしたら、それはもう、言わずもなだらう。

それは正に、幻想的な光景。

いつしか霊夢が人里に出れば、必ず注目を集めるようになった。固定ファンが出来たのである。弾幕ごっこの強者には、大抵固定ファンがついている。

この固定ファンというものが扱いが困るもので、例えば往来のど真ん中で。

「BBAA—————！ 俺だ—————！ 結婚してくれ—————！」

と昼夜問わず叫ぶ傍迷惑な男が頻出したり。

ちなみにこの男、叫んだ瞬間に地面に開いた穴——幾万の目玉がぎよろりと覗くスキマに送られ、その後行方不明である。

消える瞬間、ごほうびです、と叫んでいたが、一体何の褒美を得たというのか。

此処ではない何所か、今ではない何時か、知覚不可能な空間を永遠に彷徨うことになったのだろう。

スキマ送りにされる男が一人出る度、里の外れで罪と大きく書かれた覆面を被った裸の男が一人増えているのだが、関連性はこれも不明である。

また、別の例えとして。

「USC——！——！ 俺だ——！——！ 罵りながら蔑んでくれ——！——！」

と昼夜問わず土下座する傍迷惑な男が頻出したり。

ちなみにこの男、地面に頭を擦りつけた瞬間に鞭——のようになる傘で滅多打ちにされ、その後行方不明である。

傘で打たれる最中に、ごほうびです、と叫んでいたが、一体何の褒美を得たというのか。

粉微塵に叩かれ、打ち砕かれ、向日葵畑の養分にでもされたのだろう。

傘打ちの刑を処される男が一人出る度、向日葵畑に続く丘への道すがら、うねうねと動く黄色に塗りたいくられた向日葵を模した男が一人増えているのだが、関連性はこれも不明である。

スペルカードルールが普及し、比較的平和に物事が解決されるようになったとはいいが、それも考えものだ。

このように、敬意や畏怖を向ける者が多くなり妖怪は非常に有り難かったのだが、その反面、どうにも行き過ぎて困る迷惑な者が増えているのもまた事実なのである。

では霊夢はというと、彼女はそこまで実害を伴う被害を受けてはい

ないが、逆にそれが堪えるようだ。実害がないのだから、表立って排除することが出来ないのである。

何者にも囚われることのない価値観を持った霊夢であるが、他者から感情を向けられ、それに全く影響を受けないという訳でもない。

そういう無言の圧力や視線といった曖昧な形の無いものにこそ、敏感に反応してしまうのだろう。巫女である以上、目に見えない、実体の無いものに敏感でいなくてはならないのは当然のことだ。

そのまま受け流して終わり、とするには、余りにも多くの念に霊夢は晒されてしまったのである。

元より人嫌いの体がある霊夢だ。

昔は今より幾分かマシだったそうだが、人前に出るくらいなら餓えた方がまし、もう一步も神社から出ない、と言いつ張りようになるまで、そう時間は掛からなかったそうさ。

かくして、立派なひきこもり巫女が完成したのである。

「ええい、もう諦めたらどうですか！」

「いやーあー！」

全体重を掛けて傘屋の手を引く霊夢。

傘屋は盛大に溜息を吐いた。

神社に来ると溜息を吐くことが多くなる。気を溜めるために祈祷に来たというのに。

「この前、咲夜さんと一緒に人里に下りたそうじゃないですか。どうしてまた今回はそんなに行き渋るんですか」

「だって、あいつ私よりも目立つじゃない。それに半分人間じゃないようなものだし」

さもあらん、と頷く。

時間操作能力を持つ咲夜は、よく時間を停止させて活動しているのだが、総停止時間は一年や二年ではきかないだろう。

自分の時間を止めることは出来ないはずだ。だというのに、咲夜は若々しい見た目を保っている。

時間を逆回しにするのは難しいらしい。そして、咲夜が忠誠を誓うのはかの吸血鬼姉妹の片割れだ。さて――。

「人間でも、能力を持っていたらいいんですか？」

「馬鹿ね。人里の人間に会うのが嫌なのよ」

「人里というコミュニティに属する人間と相容れないと。それはまたどうして？」

「私を取り込もうとするから」

傘屋は出かかった声を飲み込んだ。

何か反論を吐こうとしたが、直ぐに言葉はでなかった。

それは、と言い淀む。

「それは……いや、彼等は博霊の巫女の中立性がどれだけ重要か解っています。そんなことをするはずが」

「頭で理解していても、無意識までは制御出来ないわ。サトリの妹を連れて来るまでもない。

もつと良い暮らしがしたい、もつと自分達のために働いてくれ、同じ人間じゃないか、もつと、もつと、もつと、もつと妖怪を滅ぼせてね。重たいのよ。飛びにくいったらないわ」

強き者、弱き者の区別をしない霊夢は、時折酷く残酷であると評されることがある。差別ではなく、区別であるから。強弱変わらない対応は、時に大いに相手の自尊心を傷つけることがある。

それを言えば傘屋も同じではあるのだが、傘屋は自分を弱きに置くことで、全ての者を目上として接していた。それは霊夢とは決定的に異なる平等性だ。自分を含まぬ平等は、究極の不平等でもある。

霊夢はというと、自分自身をも区別しないのだから、徹底している。博霊の巫女には、それが魂に染みついていないのかもしれない。

自他の評価付けを全くしない霊夢は、自分を縛りつけるものを酷く嫌う。

あらゆるものに縛りつけられないためには、空を飛ばなければならぬ。

束縛されないがために空を飛ぶのではない。逆だ。空を飛ぶから、あらゆる束縛も意味を為さないのだ。

束縛を嫌うのならば、飛ばねば。

飛ぶためには、身軽でいなければ。

例えそれが視線であったとしても、絡みつけば飛びにくかろう。

そこには期待や好奇、嫉妬や羨望の念が込められている。

霊夢にしてみればそんなもの、重くていけない。

だから、嫌で嫌でたまらないのだろう。傘屋はそう推察する。

……本当は、人付き合いが面倒だからなのかもしれないが。

普段の怠け具合を見ていたら、それが正解のように思えて困る。

というか、幻想郷の要である博霊の巫女が、まさかこんなにくーたらだとは信じたくないから、それらしい理屈を無意識が捏ねあげているのやも。

「じゃあ、同じ人里の人間である俺はどうなんですか？」

「アンタは別」

むすっ、とした顔をしてそっぽを向く霊夢。

意味が解らない。

これはいよいよ霊夢のものぐさの線が濃くなってきたぞ、とじとりと睨み付けてやれば、段々と赤くなる顔。

ちらちらと視線を合わせたり背けたりしながら、毛先をいじっては髪型を整えている。

そんなことで誤魔化せると思っているのだろうか。

「こつちを見て」

「こ、こつち見るな」

「この人という巫女は。
傘屋のこめかみに血管が浮かぶ。
にこやかな顔を崩さないのは流石だが、凄味があり過ぎて怖い。ま
るで向日葵畑の妖怪の頬笑みが如く。霊夢も気付いたようで、うつと
半歩下がっていた。」

「な、何よ」

「いや、別に何も」

「何も無いなんてことないでしょ、ってちよ、ちよつと待って、無言で
手を引つ張らないで、お願い！ や、や！」
「.....」

「や、や、やーっ、やー！ やめてっって言ってるでしょうこの夢想封印
！」

「ボムアツ——!?!」

広範囲殲滅霊力砲である。

いかにスルー能力に定評のある傘屋といえど、傘なし、しかも至近
距離で大技を仕掛けられては厳しいものがある。

ピチューン、と霊力が弾ける音と共に、傘屋は吹き飛んだ。

所々が黒く焦げた傘屋が地面に激突するまでには、霊夢は一目散に
逃げ出していた。

遠ざかる足音を耳に、ゆうらりと傘屋は復活する。

「この、ニート巫女が.....!」

撃墜されたのも何のその。傘屋は走る霊夢の背を追う。

角を曲がったところで霊夢の姿を見失う。が、大丈夫である。問題
ない。

霊夢の隠れる場所など、パターンが決まっている。底が浅いのだ。
考えるのが面倒なのだろう。

「そこかー！」

「ひぎいー！」

御堂に上がってすぐ脇、すばあんと襖を開けると、押入の中で霊夢が煎餅をかじっていた。

外にぼりぼりという小気味良い音が漏れていた。これで見つからないと本当に思っているのだから、駄目巫女である。

母屋ならともかく、神前で煎餅をかじるな。

「さあ、観念して買い出しに行きますよー！」

「ちよ、ちよつとタイム、タータイム！」

「ええい、もう容赦せん！」

「いや、だから、アンタそんなボロボロで人里下りるつもり？ ほ、ほ

ら、私も埃とか汗まみれになっちゃったし！ ね、ね！」

「……何が言いたいのですか？」

「お、お風呂とか入りたいなーとか」

「……」

「い、一緒に入ってあげなくもないわよ？」

しなを作って見せる霊夢であるが、動じる傘屋であるはずもなく。まったく、と傘屋は眉間を揉み解しながら、霊夢の耳を振り上げる。向う先は母屋の方にある風呂場だ。

御堂を出て、ぎくぎくと砂利を踏みながら、傘屋は頬にこびり付いた煤を手の甲で擦り落とす。

痛い痛いと呼く霊夢は当然無視である。

何だかんだで、霊夢の願いを聞いてしまう傘屋だった。

「あ、そうだ傘屋。ちよつと待って」

「はいはい、何ですか」

「アンタ、何か忘れてない？ ほら、素敵な賽銭箱はそこよ」

「・・・・・・・・」

「入浴料」

「・・・・・・・・」

「こんな美少女と裸の付き合いが出来るんだから、ちよつとくらいお布施をしないと、ばちが当たるわよ」

「・・・・・・・・」

認めたくないが、これでも実質上幻想郷を牛耳れる役職にあるというのに、この巫女は。

傘屋の帰りを待つ、趣味の悪い紫傘に描かれた口から、大口に見合った大きな溜息が漏れた——ように見えた。

トツプがこんななのだ。

今日も幻想郷は平和である。

傘屋は無言で財布ごと、賽銭箱に叩き込んだ。

ぼけもん黒白5

黒白：111日目

日曜早朝。

昼過ぎまで寝ていたいのに、テレビから流れる軽快なアニソンで叩き起こされるのが、ここ一年の通例となっている。

誰の仕業かなど言うまでもなく。

『ゴルヒコのしわざか！ んんん、ゆるざんっ！』

そう、ゴルゴム・ノブヒコのしわざ………じゃない。

いかん、朝は頭が働かない。

「モツエルワツ。モツエルワツ！」

朝っぱらからご満悦だな、ポチ。

おはようさん。

でももう少しポリウム落とそうな。

「ルーワ！」

はいはい、解ったから。

一緒にテレビ見てやるから、ソファをばすばす叩くなって。

ここすわれここすわれ、ってやらんでもいい。ホコリが舞うだろ。

よっこらせーと。

なんだ、その顔は。

おっさん臭い？ ほっとけ。

うるさい、とは言えない。

自覚はある。

『くやし………！でも………っ！』

サンシャイン・ブラックRXになじられて涙目になるゴルゴム・ノブヒコ。略してゴルヒコ。

完全に冤罪だ。

吐けえ、と襟首を締めあげられ目から光が消えている。

が、そこはかとなく恍惚とした表情を浮かべているのは、俺の見間違いのだろうか。

このアニメは勧善懲悪をテーマにしている、で、二人の少女が悪の秘密結社と戦うストーリーリーなわけだが、何か事件がある度にサンシャインがゴルヒコのせいだと決めつけるといいう、訳解らん展開が必ず挟まれるのだ。

ポチ曰く、王道的展開だとか何とか。

おまえこれ、子供向け番組なんだぞ。

ほら、サンシャインのせいでゴルヒコが給食費盗んだ犯人にさせられて、クラス中からハブられてるじゃないか。

ボデイ狙えボデイ、つてされとるがな。

いやだよ、こんな子供向けアニメ。

世知辛すぎる。

「モエルーワー！」

不憫モエ？　なんだそりや。

これは常識、これぐらい押さえとけ、だと？
うるせえ。

ゴルヒコの机に花瓶まで飾られてるじゃないか。

『やったねサエちゃん。家族が増えるね』

嬉しそうにぬいぐるみに話しかけてるけど嫌な予感しかしねえ。

頼むからテレビの電源を切ってくれ。

おい、なんだその顔は。

お前今俺のこと、鼻で笑ったな。

チキンポケモン：クロイ、性格おくびよう————じゃねえよ

！

テメエポチこの野郎………。

犬のくせにいい度胸じゃねえか。

いいだろう、最後までみてやんよ！

吠え面かきやがれ！

「バーニンガー………」

ちらりとこちらを見下ろす青い瞳が物語っている。

ついてこれるか————と。

ふぎけるな。

お前なんかすぐに追い越してやる。

お前こそ俺について来やがれ——！

『本当の勇氣というのは、腕力が強いとか、弱いとかじゃない！ 心の底から許せないものに対して、イヤだ！ と叫ぶ事なんだ！』

『子供の心が純粹だと思うのは、人間だけよ……サンシャイン』
「モエルーワ！」

モエルーワ！

と二人していい感じにモエルーワしてるところで、ぴんぽん、と玄関の呼び鈴が鳴る。

いいよポチ、石に戻ろうとしなくても。

まだあと15分くらい尺が残ってるだろ。最後まで見ようぜ。

しかし今回は神回だな。ぬるぬる動いていやがる。

ああいいよ、客は無視してもいいって。ほっとけ。

こんな朝早くから来る客なんぞ、嫌みを言いたいばかりの年寄り様達だけだからな。ジジ様たちは早起きなんだよ。

ことあるごとに朝っぱらから文句付けてきやがって、もううんざりだ。

「……いちゃ……けてえ」

ぴんぽん、が扉をとんとんと叩くのに変わる。

とんとん、とんとん、とんとん。

長いよ、しつこいなあ。

わかった出るようるせえよ。

はいはい、誰ですか……つと！

とふん、と開いたドアから飛びこんで来る誰か。

反射で受けとめちゃったけど、誰よ。

「お、おに、おにいちゃああ……」

胸の辺りに抱きつきながら、涙を一杯に浮かべて、こちらを見上げる少女。

美少女、と言い表しても過言ではない容姿の女の子だった。

簡素なノースリーブTシャツ、その上から羽織った黒のジャケット。

ジーンズを大胆にカットしたホットパンツから覗く、白い太股が眩しい。

すらりと伸びる長い足先は編み上げブーツが。時間を追う毎にうるんでいく瞳は、抱き締めて欲しいと懇願しているかのよう。

でも露出している肩は華奢過ぎて、触れたら壊れてしまいそうで怖い。

勢いで、ふわり、と腕をくすぐる長い髪。

ウエーブが掛かったふわふわの長い髪は白いキャップに収められ、キャップの穴からポニーテールにして一まとめにされていた。

この髪の質感、シャンプールの香りは、まさかこの子は……………。

「ふっふっふっ」

開いた玄関の隙間から聞こえる不敵な笑い声。

誰ぞーと目を向けると、忍び笑いを漏らすベルちゃんがいた。

口元を手で隠し、目を細めてニヤニヤしている。

「トウコちゃんフアイトだよ！ クロにいさん、優しくしてあげてね！ じゃあ、私は先に帰ってるからー」

ぐっどらつく、と親指を立ててスキップしながら去っていくベルちゃん。

チエレンの眼鏡はダテ眼鏡ー、などと軽やかな歌も聞こえた。

チエレン……………お前の眼鏡、オシヤレメガネだったのか。

しかし、やっぱりこの子、トウコちゃんなんだ。

そーいやあの写真と同じ格好してるな。

実物で見ると全然違って解らなかつたよ。

「やっぱり、変、なんだ……………」

くしゃ、と歪む顔。

いつもと違って表情が見えるものだから、胸が痛む。

いやさ、違うよトウコちゃん。

写真よりもずっと可愛くって、解らなかつたんだよ。

似合ってる。

すごく、似合ってる。

エルフィンヘアもいいけど、こうやって顔が出てるのもいいね。
「ほ、ほんと、うっ？」

もちろんだとも。
可愛いよ、トウコちゃん。

せつかく可愛いんだから、恥ずかしがらずにそうやって顔を出していればいいのに。

ははは、小顔美人さんだなあ。
ほーれ、ほっぺたぷにぷにー。

「ひ——」
ひ？

「ひやああああ……」

熱っ！
ほっぺたあつっ！

「モエルーワー」
うるせえ。

小声だけどうるせえ。

まあ立ち話もなんだし、ほら、おいでトウコちゃん。

「ひやああああ……」

抱きつかれたままでは動けないので、よいせと抱っこして移動。
目をまわしてこんらんしていたトウコちゃんを、ソファの上に座らせる。

ポチのやつは既に石ころ形態になっていた。

足の下においてころころと転がし、土ふまずを刺激することにする。

気持ちいいなー。

キヤインキヤインとポチエナが鳴くような非難の声が聞こえるが、無視である。

ポチが入っているこの石、良質の軽石に質感が似ているのだ。

風呂でかかたをこしごしとかするととても気持ちがいいので、色々と重宝していた。

もっぱら足つばマッサージ器として役立ってくれている。

「はうっ！ こ、こは、おにいちゃんの、部屋？」

おかえり、トウコちゃん。

「う、うん。今ね、すごいことが、起きたの。わたし、テレポートした、みたい！」

うーん、テレポート覚えてるポケモンは手持ちにないなあ。

きよとん、と首を傾げているトウコちゃん。

室内で帽子をかぶっているのはよくないと思ったのか、白いキャップは握りしめられて胸元へ。これはママさんの教育の賜物だろう。

うん、いつものトウコちゃんだ。

力強くせつ毛は、帽子に圧迫されていてもふわふわ感を失わず。ちよつと髪が乱れてるね。ほらこつちおいで、トウコちゃん。

「はい、おにいちゃん」

ふっふっふ、まんまときおったわ。

シラカワ家のエルフーンがあらわれた！

クロイのなでまわす。

「ひゃー」

こうかはばつぐんだ！

トウコはたおれた。

クロイはレベル15にアップ。

「はう、はふ．．．．．おにい、ちやああ．．．．．んう
しまった、やりすぎた。

トウコちゃんトウコちゃん、起きてくれい。

「うう、たいへんな、ことに、なつちやった．．．．．」

ごめんごめん。

なんだか普段と違うから、つい構ってやりたくなつちやつて。

「んう．．．．．あのね、おにいちゃん。本当に、似合って、る？」
似合ってるって。

本当だよ。

「でも、足とか、出ちやつてるもん。ベルちゃん、みたいに、柔らかくない、し．．．．．」

そんなことないさ。

眩しいよ。

マシユマロみたいで、つついてみたくなっちゃうくらいに。

「……………いい、よっ」

何が？

「おにいちゃん、なら、触っても……………いい、よっ」
ぬう。

いやそれはだね、トウコちゃん。ちよつと問題が。

「お願い、おにいちゃん。さわって……………くださいー！」

目の前に立って、ホットパンツのただでさえ短い裾を持ち上げるトウコちゃん。

ひらひらの部分をぐつと掴み、ほとんど股の間接まで見せ、どうだとばかりに白い太股が眼前に突き付けられた。

ぎゆうつと目をつむってリアクション待ちをしている。

そんなに赤くなるくらい恥ずかしいなら、やらなきやいいのに。

しかし、これはどうしたら……………。

「モエルーワ？ ネエ、モエルーワ？ ネエネエ、モエルーワ？」

うるせえ。

こいつ……………つ、俺を試していやがる……………つ！

やらないからな！ 絶対にやらないからな！

勝手に伸びていく手を無理矢理下ろす。

危なかった。あと5ミリもなかった。

ささ、トウコちゃん、ソファにすわっておくれ。

触って確かめさせなくてもいいんだよ。

俺は十分、トウコちゃんが可愛いってことを知ってるから。

「んう……………いい、のに」

不満そうに口をとがらせない。

それで、どうしたの。

服を見せるためだけに、こんな朝から来たわけじゃないんだろう？

「うん、あのね、アララギ博士が、お昼にポケモンをくれるってー！」

おお。

ということは、トウコちゃんたちも初ポケモンゲットだぜー、と。

「うん！ だから、おにいちゃんにも、見に来てほしくって！」
よかったな、トウコちゃん。

よっぽど嬉しいんだなあ。
久しぶりにトウコちゃんの大きな声聞いたよ。

そうか、今日がトウコちゃんの旅立ちの日になるんだなあ。

「うん。お外は、怖いけど……でも、がんばる、から！ わたしも、おにいちゃんみたいに、なりたい、から！」

俺みたいに、か。

望みはもつと高く持った方がいいよ、トウコちゃん。

俺なんてその日暮らしのダメ男だぜ。

「違う、よ！ おにいちゃんはずごい、よ！ だからわたしも、旅をして、色んな事を見て、知って、感じて……」

そうやって、おつきくならないと、おにいちゃんの隣にいる、資格なんて、ない、の！」

おいおい、過大評価し過ぎだよ。

俺はそんな凄い奴じゃないって。

「わたしは、おにいちゃんと、対等になりたい。あの人みたいに」

あの人……ああ、同期のことか。

俺と対等に、ね。

君はもう、とつくに俺なんかよりもまつとうな人間だぜ。羨ましくなるくらいに。

でもそんな決意を込めた目を向けられちゃあ、これ以上否定は出来ないな。

頑張れ、トウコちゃん。

色々言いたいことはあるけども、旅することは素敵なことだっていうのは、間違いない。

きれいなものも、よくないものも、一杯見ることになる。

その全部が、君を育てる肥やしになるんだ。

人生の先輩としてアドバイスするなら、一言だけ。

楽しんでおいで。

「はい——」

真つ直ぐに顔を上げて、トウコちゃんは頷いた。
真つ白で、邪気の無い、純粹な瞳。

強制的にトレーナーの道を進まされることになる、それはきつと不幸だ——などと、何故思ったのだろうか。

この子は大丈夫だと確信できる。

いや、そんなことはずっと前から解っていたことだ。

俺の勝手な嫌悪感で反対していたに過ぎない、ということか。

本当に、アララギさん、俺はどうしようもない男です。あなたは全部解っていたんですね。

まだ小さなつぼみが、きつと大輪の花を咲かせることを。

「ね、おにいちゃん、いっこっ?」

ああ、わかったわかった。

引つ張らなくてもいいってば。

ほら、帽子かぶって。

火の用心と戸締りしてくるから、先に外で待っててね。

「バーニング」

おい、どうしたポチ。

トウコちゃんがいなくなっと思ったら、急に出て来て。

何だよその熱視線は。

「モエルーワ……」

何だ。何故嬉しそうに頭をぐりぐり押し付けてくる。

はあ? 格好良かったって?

変な奴だな、お前は。美意識がぶつとんでるんじゃないのか。

ほら、さつさと石に戻れよ。

電気よし、ガスよし、窓のカギよしと。

お待たせ、トウコちゃん。

うん、その格好にも慣れたようでよかったよ。

外に出ても堂々と出来ていて、ってどうしたの、うずくまっちゃつて。

「ひ——」

ひ?

「ひゃああああ．．．．．」

．．．．．忘れてたのか。

おいポチ、初めに言っておくぞ。

何も言うなよ。

「モ．．．．．ルーワツ!？」

甘い。

さてそんなこんなで、トウコちゃんが人目に触れないよう抱き上げながら、シラカワ家到着。

ポケモンとの対面はギャラリーが居ない方がいいとのこと、階下にてトウコママに淹れてもらったお茶を飲みつつ、待っているのがあった。

「ふふ、うちの子ももうポケモンを持つ歳になったのね。時が経つのもって早いわよねえ。クロイ君が旅に出たのがついこの前に感じるもの」

はは、俺が旅に出たのはトウコちゃんが産まれる前じゃないですか。

「もう10年以上も前になるのよね。あの子が産まれて、クロイ君がこの町に帰ってきて、それで」

またすぐに俺がこの町を出た、と。

それから今まではシンオウやハウエンとイツシユとを行ったり来たり、ですからね。

顔を合わせる機会が少なくなったものだから、余計に時間の流れが早く感じるのかも。

「クロイ君たら、会うたびにかっこよくなっちゃって困っちゃうわ。トウコも大きくなってんだけど、引っ込み思案はいつまで経っても治らないんだから。」

服も地味なのしか着ないし、もう、女の子を産んだかいがないっただけ

それで形から入って引っ込み思案を治そうとあんな服を着せたんですね。

トウコちゃんがかぶってた帽子って、俺の帽子の色違いですか？

あれってシンオウ地方のフレンドリショップ限定の帽子だったはずじゃあ。

「パパに送ってもらったのよー。あ、クロイ君、いかりまんじゅうのおかわりいかが？ いっぱいあるから、持って帰ってもいいからね」
ありがとうございます。

頂きます。

「でも効果はあったみたいね。髪をアップにするだけで外じゃ一歩も歩けなくなるような子があんなに変わるなんて、びっくりしたわ。本当、時が経つのが早いわよね。」

それとも君のおかげなのかな？」

トウコちゃんが成長したんですよ、それは。

……それに、あの子が人の目を嫌うようになったのは、俺のせいですから。

そんなに長い間一緒にいたわけでもないのに、俺に懐いちゃって。俺が帰って来る度にいつも後ろをくっついて歩いてたもんだから、一緒に敵意の視線に晒されることになって……。

本当に、申し訳ないと思っています。

「あらあら、頭なんか下げなくてもいいのよ。あの子は賢い子だから、本当に怖かったら自分から離れていくわ。それでもあなたと一緒にいたってことは、ね？」

あなたの事を心から信頼していたからよ」
だといいんですが。

「あの子はもう、あなたの後ろをついて行くだけじゃ満足出来なくなつたのよ。掛け足で走って横に並びたいって、そう言ってたわ。それが旅をする理由なんだって。」

母親として妬けちやうわよ、もう」

あの子もママさんも俺のこと勘違いしてますっつてば。

しかし上、騒がしいですねえ。

注意しなくてもいいんですか？

「いいのいいの！ にぎやかなのはいいことだわ。思い出しちゃうなー、初めてのポケモン勝負」

です。ねえ。

俺の時は粛々と終ってしまいました。

トゲキツス強すぎでしたもん。

昔はポケモンを貰える制度なんてありませんでしたから、家付きのポケモンか自力で捕まえたのを連れていくしかなかったです。

親父から貰ったたまごを自分で温めて孵して、育てて、で気が付いたら進化しまくっちゃってましたからね。

初バトルが鍛えまくったトゲキツスでとかもうね。

トレーナー経験の無さとかもう関係ありませんでした。

いやー、当時のむしとり少年達には随分お世話になりました。

おこづかい的な意味で。

「そういえばあなたのとゲキツス、最近見ないわね。どうしたの？」

ああ、ちよつと前まで同期に貸してたんですよ。今は返してもらってませんが。

あつちこつち地方を巡りたいから、そらをとぶを覚えたポケモンを貸してほしいって言うんで。

どうもチャンピオン防衛戦で使ったとか何とか、噂で聞きましたけど。

しかも相手はトウゴちゃんくらいの子供だとか。大人気ないっただら。

まあでもトゲキツスには全力をださないように厳命してましたから、さつくりやられた振りをしたみたいです。

俺のとゲキツスがあんな弱いわけないでしょ、って恨み事を延々電話口で聞かされましたよ。

ぐすぐす泣きながら話すもんだから何言ってるかわけわかんないし。

どうせ挑戦者の前じゃあ格好つけて、クールな出来る女を装ってたんでしょね。

負けず嫌いですからね、あいつ。

俺のポケモンを切り札にするとか。チャンピオン様のくせに、初めから他力本願かよつての。

相手は伝説級のポケモンを持ってたんだから、それぐらいしないと勝てる訳ないとか、何とか。

やっぱりよく解らなかつたです。

「ああ、あの綺麗な娘さんね。確か、旅先で出会って、そのまま同じ大
学に入ったっていう。強敵よね……」

いや、あんまり強くはないですよ。

「あなたにとってはそうでしょうね。ほら、よく言うじゃないの。先
にそうなっちゃった方が負けなんだって。」

ふふ、でも懐かしいわ、私も旅の途中にパパと出会ったのよね」

いや、お二人のロマンスは何度も聞きましたので、もういいです。

「あらそう、残念。ねえ、クロイ君。あなたのことだから、トウコが旅
立ってすぐにここを離れるつもりなんでしょうけれど、もしも何処か
でトウコと会うことがあったなら」

ええ、その時はもちろん連絡しますよ。

やっぱり、心配ですものね。

しかしまんじゅう美味いっすねえ。

お茶がこわくなつてしかたないです。

あれ、反対でしたっけ？

「いやいや、そうじゃなくなつて。もしトウコと会うことがあったら、そ
の時にちよつとでもあの子が魅力的に見えたなら、家の娘を貰つてく
れないかしら？」

ぶふーっ！

げほっ、げえっほ、ごふほ！

ちよ、ちよつとママさん、何を言つて！

「私は本気よ？ 言っておきますけれど、あの子にもそういう知識は
ちゃんとありますからね？」

そ、そういう、とは？

「あの子はまだ子供だ、なんてことは言わないでちょうだいね。」

大事な一人娘を旅させるんですもの。性教育とか、ちゃんと学ばせ
てるに決まっているでしょう。一人でふらふらと危ない場所に行つ
て、泣く羽目になつたら遅いのよ」

あー、小六大人法……そつか、トウコちゃんももう小学校卒業かあ。

この国に限った話しではないが、義務教育は10歳までと法律で定められている。

中学校は希望者のみが受験し、進学するというのが学業の枠組みである。

そこから先の高校、大学となれば、もうエリートコース。将来は大企業への就職か、研究職へ進むことが約束されたようなものだ。

大半の子ども達は、小学校卒業と同時に、つまりは10歳になるとポケモンの所持免許およびその『わざ』の公道での行使資格を取得し、旅に出る。

そうして成長し、地元に戻るとというのが一般的な『こども』の成長過程なのだ。

かくいう自分もまた、広く一般的な子どもの成長を辿っている。

異なるのは、地元には帰らなかったというだけ。

さて、この小六大人法……正式名称はやたら小難しい感じが並べ立てられているので略するが、憲法の前文にこう書いてある。

小学校卒業をもって、成人として扱う。

これが曲者である。

酒やタバコは身体への害が、などと医学的観点から規制はかけられるが、それ以外の、本人の意思に任せる部分は全て成人と等しい権利を有することとなるのだ。

たとえば、就職、たとえば、専門分野での研究活動。

本来は高等教育を受けた者しか潜れない狭き門であるが、一芸入試ならぬ、秀でた才があると認められれば、その時点で社会的地位を獲得できてしまえるのだ。

これがこの国、この世界の普通であり当然であるのだから、何とも言うことはないが、『大人初心者』が急にポンと権利を投げ渡されて、挫折や周囲を巻き込んだ失敗、よくない拗れ方をしないと誰が言えよう。

それが、自らの力が認められてのものであればなお、である。

特に顕著な問題がある。

恋愛、である。

自由意志による恋愛は、誰にも止められることができない。

その後にくる、性行為も。

法律としては、やはり二十台近くでなければ性行為を行うことは犯罪とするとは定められている。

だが、誰が止められよう。

彼女達の、彼等の、大人初心者達の恋心を。

『かれら』は子どもの純粋な心のまま、大人の恋愛をしてしまう。それが許されてしまう基礎がある。

自分が選んだ道だから、という免罪符が、かれらの罪悪感を取り払ってしまおう。

その結果が、十台前半の妊娠率の爆発的增加、である。

社会問題である。だが、それに誰も触れようとはしない。

公然の、暗黙の了解となっているのだ。

トウコの母が若く見えるのは、実際に若いからである。この女性もまた、十台前半で妊娠出産を経験した数多くの大人初心者の人だった。

そして、選んだ男もポケモンブリーダー。半ば捨てられたような、半母子家庭である。別段珍しくもない、よくある普通の家庭環境だった。

だが、思うところはあるのだろう。

こうしてこちらを見る目には、親心と共に、どこか必死さも含まれている。

「だったらちゃんとした人に貰ってもらうのが、親としては安心できるのだけれど」

そ、そういうのはチェレンに……。

「うーん、チェレン君も悪い子じゃあないんだけどね。あの子はトウコを好いていてくれるし。」

知ってる？ チェレン君が強くなりたいたい理由って、あなたを超えてトウコを振り向かせるためなのよ。

でもチェレン君をプッシュしたら、ベルちゃんがかわいそうだわ。あの三人の中ではベルちゃんが一番大人かもね。少しも顔に出そうとしないもの。いじらしいわあ」

まあ、それは俺も知っていますけれども。

でもやっぱりトウコちゃんの意味がですね。

「それは当然よ。最終的に決めるのはあの子。だから、無理矢理は駄目よ？ ただちよつとだけ、積極的になってもらいたいなあって」
積極的で、どんなですか……。

一緒にライモンの観覧車に乗るとか？

「いいわねえ、ロマンチック！ きらめく夜景、近づく二人の距離、重なる影……ひゃー！」

わー、やっぱりトウコちゃんのママだー。

「今までみたいに妹としてじゃなく、女の子として扱ってあげて欲しいってこと。」

トウコはね、クロイ君のことが大好きなのよ。これがあの子の初恋なんだから、終るにしても、成就するにしても、綺麗な思い出にしてあげたいの」

そう、ですか。

あの子が俺に向ける感情が恋だか何だかは解りませんが、憧れを抱いているってことくらいは解ります。

でも、トウコちゃんが旅先で俺と会うってことは、俺の色んな面を見ることになるってことで、そうになったら直に愛想を尽かしてしまうと思いますよ。

俺のあんまりな駄目さ加減に。

「それもあの子が決めること。まあ、あの子があなたを想っているっていうのも、あなたの言う通りに私の思い込みかもしれないね。親でも子の心は全部読めないもの。」

でもね、クロイ君、そういうこともあるかもしれないって、心に留めておいて、ね？」

そうまで言われたら頷くしかありませんよ。
解りました。

何をして上げられるかは、俺自身さっぱり解りませんが。

でもトウコちゃんの成長を認めて、変わっていくトウコちゃんをちゃんと受けとめてやるっていうのは、約束します。

「ありがとう、クロイ君。それでこそあの人たちの息子さんだわ」
ありがとうございます。

そう言ってくださると、助かります。

上も静かになったようですね。

あ、下りて来ますよ。

「んう、おかあさん、ごめんなさい…………お部屋、よごしちゃった」

「いいのいいの、元気が一番！ 片付けは私がやっておくから、気にしないでもいいのよ」

トウコちゃんに続いて、ベルちゃんとチエレンの姿も。

アララギ博士が送ってくれたプレゼントボックス。

その中におさめられた三匹のポケモンを、三人で分け合っていたのだ。

旅に出るために、パートナーを選んでいたのである。

それで皆、どのポケモンを選んだんだ？

「わたしは、この子。おいで、ポカブ」

「ポカブー！」

「わたしはこの子だよ。来て、ツタージャー！」

「ツタージャーー！」

「僕はこいつを。来いっ、ミジユマル！」

「ミジユミージャーー！」

うん、三人のイメージにぴったりのパートナーだ。

三人とも、いい子を選んだな。

大事にしてやれよ。

「はいっ！」

と、三人の元気な返事。

うんうん、良い門出になりそうだ。

それで、旅に出るのはいつにするんだ？

とりあえず今日は休んで、明日にするか？

「今日！」

これも三人の返事。

やっぱり待ち切れないよな。

「でもわたしはパパとママの説得があるから、ちよつと遅くなるかも」

ベルちゃんのご両親か。

パパさんの方がちよつと手ごわそうだな。

俺も口添えしようか？

「ううん、ありがとうクロにいさん。でもいいの。これは私の旅なんだから、私が自分でやらないと、ね！」

そうかい。

君はおつとりとした所があるけれど、それでも大事なことはちゃんと解っている子だ。

大丈夫。

きつと色んな夢を見つけられるさ。

「はい！ ありがとうクロにいさん！」

じゃあ行ってきます、とさつそく両親の説得に向けて出て行くベルちゃん。

「さて、次は僕かな。それじゃあお先に失礼するよ。早さとは強さだからね。この町を出るのは僕が一番になるのかな。

これも運命、ということかな。ああ、声が聞こえるよ。大地が僕に強くなれとささやいている」

カルマ（運命）って、ガイア（大地）って、お前な。

まあいいや。

お前にや何も言わんでも、何とでもやっていけるだろ。

「クロイさん……いや、あえて言おう！ 強敵と！ 笑っていられるのも今の内だけだ。誓おう、今ここに！」

僕は最強の称号を手にし、あなたを打ち滅ぼしてみせんと！ その時まで……さらばだ！ せいぜい腕が落ちないように、磨いて

おくがいい！」

駄目だこいつ。

こじらせてやがる。

おーい誰か、なんでもなおし持ってないかー。

「おにい、ちゃん……」

最後はトウコちゃんか。

うん、お別れはもう済ませちゃったようなものだよな。

はは、この手触りともしばらくお別れか。

ちつとも帰ってこなかった俺がいうのも何だけど、ちよつぴり寂しいよ。

「うん……うんー！」

ぎゆう、と飛び込んで来るトウコちゃん。

ほいキャツチ。

あのね、と胸に顔を埋めたまま、言葉は続く。

「がんばる、から。すぐに追いつく、から。だから……！」

ああ、待ってる。

「うんっ！　じゃあ、いつてきます！　おにいちゃん！　おかあさん！」

行ってらっしゃい、トウコちゃん。

少しだけ赤くなった目を隠すように帽子をかぶり、手を振って駆けだしていく。

今日もいい天気だ。

三人の旅路も、きつとこんな天気のように、明るい光が差しているに違いない。

「ふふふ、私母親なのに、娘から別れの言葉ももらえないとか、どう思うクロイ君？　ねえ、どう思う？」

小さくつても女つてことなのね……まったく、親の顔が見たいわ。私か！　ううう、クロイくん、とーこがくれたー」

迫ってくるトウコママ。

あわわわわ、じゃ、じゃあ俺もこれで！

失礼しましたー。

あ、いかりまんじゅうありがとうございますー。またおじやましますー。

と捨て台詞を残し、ダツシユで帰宅。
流石に人妻は抱き締められん。

「ンバーニンガガッ！」

おう、ポチ。

お前も気分が良いか。俺もさ。

今日はオールでDVD見ようぜ。

『ピカチュウカイリユウヤドランピジョンコダツクコラツタズバツト
ギヤロツプ』

あ、わるい。

携帯に着信入った。

誰だ………うげ。

出たくないけど、無視しちゃだめだよなあ。

もしもし、クロイです。

『私だ、ジャガだ。すまないな、クロイ君。急に電話を掛けて』

いえ、大丈夫です。

それで市長、今回はどんな御用件でしょうか？

『話が早くて助かる。君も知つての通り、リーグが建っている土地は
ソウリユウシテイ預かりとなっている。便宜上は同じ市内、というこ
とだ。』

運営はポケモン公式リーグが行うのだが、土地の管理責任は私の管
轄でね。実は建物の改修工事の際に、リーグの周囲に巨大な空洞が見
つかってしまつてな。

君に調査を依頼したいのだ』

ええつと、お請けするのはやぶさかではないのですが。

俺でなくとも、適任者は大勢いるのでは？

『うむ、それがだな、クロイ君。このイツシユ地方は他地方に比べ、埋
没した遺跡の数が多いことで有名だ。』

現リーグも遺跡の上に建っているようなもの、というのも釈迦に説
法か。

5年前のリーグ開催地の移動の際、地下調査と発掘によって埋没遺
跡の価値が低いため移動させても問題なし、と判断した君には。

調査団のリーダーであつた君には。責任者であつた君には』
いや待て。

待つてください。

リーダーとか、何の話です？

俺は一調査員としてしか関わつてなかつたはずですから。

それにゴーサインは出してないですよ。

最後まで反対してました。

『当時のソウリユウシティはカノコタウンと同じ憂き目にあつていてな。何としても人を呼び込みたかつたのだよ』

いや、それって……まさか。

『書類上では初めから君が責任者だな』

い、いやいやいや！

それはないですって！

なんだよそれ、何か問題が見つかったら、俺が全部責任取らないといけないってことじゃないか！

『全部ではなく、7割程度だ。後の3割は私の任命責任ということだ、市長を辞することになるだろうが、それでもよかろう。』

あれだけ大掛かりな施設を今更動かせんよ。ソウリユウシティを守つただけで私は満足だ。

無所属だつた君は、我々にとつてとても都合のよい人材だつたのだ。わっはっは』

わっはっは、じゃねえよ！

なんだそりや、ヤドンの尻尾切りじゃないか！

さらつと何しくさつてくれとんじやい、このしゃくれが！

何だよその下顎は！

ウカムルバスか！

砕くぞ！

『ダブルリアットで迎撃してくれる。ソウリユウシティを救うには私と、そしてもう一人の犠牲が必要だつたのだ。そしてその者は有能であればある程いい。』

君しかいなかったのだよ。諦めてくれ』

この・・・っ!

汚いなさすが政治家きたない!

『そう怒るな。君が10代の時から色々ともみ消してきてやっただろうに。共犯者となるのは今更のことだ。』

それに、我々の生き残る道もある。発見された空洞のことだが、これが少しずつ広がっているらしくてな。それを調べるのが今回の依頼、という訳だ。理解したかね』

もう、いいですよ・・・。

やりますよやらせてくださいよ。

解りましたよ。

空洞が広がっている原因が地質的な問題であるのか、ポケモン被害なのか、あるいは人為的なものであるのかを調べろ、ってことですね。それでジャガさんは、その空洞が人為的なものであると踏んだと。人為的なものなら、リーグの周りにそんなものを掘るなんて、穏やかじゃないですね。

国に喧嘩を売っているようなもんだ。

集団戦のバトルを視野に入れたとしたら、イツシユで使える調査員は、確かに俺だけだ。

『うむ、頼んだぞ』

何だろう。

すごく納得いかない。

『かけひきというものはそんなものだ。私の持論だが、かけひきとは相手を負かすためのものではなく、双方の落とし所を探すためのものだと思っているがね。』

政治家に限ってのことかもしれないが』

俺は政治家じゃないんで、解らないですよそんなもの。

『今から学んでおいたほうが将来役に立つぞ。私の後を継いで、市長になった時にな。アイリスが君が来るのを心待ちにしている』

あー、俺のガブリアスはあるの子のお気にでしたからね。

じゃあ、今直に飛んでいくんで、よろしくお願いします。

『ああ、頼んだ。リーグの方に直接行ってくれ。すまんが私は職務が

あるので、市長室から離れることは出来んだ。詳しい話はアデクに聞くように。それではな』

ピツ、と通話終了。

「あああ、なんて厄介なことを……」。

今までのあの人の依頼とか、100%荒事だったじゃないか。

ええい、ちくしょうめ、行くしかないじゃないか。

ポチ、支度しろ。

少し遠出をするぞ。

「ニンガー？」

どこに行くのかって？

ソウリユウシテイが北、イツシユ地方の最北部。

最強を目指すトレーナー達が集う場所。

トウコちゃん達の旅の終着点。

チャンピオンリーグさ——。

ぼけもん黒白6

『黒白：12日目』

替えの服よし、パンツよし、歯ブラシよし、水と食料よし。全部よし、と。

我ながら旅支度も手慣れたもんだ。

おーい、ポチ。

準備できたかー。

「ルーワー」

何を抱えてるんだ……と、そうか。
危ない危ない。

DVDプレーヤーとBOX一式を忘れるところだった。
ありがとな、忘れてたよ。

後は毎週録画予約をデッキに打ち込んで。ほい完成。

なんだ、ポチ。

その計画通りーみたいな悪い笑い顔は。
順調に染まりつつあると？ 何にだよ。

気にするなっつか。まあいいけどよ。
さ、もう忘れ物はないな。

戸締まりと火の用心だけして、アララギさん達にはあいさつはすませてあるから、よし、出発だ。

頼んだぞトゲキツス。

そらをと——どうした、ポチ？

急に石から出てきて。

何で入念なアップを始めちゃってるの？
そらをとぶなら自分の役目、だつて？

ええー……。

「ババババーニンガー！ バーニンガあ！」
うるせえ。

ええい、泣くなうっとうしい。

袖を噛むなよお馬鹿たり。
伸びる伸びる。袖が伸びる。

よだれが染みて冷たくなってきたんですけど。
そろそろ離してくれませんかねえ。

ぐぎぎ、じゃねえよ。

背中に乗るまで離さねえって、バカか。

お前は何と戦ってるんだ。

離せってコラ。離しやがれ。離せ。

……クロイのからてチョーツプ。

「キャン、キャン、キャン！」

うるせえ。

いわくどき要らずのローキックじゃなかっただけありがたいと思え。

お前に乗らないっていうのはな、何も意地悪して言ってるんじゃないぞ。

『そらをとぶ』っていう技がどういうものか、お前知らないだろ。
体の仕組みから空を飛べるポケモンっていうのは、無数に存在してる。

羽が生えてる奴は大抵が空を飛べるさ。

でもそれで人を乗せて飛べるか、っていうのなら、話は別だ。

ポケモンの馬力が足りないとか、そういうことを言ってるんじゃない。むしろ逆だ。

人間の方が耐えられないんだ。

マッハで空を飛ぶ奴なんかザラに居るんだぜ。

俺のガブリアスもそうだな。

そんなの上に乗ってみろ。空気抵抗とかで吹っ飛ばすっつーの。

そこで、だ。人を乗せるために安全な気流操作や速度調整をポケモンに覚えさせるのが、『そらをとぶ』って技なんだ。

身体の仕事みとして音速超えちゃうような奴らには、それでも無理なんだけだな。

ポケモンにとって自分の力を制限させる難易度の高い技だ。当然、

乗る方にだって技術が必要で。

各地のジムリーダーが挑戦者の力量を見て、十分にポケモンを使いこなしてるなつてのを判断して、レクチャーした後市役所に登録して、そこで初めて使えるようになるよ。

ジムバッチが免許替りつてことだな。

おわかりか？

「ニンガー？」

それでも乗ってる奴はいるだろう、つてまあ、そうだけだよ。

昔は俺もガブリアスに跨ってブイブイいわしてたけどさ。無免許ならぬ無バッジで。

あの時は悪の秘密結社だか何だか一戦やらかしててな。奴ら各地で面倒事を起こすもんだから、ちんたら飛んでたら間に合わないんだよ。

そらをとぶは遅いんだよね。

でも今の俺にはもう、フウロみたいな度胸は無いよ。

いや本当本当。

10代の頃みたいな無茶はしません出来ません。

身体硬いし。

怪我怖いし。

お金ないし。

もてないし。

「バーニンガ……」

そんな顔にしても駄目なものは駄目だ。

駄目だって。

駄目だったら。

「……シユボ」

ぐ、くっ。

ゆ、ゆっくり、飛ぶんだったら、乗ってやっても……いい、こともなくは、ない、ぞ。

ええい、解った解った、俺の負けだ。

乗せてつてくれ。

一緒に行こうぜ。

「ルーワ！ ルーワ！」

そんなにすりよるなって。

ほら背中に乗るから、もそつと頭下げろ。

いいか、くれぐれも安全運転、安全速度で頼むぞ。

はいはい、尻尾ふらなくていいから。ぼうぎよが下がる。

よっこらせ。

……あれ？

なあ、何かお前の尻尾、ジェット機のエンジンみたく赤くなってるんだけど。

「モ エ ルーワ！」

おい、待て、待ってくれ。

それ以上シユインシユインいわすな。

そんなに漲らせなくてもいいい。

止めろよ。

止めろつて。

頼むから。

いや、前振りじゃねえよこのや——。

「バーニン……ガッ！」

ろ、う——ッ！

ちよ、地面遠——！ 空高——！?

「ガガガッ、ガガガ、バーニングー。ガガッ、ガガガガ、バーニングー」

ゆうしやお——！

はや——やめ——！

息が——！

「ルールル、ルールル、ルールル、ルールル、ワーワーワーワーワー」

てつこ——！

あ、やば——。

これ、もう——。

し——ぬ——。

空気が口に入ってしやべれな——。

「ガッ！」

——クロイは、めのまえが、まっくらになった！

『黒白：13日目』

クロイのカラテチョーopp。

カラテチョーopp。

カラテチョーopp。

ローキョーopp。

にどげりー。

かわらわりやあー。

「キャン、キャン、キャン！」

お前何なの？

馬鹿なの？

ポチなの？

死ぬの？

あんだけゆっくり飛べって言っただろ。

それがどうして光速を超えてマツハでかつとんじやってんだよ。

かつとベマグナムー、じゃねえよ気持ちよさそうにしてやがって。

トルネード中マジで俺は死にそうだったんだぞ。

特注のコート着てなかったら空気抵抗で即死だったっての。

まったく。

「ニンガ………?」

いいよ、もう。

怒ってないよ。

「ルーワー！」

こここ、この馬鹿犬！

嬉しそうにして、調子に乗るんじゃないぞ！

勘違いするなよ！ これ以上話を続けたら、誰かに見つかつちまう

からであってな……。

こら、なんだそのにやけ顔は。お前絶対何か勘違いしてるだろポチ。

ほれ、さっさと軽石に戻りやがれ。

まったく、よりによつてリーグの入口なんかに着けやがって。

「よおーッス！ 未来のチャンピオン、じゃなかった。へへ、ジム時代の癖が抜けなくなつてね。では新ためまして。

ここはチャンピオンリーグ。純粹に強さのみを示す場所……」
ほら、ガイドさん来ちやつたよ。

すんませーん、ジャガ市長からの依頼で派遣された者なんですけども。

「挑戦者よ！ 己の力を証明するために、四天王へと挑むがいい！ 彼等を打倒したその時にこそ、王者への道は拓かれるだろう！」

聞いてねえよこの人。

目がヤベエ。

チエレンと同じ臭いがしやがる。

「二度足を踏み入れたら、勝ち残るか、敗北するかまで二度と出ることは適わない。覚悟はいいか？」

いや、だからさあ。

カッコイイBGMとか要らないから。

鳴らすなつて。

賑やかしは要らないんだつてば。スピーカを止めろ。

「へへ、どうだい？ 俺のスピーチ、中々良かったろ。寝ずに考えたんだぜ。」

実はさ、今日が俺がここに配属されて初めての出勤日なんだよ。だから、初めて見送るトレーナーは、兄ちゃんなんだな。

おいしい水をやることは出来ないけどよ、応援してるぜ兄ちゃん！」

いや、だから。

ああ断り難いなあ。違うんだつてのに。

そんな背中押さないで、ゲート潜ったら自動登録されちゃうつて。

あー……やっちゃったよ。

「じゃあな未来のチャンピオン。武運を祈る！」

あはは、がんばります……。

あちやー、鉄格子上がっちゃったよ。もう戻れないぞ、これ。

トレーナーカードに内蔵されたチップが記録する個人情報。

そいつがリーグに足を踏み入れた瞬間に、リーグ挑戦に同意したとみなされ、ソウリュウの市役所経由で国のデータベースに送られる。

入口のガイドさんが言ってた二度と戻れないっていうのは、ここまで来て試合放棄したらトレーナー資格を破棄するぞ、という遠回しな脅しでもあるのだ。

それはイコール、数年間のポケモン所持禁止を言い渡されるのに等しい。

さもあらん。

トレーナーの頂点を決めるリーグでの戦闘データは、様々な分野に利用される。

次世代のトレーナー育成のためのデータ。

道具、わざマシンのアップデートのためのデータ。

この場に集うトップクラスのトレーナーのデータは、その全てが国益に直結しているのだ。

そして一番大きい比重を占めるのが……軍事方面へのデータ流用である。

近年、隣国半島での国際情勢が、どうもキナ臭い。

俺は軍事衝突も時間の問題だと見ているが、さて。

ポケモンを生物資源であると捉えている国は、当然軍事力にもポケモンを利用して。

だから国防の名目で、今最も求められているデータが、トップクラスのトレーナーに育てられたトップレベルのポケモンの戦闘データなのである。

そんな重要なデータ採取の場で、舐めたマネをしたら……. わかっているな？

と、そういうことなのだ。

押し切られてしまったが、俺の個人情報には既に送信されてしまっただろう。

俺が旅をしていた頃はトレーナーカードのチップ内蔵化は配備されてなかったから、殿堂入り辞退とか馬鹿なことが許されたんだけども。

今回はジャガさんの権力で挑戦記録を抹消してもらったが、今回はそもいかないだろう。

リアルタイムでデータ送信されちゃったからな。

何でもかんでも自動化したらいいってもんじゃないなあ、本当。仕方ない、適当に流すか。

奥の地質を見たいから、四天王は攻略しないとだな。

どうせアデクさんは居ないだろうし、チャンピオンとは後日再戦だとかなんだとかでうやむやに出来るだろ。

二度手間なのは我慢しよう。

とりあえず最初はアイツのところにしようかな。

第一の塔へレッツツラゴー。

「よく来たな、挑戦者よ……」

ベルコンに乗せられたゴンドラに身を預け、らせん状に塔を登っていくことしばらく。

頂上にはライトに照らされたプロレスリングが。

その中心に、金髪の髪を短く刈り上げた、道着を身に着けた色黒の巨漢が、仁王立ちに背を向けていた。

「まず初めに俺を選んだこと、その勇気を褒めてやろう。だが、愚かな選択であつたと言わざるを得まい。」

何故ならば、お前のリーグ戦はこれが最初にして最後となるのだから。そう、この俺が終止符を打つのである！」

巨漢が振り向く。

突き付けられた指は、拳ダコで武骨に節くれ立っていた。

ポケモンに対してだけでなく、自身をも厳しく鍛え上げるのは、かくとうタイプ使いによく見られる傾向である。

ポリシーがあるというのは素晴らしいものだ。

俺なんか弱点突かれるのが怖くてタイプをバラバラにしてあるし。まあ、それくらい度胸がないと、四天王は務まらないということか。よしんばジムリーダーなんて。

土台無理な話だったのさ。

「掛かってくるがいい！ 挑戦、者……よ……よ……よ……」

おいーツス、レンブ。

ひさしぶりだなあ。俺のこと覚えてる？

「お、おま、おまままま、おま、お前、お前は！」

おいおい、四天王だろ。もつとはつきり喋れよ。

なんだよ、そんなに震えて。

「お前は、クロイ——！」

おう、クロイさんだぞ。

最後に会ったのはリーグが移ってすぐ頃だったから、5年振りか。

いやあ、全然変わってないなお前さん。

相変わらず頭頂部がお寂しいようで。

「これはそういう髪型なのだ！ いやそんなことはいい！ お前が何

故ここにいる!？」

いやー、聞いてくれよー。

ジャガさんから地質調査頼まれちゃってさー。

「嘘を吐け！ 貴様リーグ戦は参加しないのではなかったか！」

それがさ、不手際で自動登録されちゃって。

登録取り消しの手続きするのも面倒だし、後でなんかかんか言われ

るより適当に流しておいたほうがいいかなと。

たぶんすぐ終わるでしょ。

「すぐ終わる、だと？ 俺を舐めるのも大概にしろよ。貴様に敗北し

て以来、俺は己を律し、鍛え上げて来たのだ。俺はもはや、あの時の

俺ではない！」

あー、懐かしいなあ。

実はレンブ達とは既に対戦済みだったりする。

リーグが移される際、新四天王の実力を計って欲しいとアデクさんに連れられ、リーグさながらの総当たり戦をやらされていたのであつ

た。

以下、5年前のダイジェスト。

クロイ『トゲキツス、エアスラツシユ×7（がんじょう分込み）だ！』レンブ『ぐわわーっ！』

クロイ『トゲキーツス！はどうだん×6！』ギーなんとか

『アツ——！』

クロイ『エアスラエアスラ×6』アデク『やめろオ！』

以上回想終わり。

トゲキツス無双余裕だった。

四天王は犠牲になったのだ……税金対策という名の犠牲にな……。

後の二人はバトルよりも個性の方が強かったからなあ。そつちばかり印象に残ってて、バトル内容は覚えてないや。

実際問題、ジムリーダーや四天王になってしまったトレーナーは国家公務員扱いとなり、バトル相手を探すのに不自由するという。

ジムリーダーは別だが、四天王ともなると厳密なバトル管理がされ、私的なバトルは後で嚴重注意をされてしまうとか何とか。

それは彼等の扱うポケモンの飼育費や旅費や道具代、バトルデータの解析などが税金でもって賄われているからである。

誰だって自分たちの払った税金が、アデクさんのように好き勝手全国を歩き回ってるチャンピオン達の飲み食い代に使われているなどと知っては、いい顔をしないだろう。

そもそもイツシユ地方は世界有数の遺跡埋没地域で、遺跡保護のために金を使わされまくってて、財政が火炎車なんだし。

お金の問題では非常にシビアな地域なのだ。

ジムリーダーやチャンピオン達の品格をも問われる時代である。

マスコミに誘導された世間のパッシングを受けたら、イツシユリーグはもうお終いだ。

本当、アデクさんは何をしているのやら。

そうして、四天王達のストレス解消と戦力維持のため、俺のようなフリーでいて四天王に迫る実力を持った、そして勝敗に興味の無いト

レーナーくずれが「サンドバック」として呼ばれるのだとか。
ようは、体のいい練習台である。

腕が鈍らないよう対戦相手を招集するのでさえ、四天王クラスに適うトレーナーともなると、謝礼金が数百万から千万単位でかかるか。

恩だか借りだとかで口ハで戦ってくれる骨のある奴がいたら、それほど便利な奴はないだろうさ。

呼ばれる方はたまったものではないのだけれど。

「ギーマなど、お前に負けて寝込んでしまったのだぞ！ 今ですらあいつは貴様の悪夢にうなされることがあると云っていた！」

ギー、誰？

え、そんな奴居たっけ？

そんな酷いことした記憶はないんだけどなあ。

なんだろう。

完全試合しちやっただかかな。

「ギーマ……不憫な奴。ええい、ゆくぞクロイ！ ゴーマの仇だ！ そして俺の雪辱を晴らすために！ うおおおお！」

あー、やっぱりやる気なのね。暑苦しい奴だなあ。

適当に負けてやるつもりだったんだけど、まあ、ねえ。

しやんがね、頼んだぞトゲキツス。

「とげきーっすー！」

はは、お前はいつも可愛いなあ。

「とげきっすー？」

え？ もう本気を出してもいいのかって？

あ、そうか、俺の言い付けを守ってたのか。あいつに貸してた時から、俺の許可なく本気出すなって言い含めてあったもんな。

よし、いいぞ。おもつきりかましてやれ。

「チヨツギツ、プルルリリイイイイイイ……！」

おおう、やる気が顔に現れてるな。

カミソリの刃のような鋭い目付き。

猛禽類の翼のようなまゆ毛。

うんうん、お前はいつも凜々しいなあ。

「おい待て、何だそいつの顔は。本当にあの時のトゲキツスなのか？
いや、それは本当にトゲキツスなのか!？」

何って、どこからどう見てもトゲキツスだろうが。

あ、そうか。たぶんこれのせいで印象が変わったんだな。

ほら、首のところにスカーフが巻いてあるだろ？

俺のトゲキツスはさ、本気出す時はこれを巻くんだ。

今日は久しぶりに本気を出せるもんだから、すごい気合入ってるんだよ、きつと。

「確かにあの時にはそんなものは…….ならば本気ではなかったと…….いやそんなことはどうでもいい!」

「チョツギツ、プルルリリイイイイイイ…….」

「そんなトゲキツスがいてたまるか！ なぜ急にまゆ毛が生えた！

何処の暗殺者だそいつは!」

「チョツギツ、プルルリリイイイイイイ…….」

「Gか、Gなのか!？」

「チョツギツ、プルルリリイイイイイイ…….」

「うるさい!」

お前がうるせえよこの野郎。俺の台詞を取るんじゃない。

暗殺者て。

確かに後ろに立たれるのを極端に嫌うけども、それ以外は普通だぜ？

なあ、トゲキツス。

頭頂部オレンの実が何か言ってるけど気にするなよ。

「ぐっ、俺は負けん、負けんぞ！ 貴様にだけは絶対に！ うおおお

おお!」

「チョツギツ、プルルリリイイイイイイ…….」

そーれ、エアスラーツシュ。

ひるめーひるめー。



結果？

言わずもがな、ということだ。

こんな調子でトントン拍子に二人目も撃破したのであった、とは？ ギー……誰？

ええと、あー……ああ！ あの影の薄い奴！

俺が顔見せた途端に悲鳴上げてくれちゃってもう、失礼な。

うん、あいつね。

あいつは、うーん……正直、影が薄すぎて印象が……。

あ、いや、うん。そうそう、誰も居なかったんだよ！

不戦勝だったんだ、そう、不戦勝。

うん、ギーマなんて居なかった。

はっはっは、いやあラツキーだったなあ！ はっはっはっは！

勝因？

そうだなあ、うーん。

「チヨツギツ、プルルリリイイイイイ……」

ああ、トゲキツス、お前の言う通りだよ。

10%の才能と20%の努力、30%の臆病さと、残り40%は運だ、ってね。

こんなところでいいかな？

「はい、取材へのご協力、ありがとうございます」

あやや、と手帳片手に笑うゴチム調の服を着た女性。

ゴスロリというのだろうか。

おかつぱに切られた紫色の髪に、赤いツーポイントのメガネが良く似合っている。

「助かりましたよー。実は最近、ネタに困ってしまって。おかげで良い記事が書けそうです」

いえいえ、シキミ先生のお力添えが出来て光栄です。

「あ、あはは。シキミ先生だなんて、もう、恥ずかしいから止めてくださいよクロイさん」

そんな謙遜しなくても。

しかし、あの時はまだ駆けだしの無名作家だったつてのに、今となつちやあ先生だなんて呼ばれるくらいになつちやつて。

ファン第一号として鼻が高いよ。

でも何で雑誌のコラム枠なんてやつてるのさ。

そんなことしなくても、君は本を出してるじゃないか。

作家業一本に絞ってないのか？

「あはは、印税だけで食べていけたらいいんですけどね……」。四天王の本だから、つていう理由で買われるのが嫌だから、名前を変えて出版してるんです。

だから言うほど売れてないんですよ、私の本。リーグでのお給料は全部取材費や資料費にあててしまってますから、流石にそういうのを経費で落とすわけにもいきませんし。

その、私たちのお給料つて、普通のジム公務員の方々よりもほんの少し上なくらいで、だから作家を兼業したいなら色々手を出さないと……」

世知辛いな……。

ごめんな、俺が悪かったよ。

辛いこと聞いちゃったな。

「いえいえそんな！ 辛くても全部自分で選んだ道ですから」

その台詞、アデクさんに聞かせてやりたいよ本当。

でも羨ましいな。

そうやって一心に打ち込める何かがあるつて、尊敬するよ。

「そんなに凄い事じゃないですよ。それに、好きなことや趣味を仕事にするのつて、無理矢理やらされてるみたいで結局、嫌になつちやいますから。」

私も何度筆を折ろうと思った事か。

担当さんにはさっさと原稿を上げると急かされ、読者さん達には展

開を読まれなおかつそれを親切にも報告され、自分の納得のいくクオリティになるまで書直したいのに、切りは容赦なく迫り……。そんなくじけそうな時に私を支えてくれたのが、これなんです。これのおかげで、私は今までやってこれたんですよ」

これって、この手記のこと？
中身を見てもいいかな？

「はい、どうぞ。とは言っても、それは私のじゃないんですけれども。この道でやっていけるのかどうか迷っていた頃に、お恥ずかしながら自分探しの旅に行つたことがあります」

旅行中、サザナミタウンに立ち寄った時、そこで拾ったものなんです。交番に届けようにも、名前らしいものがどこにもありませんでした。あつたのはペンネームだけで」

サザナミ、ねえ。

とにかく中身を見てみようか。

ええと、なにになに。

『アナタの胸にダイビング出来ない、おくびようなワ・タ・シ。

ねえ、いつになったらワタシをフリーフォールしてくれるの？ 待ちきれないKOKOROはちきれそう……』

……あいたたたー。

なんだこれ。

一行目から凄まじい破壊力なんだが。

やべえ、二ページ目を見たら間違いなくひんしになる。

一体これの何処に勇気付けられたと。

ラフレシア臭がぶんぶんするんだけども。

「そんな、こんなにも素敵な描写ばかりなのに、クロイさんはこの踊るように綴られた文章に何も感じないんですか!？」

私は感じましたね！ KOKOROのTOKIMEKIを！」
やめろ。

君それ状態異常だよ。

KONNRANしてるよ。

『ねえアナタ、いったいいつワタシにメロメロをかけたの？ うう

ん、わかつてる。それはワタシたちが出会った初めてのTURN。小指から伸びた赤い糸の先、アナタに繋がっていたらいいな』

っていうこの一文なんかもう、ポケモンへの愛が溢れていなければ書けませんよ！ もちろん、知識も。シンシアさんはきつと心が純粹で、可憐で聡明な人に違いありません！」

うへえ……シンシア？

ああ、この手記の持ち主が書いたペンネームか。

待てよ、シンシアだって？

サザナミ……シンシア……ポケモンに詳しい……

……うわあ。

俺、すごい心当たりあるわ。

「ほ、本当ですか!? お願いです、私をその人の所へ」

悪いけど、そいつはやめといたほうがいいと思うよ。

ポエム帳拾ったのは何年も前のことだろ？

そんな長い間、自分の胸の内をしたためた文を勝手に読まれてたなんて知れたら、俺だったらいい気はしないわな。

それに本職の人が頭下げに来ちゃったらもう、気まずくってどうしたらいいか解なくなっちゃうよ。

これが俺の知ってる奴の物かどうかも確かじゃないだしさ。

だからこれ、俺に預けてくれないかね？

ちゃんとシンシアに届けてあげるから。悪いようにはしないから、さ。

「……はい。貴方がそう言うのなら、お任せします。でもせめて、手紙だけでも」
もちろん。

きつとシンシアも泣くほど喜ぶぞ。泣くほどな……。

じゃあこいつは俺が預かっておくとして。

次回作も頑張ってくれよ、シキミ先生。

楽しみにしてるからさ。
「あ……はい！ ありがとうございます！」

出来ればこの前発売した本の背表紙にサインをだね。

「わわ！ 私のサインなんかでよければ、喜んで」
そんなこんなで。

照れながらも自分が出版した本にサインをしている彼女が三人目の四天王、シキミなのであった。

戦闘は特に描写することもなく、つつがなく終わりましたよ、と。げきりんぶつぱでね。

ゴーストポケモンはトリツキーな奴が多いから、ゴリ押しに頼ることになっちゃったんだよなあ。

「そういえばクロイさん、いきなりバトル始めちゃって聞いていませんでしたけれど、今日はどうしてリーグに？」

うん、ジャガさんからの依頼があつてね。

地下地盤の調査に来ただけで、アデクさんいないみたいだし、どうしようかなあと。

あー、アデクさん本当どこ居るんだろう。

あの人の放浪癖はどうにかならないもんかね。

「アデクさんに会いに……師匠と弟子……」

バトルじゃなくて、人生哲学の師匠だけどね。

戦う哲学者っていうか、天狗っていうか。

何だかんだで憎めないんだよなあ、あの人。

不思議な魅力がある人だよ。

皆アデクさんを慕っていて、だからあの人の周りには人が集まるんだよな。

俺もあの人のことが好きだから、ロハで働いてやろうかなって気になるんだし。

「好き……!?!」

それで……あれ？

おーい、シキミ？

どうしたよ、息が荒いぞ。

「はあはあ……はあはあ」

「ハアハア……ハアハア」

ポチ、お前もか。

しばらく静かにしていたと思っただらお前は。
シキミも、君よだれ凄いで。

「おや失敬。うふ、うふふ、うふふふふふ！　じゅるりじゅるじゅる
！」

「ジュールジュール！」

何か軽石がべによべによになって来たんだけども。
気のせいかな。

心なしか室内の空気が重苦しくなってきたような。

「求めあう二人……禁断の関係……好きですアデク師
匠、わしもお前を愛しているぞクロイ……ぶつかり合う筋肉、
飛び散る汗、漏れ出る苦悶の声！」

「モエルーワ！」

「フレツシュハム！　餡かけチャーハン！」

「ホイホイチャーハン！」

なんだそれはやめろ。

ポチのクロスフレイルム！　じゃねえよ！

「キタコレ！　これで勝つる！　次の即売会はもらった！　お・お・
お、天界におわしますテトリス神よ……今こそ我に力を！」

「凹凸！　凹凸！」

腕を上下させるな！

お前らが何を言っているのか一個も解らねえよ！

いやだよ！　合体はしねえよ！

俺のは排出機能しか備わってないよ！

やめて脳内クロイに無理させないで！

おい、ペンを執るなよ。お前は一体何の作家なんだよ！

物書きさんだろうが何で漫画絵を描いてるんだよ！

無理だつて！　入らないつてば！

らめええ！

「クロイ×アデク！　クロイ×アデク！　ひゃっはー！　モエテキ
とうわああああ！」

「ヒヤツハー！　ソリヤモエ……ネーワ」

自信満々な顔して肩に手を置くな親指立てるなウインクするな！
俺は俺の尊厳を守るために貴様と戦わなければならないようだな
あ、ポチイイイイ！

喰らえりやあ、インファイトオオオオオ！